第19回高大連携教育フォーラム　報告集

探究的な学びから研究へ

―教育改革のジャンピングボードとなるためには―

京都高大連携研究協議会
京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

第19回高大連携教育フォーラム　報告集

探究的な学びから研究へ

―教育改革のジャンピングボードとなるためには―

京都高大連携研究協議会
京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

目　次

開会挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

林　　信康（京都高大連携研究協議会 運営委員長／京都女子中学校・高等学校 校長）

趣旨説明 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

基調講演 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

探究的な学びは大学での学びにどのような影響をもたらすのか

山田　剛史（関西大学 教育推進部 教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

事例報告① ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

村高発「地域を育てる学力」への挑戦
～若者が地域を創る～

岡田　厚志（兵庫県立村岡高等学校 教頭）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

事例報告② ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

ＲＥＡＬＩＺＥ！ゼロから始めた探究の現在地
～生徒の「やりたい」をカタチに～

多々納　智（京都府立宮津高等学校・京都府立宮津天橋高等学校 教諭）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

パネルディスカッション ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

探究的な学びから研究へ

パネリスト　山田　剛史・岡田　厚志・多々納　智

コーディネーター　滋野　哲秀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室コーディネーター／
龍谷大学 文学部 教授）

第１分科会【国　語】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

国語科における探究的な学びのあり方
～「実社会」「言語文化」をキーワードに～

中島　涼太（京都市立紫野高等学校 教諭）
中川　　愛（京都市立堀川高等学校 教諭）
加藤　　健（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

第２分科会【地歴・公民】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

“知” の世界地図をつくろう
～探究心を深める授業づくりにおける高大接続の在り方～

小林　未来（京都府立東宇治高等学校 教諭）
神代　健彦（京都教育大学 教育学部 准教授）
藤田　五樹（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

第３分科会【理　科】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89

探究的な学びのための環境づくり

松川　真美（同志社大学 理工学部 教授）
高野　拓樹（京都光華女子大学 教授／京都大学 特任教授）
野々垣雅稔（ノートルダム女学院中学高等学校 ＳＴＥ＠Ｍ探究コース長）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91

特別分科会①【高大接続】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99

探究活動とアドミッション
～入試や接続教育で高校までの探究活動をどう位置づけるか～
（共催：一般社団法人大学アドミッション専門職協会）

泉　雄二郎（島根大学 大学教育センター 教授）
美濃地裕子（島根大学 大学教育センター 准教授）
綾部　　有（関西学院大学 入学センター 専任職員）
木村　拓也（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 准教授）
山本以和子（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111

高大社連携フューチャーセッション成果報告
～実行委員会によるセカンドステージを振り返る～

2021 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員
鮫島　輝美（京都光華女子大学 健康科学部 准教授）
杉岡　秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
滋野　哲秀（龍谷大学 文学部 教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114

参加者アンケート結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121

2021 年度京都高大連携研究協議会役員・委員一覧 ・・・・・・・・・・・・・ 128

※各登壇者の職名は 2021 年 12 月 4 日時点のものです。

開会挨拶

林　信康（京都高大連携研究協議会 運営委員長／京都女子中学校・高等学校 校長）

ただいまご紹介にあずかりました、京都高大連携研究協議会運営委員会委員長、京都女子中学校・高等学校の林でございます。よろしくお願いいたします。第 19 回高大連携教育フォーラムの開催にあたり、主催者を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。

本フォーラムは、毎年、高等学校・大学間の接続教育における国内動向の情報共有と、京都における取り組みの情報発信および事例研究を目的に開催しております。今年度は、三位一体で高大接続改革が進められる中、高等学校における探究的な学びは、生徒・学生に何をもたらし、大学での研究にどのようにつながっていくのかという観点から、探究的な学びの可能性を探るべく「探究的な学びから研究へ―教育改革のジャンピングボードとなるためには―」をテーマとして設定いたしました。

今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、本フォーラムの参加者の皆さまおよび登壇者の先生方の健康と安全の確保のため、オンラインでの開催とさせていただきました。ライブ配信によるオンライン開催のため、不手際が生じるかもしれませんが、何とぞご容赦いただきますようよろしくお願いいたします。

また、オンライン開催にも関わらず、全国から高等学校、大学の教職員、学生、教育関係者など多くの方々にご参加をいただきましたことを、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

本日のフォーラムが皆さまにとりまして、新たな発見の場となり、これからの教育活動に生かすことができる、実りある機会となれば幸甚に存じます。

最後に、ご多用中にも関わらず、本フォーラムへのご参加をいただきました皆さま、また登壇をご快諾いただきました先生方に感謝申し上げますとともに、皆さまのますますのご健勝と今後のご活躍を念願いたしまして、開会のごあいさつとさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。

趣旨説明

探究的な学びから研究へ
―教育改革のジャンピングボードとなるためには―

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）

（スライド１）第 19 回のフォーラムを開催するにあたって、趣旨説明をさせていただきます。

サブタイトルに刺激的なテーマを掲げさせていただいていますが、今回のフォーラムでなぜこのテーマを設定したのかをお話しさせていただきます。

（スライド２）この間、高等学校教育、大学教育、そして大学入学者選抜の三位一体の高大接続改革が進められています。その中で、昨年度から大学入学共通テストが実施され、今年度は２年目になります。

（スライド３）新たなカリキュラムに基づく 2025 年度からの入試のあり方も議論が進んでいるところです。その中で、もう一度、2014 年から進められてきた高大接続改革を振り返ります。

小学校、中学校、そして来年度からは高等学校でも、新たな教育課程に基づいて授業が始まっていく中で、高校と大学の教育の接続をどのように考えていくのかが大きな課題であります。

（スライド４）第 15 回、第 16 回のフォーラムは、学習指導要領の改訂を受けて「いま育成すべき力は何かをともに考える」というテーマで２回にわたって行ってきました。かなり大胆な教育課程の改訂でしたので、そのことにまず共通理解を持ちながら、高校・大学がどのようにつながっていくべきなのかを考えてきました。

（スライド５）昨年、一昨年の、第 17 回、第 18 回のフォーラムでは「『教育の接続』としての入試改革」と題して２回にわたって取り組んできました。

この教育接続の中で、大学入試という問題があります。大学入学共通テストが昨年度から始まり、さまざまなトラブルがあり当初予定されたことができなかったことで、昨年度から今年度にかけて幾つもの会議が開かれ、提言が出されたり、取りまとめが行われたりする中で、当初に予定されたこととは大きく変わってきました。

けれども、入試改革という議論でとどまらず、高校生・大学生の学びがどのようにつながっているのか、大学入試が断ち切ることなく、その学びが続いていく形にするにはどのようにしたらよいのかを、正面を切って取り上げて考える時期であろうということで、今年度は「探究的な学びから研究へ」というテーマを掲げてフォーラムを開催するに至りました。

（スライド６）大学入試のあり方に関する検

討会議の提言でも、教育の一環としての入試ということが、原則の３つ目で掲げられています。今回のフォーラムでも、大学側から、そして高校側から、どのようにつながっているのかをしっかり押さえていきたいと考えています。

（スライド７）そこで重視されるのは、高等学校の新学習指導要領でも取り上げられる「探究的な学び」です。総合的な探究の時間が設けられる中で、小・中学校のように「探究的」とは言わずに「探究の見方・考え方」と、まさしく「探究」と正面から掲げて行うことになっています。しかし「探究」という名前を冠した部分にとらわれ過ぎてはいないか、そうした科目に焦点が当てられているだけではないかという問題もあります。

（スライド８）一方で、総合的な探究の時間を設けるときも、現場では、実際にどのように授業を構築していけばよいのかという問題がございました。今年の４月の時点でも、なかなかカリキュラムが分からない、何から始めたらよいのか分からないという声も随分あった中で、あと数カ月で実際に始めていかなければならない時期にあります。

やはりこの問題「探究的な学び」を正面に掲げて考えていく必要があると思います。

（スライド９）学習指導要領の詳細を見ますと、高校に求められるのは「質の高い探究」だと述べられています。解説の部分では「探究の過程が『高度化』する」「探究が『自律的』に行われる」の２つに触れられています。

（スライド 10）一方、教科として「理数探究基礎」「理数探究」という科目がありますが、理科と数学の探究のプロセスのイメージが示され、この中で「振り返り」の必要性が取り上げられています。順序立てて探究するプロセスがあるわけですが、最後に振り返りをすることで、さらに高次化していくこと、次の探究へと進んでいくことが、教科のレベルでも、総合的な探究の時間でも語られています。

（スライド 11）学習指導要領の解説の中では、探究のプロセスの部分が４つありますが、少し踏み込んで言えば、振り返り、考えや課題の更新がこのサイクルをさらに深めていく、高度化していく、自律化していくことにつながるのではないでしょうか。この点がもう少し記述されても良かったのではないかと考えます。

（スライド 12）このように見てくると、小学校や中学校とは違って「探究の見方・考え方」は高等学校における独自性です。アンダーラインを引いていますが「統合的に活用する」「複雑な事象」「自己の在り方生き方」という点で、高校生ならではの「探究の見方・考え方」を追究していこうと、意識されていることがわかります。

（スライド 13）総合的な探究の時間の解説でも、３点にわたって、教科との違いもはっきりさせ、それぞれの特徴を示しています。総合的な探究の時間で行う部分と教科で深める部分、同じ探究という言葉を使っていても、位置付け方やニュアンスが随分違っています。この点を踏まえておく必要もあると思います。教科と総合的な探究の時間を含めた教育活動の中で、どのように「探究的な学び」を深めていくのかが問われています。

（スライド 14）教科のレベルと総合的な探究の時間のレベルで、それぞれのプロセスの違いを示しています。

（スライド 15）そのようなことを意識しながら、実際に高等学校における探究的な学びが、大学の研究にどのようにつながっていくのか、高校生・大学生一人一人にとって何をもたらすのかを真剣に考える時期に来ています。それぞれの立場を超えて、一緒に考えていく場を、このフォーラムが提供したいと考えています。

今日は、大学の側から関西大学の山田先生、高等学校の側からは兵庫県立村岡高校の岡田先生、京都府立宮津高校・宮津天橋高校の多々納先生をお招きして、実践を踏まえて、高校か

ら大学への接続をしっかりと考えていきたいと思います。特に地域に根差し、地域をつくる実践をお聞きできると楽しみにしております。先生方、どうぞよろしくお願いいたします。私からは以上です。ありがとうございました。

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）

スライド1

第19回 高大連携教育フォーラム

探究的な学びから研究へ

～教育改革のジャンピングボードとなるためには～

趣旨説明

大学コンソーシアム京都 高大連携推進室
長谷川　豊（京都府立大学）

スライド2

本フォーラム趣旨

- 急激に変化する時代の中で求められる資質・能力を育むべく、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三位一体で改革が進められている。
- 大学入学共通テストでは思考力・判断力がいっそう問われるようになり・・・

スライド3

「高大接続改革」＝三位一体の改革

2014中教審答申　2015高大接続改革実行プラン
2016高大接続システム改革会議「最終報告」

● 国際化、情報化の急速な進展
↓
社会構造も急速に、かつ大きく変革。

● 知識基盤社会のなかで、新たな価値を創造していく力を育てることが必要。

● 社会で自立的に活動していくために必要な「学力の3要素」をバランスよく育むことが必要。

【学力の３要素】
❶ 知識・技能の確実な習得
❷ （❶を基にした）
思考力、判断力、表現力
❸ 主体性を持って多様な人々と
協働して学ぶ態度

学力の３要素を多面的・総合的に評価する
大学入学者選抜

高等学校教育・大学教育・大学入学者選抜の一体的改革
高大接続改革

学力の３要素を育成する
高等学校教育

高校までに培った力を更に向上・発展させ、社会に送り出すための
大学教育

（出典）大学入試のあり方に関する検討会議（第18回）
R2.11.27【参考資料2】大学入学者選抜関連基礎資料集

スライド4

学習指導要領改訂の考え方　2016中教審答申　2018高校改訂

育成すべき資質・能力の３つの柱

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く**知識・技能**の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか　成果

第15&16回フォーラム「いま育成すべき力は何かをともに考える」

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「社会に開かれた教育課程」の実現
各学校における**「カリキュラム・マネジメント」**の実現

素材　**何を学ぶか**　**どのように学ぶか**　方法

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない。

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

※高校教育については、高等学校学習指導要領の趣旨が大学入学者選抜で問われることが前提になっており、そうした点を克服するため、高等学校の指導等を通じた、抜本的な改革等を進める。

スライド5

大学入学者選抜改革　この間の動向

◆「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する入試に転換
◆「大学入学共通テスト」2020年度開始　2024年度新学習指導要領対応
◆「大学入試のあり方に関する検討会議」提言　2021年7月

	【2019年度まで】	➔	【2021年～　2025年度～】
共通テスト	マークシート式問題のみ	記述式問題（国語・数学）の導入 ✖	マーク式問題の工夫・改善 **記述式出題**は、総合型・推薦型を含む各大学入試で改善する方向へ
	英語「読む」「聞く」のみ 配点：筆記200点 リスニング50点	4技能評価へ転換　民間の資格・検定試験活用 ✖	リーディング100点、リスニング100点の配点 総合的な英語力は、各大学が「**外部検定を活用**」する方向が現実的
個別選抜	学力の３要素が評価できていない入試 早期合格による高校生の学習意欲低下	主体性等評価ツールの高大接続ポータルサイト「Japan e-Portfolio」運営許可取消 ✖	「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」審議のまとめ　2021年3月 ■引き続き**学力の3要素を多面的・総合的に評価**する方向で改善　「**主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度**」のみの評価ではなく3要素で ■**調査書**の記載内容等の見直し・簡略化、電子化

第17回&第18回フォーラム
「『教育の接続』としての入試改革」

スライド6

大学入試のあり方に関する検討会議　提言（概要）2021年7月8日

第１章　大学入学者選抜のあり方と改善の方向性

１．大学入学者選抜に求められる原則

原則① 当該大学での学修・卒業に必要な能力・適性等の判定
・各大学が主体的に実施　・一定のルールをガイドラインとして定めることも重要
・卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針と連動した入学者受入れの方針の策定の必要性
※選抜という視点に加え、大学と入学者との望ましいマッチングを図る視点も重要

原則② 受験機会・選抜方法における公平性・公正性の確保
・同一選抜区分での公平な条件での選抜、入試情報の公表（形式的公平性の確保）
※同一日・同一試験問題による選抜のみでなく、明確な選抜基準の下、多様な選抜資料を活用することを含む
・地理的・経済的条件、障害のある受験者への合理的配慮　等（実質的公平性の追求）

原則③ 高等学校教育と大学教育を接続する教育の一環としての実施
・高大の円滑な接続（生きて働く知識・技能、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の涵養を目指す教育改革に資する選抜）
・入学志願者への教育上の配慮（教科・科目等を変更する場合は２年程度前の告知の必要性、入試日程等の遵守）

２．これまでの教訓を踏まえた大学入学者選抜の改善に係る意思決定のあり方

（１）議論の透明性、データやエビデンスの重視、多様な意見聴取
（２）実現可能性の確認、工程の柔軟な見直し
（３）高等学校教育から大学教育までの全体を視野に入れた検討の必要性

３．コロナ禍での大学入学者選抜をめぐる状況変化

（１）大学入学共通テストの重要性の高まり（セーフティネット）
（２）面接試験等におけるオンライン化の進展
（３）緊急時に入試日程等を協議する仕組みの強化の必要性
（４）大学入学者選抜に活用される資格・検定試験の安定的実施の課題
（５）秋季入学等の入学時期弾力化への対応の必要性

４．入試システム全体に目配りした総合的な検討の重要性

（１）一般選抜と総合型選抜・学校推薦型選抜との役割分担
✔総合型選抜・学校推薦型：一般選抜に比較して丁寧で多面的・総合的な選抜（口頭試問、小論文等の高度な記述式問題の出題等も可能）、入学時期の弾力化にも柔軟に対応可能、感染症耐性の向上等の意義

（２）一般選抜における大学入学共通テストと個別試験との役割分担
✔共通テスト：大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度の評価を主とし、安定的で確実な実施を一層重視（セーフティネット）
✔個別試験　：各大学の入学者受入れの方針に基づき、当該大学が必要とする能力・適性等の評価を一層重視

3

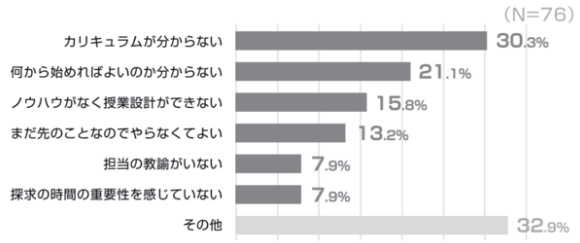
スライド7

本フォーラム趣旨

- ・・・高等学校の新学習指導要領では**探究的な学び**が重視されている。
- **探究的な学び**が、高等学校と大学、地域社会で連携して取り組まれている一方、「探究」を冠した時間や科目の進め方にのみ捉われてはいないだろうか。

スライド8

総合的な探究の時間の準備をしていない理由(2021年4月時点)



調査テーマ:「総合的な探究の時間」に関する高校教員を対象とした調査
調査方法:インターネット調査
調査期間:2021年4月9日(金)～11日(日)
有効回答数:全国の教職員200名
実施機関:株式会社クロス・マーケティング
出典)Edv Future株式会社が2022年度から新設される「総合的な探究の時間」に関する意識・実態調査を実施
～全国の高校の38%は探究学習の準備を実施していないという実態が明らかに～ 2021年5月11日
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000006.000065750.html

スライド9

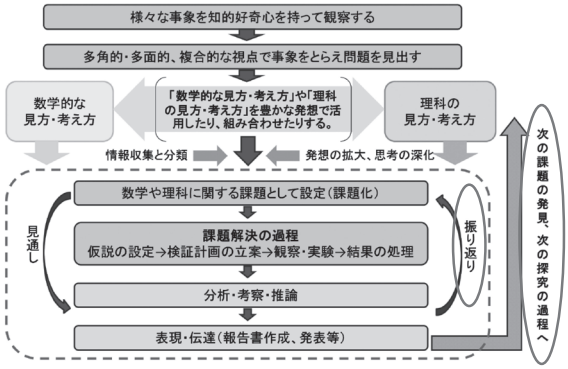
高校において求められる「**質の高い探究**」
『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編』(平成30年7月)より

1.探究の過程が「高度化」する
① 探究において**目的と解決の方法に矛盾がない**(**整合性**)
② 探究において**適切に資質・能力を活用**している(**効果性**)
③ **焦点化し深く掘り下げて**探究している (**鋭角性**)
④ **幅広い可能性**を視野に入れながら探究している(**広角性**)

2.探究が「自律的」に行われる
① **自分にとって関わり**が深い課題になる(**自己課題**)
② 探究の過程を**見通し**つつ,**自分の力**で進められる(**運用**)
③ 得られた知見を生かして**社会に参画しようとする**(**社会参画**)

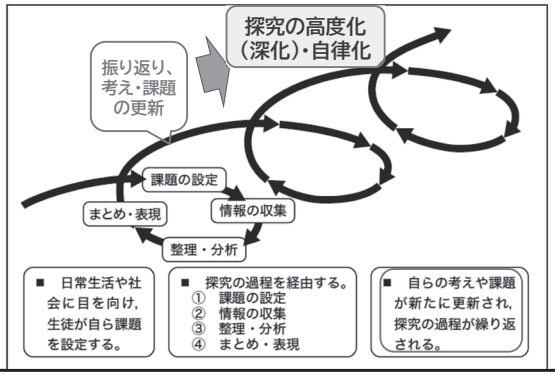
スライド10

高等学校の数学・理科にわたる探究的科目の学習過程(**探究の過程**)のイメージ
『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 理数編』(平成30年7月)より



スライド11

探究の過程と生徒の学びの姿
『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編』(平成30年7月)より



スライド12

総合的な探究の時間の目標と「**探究の見方・考え方**」
『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編』(平成30年7月)より

- 目標 **探究の見方・考え方**を働かせ,**横断的・総合的な学習**を行うことを通して,**自己の在り方生き方**を考えながら,**よりよく課題を発見し解決していく**ための資質・能力を育成する
- 「**探究の見方・考え方**」 各教科・科目等における見方・考え方を**総合的・統合的に活用**して,**広範で複雑な事象**を**多様な角度から俯瞰**して捉え,**実社会・実生活の課題**を探究し,**自己の在り方生き方**を問い続けること

スライド 13

総合的な探究の時間の探究と**教科・科目**の探究との違い
『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説　総合的な探究の時間編』(平成30年7月)より

①学習の対象や領域は，特定の教科・科目等に留まらず，横断的・総合的な点
　総合的な探究の時間は，実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する事象を対象としている

②複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究するという点
　総合的な探究の時間では，実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を**様々な角度から俯瞰して**捉え，考えていく　（cf.教科・科目の探究は，その教科・科目における**理解をより深める**ことを目的に行われている）

③総合的な探究の時間における学習活動が，**解決の道筋がすぐには明らかにならない課題**や，**唯一の正解が存在しない課題**に対して，最適解や納得解**を見いだすことを重視**しているという点

スライド 14

「理数探究」と「総合的な探究の時間」における探究の過程
『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説　理数編』(平成30年7月)

理数科	総合的な探究の時間
① 課題の設定 自然や社会の様々な事象に関わり，そこから数学や理科などに関する課題を設定する。	① 課題の設定 体験活動などを通して，課題を設定し課題意識をもつ。
② 課題解決の過程 数学的な手法や科学的な手法などを用いて，仮説の設定，検証計画の立案，観察，実験，調査等，結果の処理などを行う。	② 情報の収集 必要な情報を取り出したり収集したりする。
③ 分析・考察・推論 得られた結果を分析し，先行研究や理論なども考慮しながら考察し推論する。	③ 整理・分析 収集した情報を，整理したり分析したりして思考する。
④ 表現・伝達 課題解決の過程と結果や成果などをまとめ，発表する。	④ まとめ・表現 気付きや発見，自分の考えなどをまとめ，判断し，表現する。
※ 指導上の配慮事項 探究の過程は①～④の必ずしも一方向の流れではない。探究のための具体的な方法を固定して考えず，探究の過程を適宜振り返りながら改善させる。	※ 指導上の配慮事項 探究の過程は①～④が順序よく繰り返されるわけではなく，順番が前後することもあるし，一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。

スライド 15

本フォーラム趣旨

- 高等学校における**探究的な学び**は、生徒・学生一人ひとりに何をもたらし、**大学での研究**にどのようにつながっていくものなのか。
- 本フォーラムでは、**高等学校から大学を通した探究的な学びのあり方とそのつなぎ方**について、生徒・学生・教職員が立場を超えて同じ場でともに考え、探究的な学びの可能性を探りたい。

基調講演

探究的な学びは大学での学びにどのような影響をもたらすのか

［講　師］　山田　剛史（関西大学 教育推進部 教授）

皆さま、改めまして、こんにちは。関西大学の山田です。私は、今、非常にどきどきしておりまして、その理由の１つは、参加者を見たときに、たくさんの大学と高校の名前が並んでいて、このようなコロナ禍の中ですが、沖縄や北海道など、全国からたくさんの人がここに集まっているのを見られて、このような場はなかなかないと、非常にテンションが上がりました。もう一つは、約２年のこのコロナ禍の間にも、個人的に、いろいろなところで講演や研修を行っていますが、全てオンラインで、全て家や研究室で机に座って、Zoom で行っていました。無観客ですが、久しぶりに舞台でお話しできるので、非常にテンションが上がっていますが、よろしくお願いしたいと思います。土曜の午後の休みの貴重な時間ですので、画面の向こうにおられる方は、リラックスして、聞いていただければ幸いです。

（スライド１）私に託されたものは、主に大学の立場からになると思います。もう一つは、データにもこだわってみようと思っています。高校の先生方にとっては、自分たちが育てた子たちが大学に行って、どのように学んでいるのかということを少しデータも交えて掴んでいただきたいのが１つです。大学の先生方にとっては、今、高等学校での探究の取り組みが非常に勢いを増してきている中で、その子たちが入ってきていることを受けて、大学でどのように迎えようかということを考えていただきたいと思います。今日は限られた時間ですが、そこをつないでいくところをお話ししたいと思っております。

（スライド２）自己紹介は、先ほど、ご紹介していただいたとおりですが、こちらをご覧のとおり、私にとって一番大事なのは、ディズニーが好きというところです。国立大学を３つほど経験して、去年、コロナ禍で初めて私学に異動しました。いろいろなお仕事もさせていただいている中で、先ほどもご紹介していただきましたが、東山中学・高校で顧問を務めていて、中高大で、生徒たちがどのように学び、成長していくのかを見ていくのが私のライフワークの１つです。

（スライド３）さて、どの辺から始めようかと思ったのですが、私たち大学にいる人間からすると、もちろん、大学院という選択肢もあるのですが、ここが基本的には社会に出る最後のステージです。そのため、私たちは、社会をかなり意識している、しなければならないと思っています。ただ、一方、高校の先生方にとって、どこを見て日々、生徒たちに関わっているかと

いうと、もしかすると大学入試が１つの目安になっているかもしれないですが、少し目線を先に向けていただきたいという思いがあります。なぜなら、基本的には、生徒は大学生になって、大学生は社会人になっていく、その社会がどのようになっているのかを学校関係者はさらにシビアに見ておく必要があるだろうというのが私の考え方です。なぜなら、もちろん、学校の先生や研究者になる人も一部いますが、ほとんどは普通の社会人になって、一般の市民になって出ていきます。そのため、その社会がどのような状況になっているのかを知るところから、学校教育のあり方を考えていきたいというのが私の基本認識です。

（スライド４）その社会がどのようなものかというと、本当に簡単になのですが、ここに書いてあるとおり、非常に不安定で、不確定な社会・時代です。そのような中で、さらにコロナが入って、今の若い子たちは本当に大変です。ここにも書いているとおり、いろいろな意味で価値観も変わってきている。少子高齢化という人口動態の変化があり、情報化社会が非常に速いスピードで進んでいる。そして、今、非常に問題になっている格差の拡大の問題。このような社会的な問題が山積みの中で、彼らは自分たちで人生を切り開いていかないとならない。左の文章の一文ですが「何をやったら『100 点』か分からない」という正解がない状況の中で、私たちは、教育機関の中で彼らに何を伝えていかなければならないのかを、本気で考えないとならないのだろうと思います。

（スライド５）それでは、子どもたちがその社会を生きていくために、社会は一体どのような力が必要だと思っているのか。それに関する、さまざまなデータがあります。１つの例として、日本経済団体連合会が実施した調査です。左が文系、右が理系です。経済・産業団体がそれぞれの学生、学卒者に求める力は何ですか、というランキングです。細かくは、またご覧いただければと思うのですが、１位に上がっているのが「主体性」です。これは、文系も理系も一緒です。２位が「実行力」、３位が「課題設定・解決能力」と来ています。高校の先生も、大学に行ったら専門の分野にたくさん行けると、大学の先生も、専門知識を与えるのが学びだと教えているかもしれませんが、企業・社会はどのように見ているかというと、専攻分野の基礎的・専門的な知識の要求が決して高いわけではないということを事実として、私たちは見ておく必要があります。むしろ、そのような状況の中で、人間だからできることに社会は非常に関心を向けているわけです。

（スライド６）この主体性、実行力、課題設定・解決能力をどのようにして身に付けるのか。もちろん、理由は、経済・産業団体が求めているから行わなければならないという単純なロジックではないのですが、いったん、それを仮定したときに、今、言われている「主体的な学び」や「アクティブラーニング」は何なのかということから、ここに溝上先生がつくられた表や定義を挙げています。学習指導要領的に言えば、この真ん中の「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び」。正直に言うと、これができたら十分ではないかと個人的には思っています。逆に言えば、これが大学生でできているのかというと、相当厳しいと思います。

（スライド７）主体的に学ぶ上で、私が考える非常に重要な要素は、学ぶことが楽しい、学ぶことが好きだという感覚をどれくらい醸成できるかだと思います。その１つの根拠として、私も少し関わっていた、東京大学とベネッセが実施した親子パネル調査の結果があります。子どもたちは勉強が好きかどうか。横軸は学年で、それぞれの学年に対して 2015、2016、2017、2018 の４カ年のデータです。これを見て、皆さ

まはどのように感じられるでしょうか。小学校４年生ですが「3.00」が「まあ好き」という程度ですので、絶対値として、どの程度高いかというところがありますが、それが、小５、小６で急激に下がって、中１になってくるとがくんと落ちて、さらに中２、中３とまた落ちて、高１になってさらに落ちて、高２、高３の受験期に少し上がる。この状態で大学に入ってきて、主体的に学べるレディネスができているかというと、残念ながらできていない子がほとんどだと思います。つまり、ここで失敗してしまうと、深い学びどころではないという話です。

（スライド８）これは実際の大学での一コマですが、この写真をご覧になって、この空間が、先ほどの「主体性」「実行力」「課題設定・解決能力」が本当に身に付く空間になっているのか。なっていないですね。これは某国立大学工学部の１年生の授業風景なのですが、大学の講義の一般的な光景です。もちろん、３年生で専門ゼミに入って、少人数になれば顔色も違うのですが、通常の講義風景はこのような感じです。これが１週間に十何コマもあって、それが１週間、１カ月、１年と続いて、一体その先に何があるのだろうかということです。

入学した時点でも、かなりこれに近い状態からスタートします。そのため、この問題から先ほどの出口まで上げていくのは、かなり大変な作業です。もちろん、これは高校だけの問題という話ではなく、私たち大学人の立場としても、ここをベースにしながら、学生たちが学ぶことに動機づけられて入学してくる状態を、より違う形で、どのようにしたらつくっていけるのかを考えていきたいと思うわけです。

なぜそのような話をするかというと、上にも少し書いていますし、この後も少しデータでお見せしますが、高校時代の学び方が大学での学び方に非常に影響しているということです。かなりリニアにつながっています。逆に言えば、そこで習得している勉強の仕方、例えば、先生が大事なことは全て板書してくれて、色を変えて「ここが大事だよ」「テストに出るよ」と言ってくれたことをひたすらノートに書き写すという習慣が、そのまま大学につながります。そのため、学生たちは何の違和感もなく、ただそこに座っていて、先生が「これが大事だよ」と言った瞬間に書き取り「これを書いておきなさい」と言ったら書き出します。けれども、自分からメモを取ることは、よほどでないとしません。なぜなら、そのように教わっていないからです。そのため、現場の先生方も本当に大変だと思うのですが、大学でも、主体的な学びに持っていくためにはかなりの力が要ります。

（スライド９）これは、冒頭の趣旨説明でありましたので、割愛します。そのようなところから社会にどのようにして出ていくのかを見据えて、大学と高校、そして、その間にあり、溝をつくり出している原因の根源でもある大学入学者選抜を、一体的に変えていかないとならないというストーリーがあります。

（スライド10）結論としては、その中で「探究」というのは、必ず必要だと個人的には思っています。先ほどもありましたが、ただ「探究」と冠した教科の中だけで行うというよりは、濃淡の差こそあれ、むしろ全ての教科の中で探究的な要素が入っている状態が、私としては理想的だと思います。

そして、その意義は「勉強」。学生たちは大学に入っていつまでたっても、自分たちのこと

を生徒と呼ぶのです。「生徒と学生は何が違うか、調べてごらん」というところから始めるのです。生徒と学生、言い方を変えれば、勉強と学問・研究とをつないでいく「探究」。「強いて勉める」という状況から「問うて学ぶ」にどのようにトランジットできるか。それから、自分の頭で考え、表現する経験を通じて汎用的能力を高める「探究」。教室と社会、自己と他者とをつなぎ、学びへの興味・関心を育む「探究」。これだけ見ても、探究をするしかないだろうと個人的には思うくらい意味のある活動だと思います。

（スライド 11）それをデータで見ていきたいと思います。これは入り口に関わるデータで、ベネッセの木村さんが書かれた調査の原稿から抜粋しています。入試形態は一般、推薦、ＡＯ。左側が高校時代の対話的な学びの経験のスコアです。左側を見ると、ＡＯで入ってきている学生の高校時代の対話的な学びの経験率は、高難易度の大学で非常に高いです。つまり、高難易度の大学にＡＯで入っている子たちは、対話的な学びを非常に多く経験しています。右側の大学に入ってからの主体的な学びのスコアを見たときにどのようになっているかというと、こちらも高難易度偏差値において、ＡＯで入った子たちの主体的な学びのスコアが非常に高いです。つまり、ご覧のとおり、高校時代にどのような学びを経験したかは、入試区分で見たときにも、ＡＯで顕著に出ていることが窺われます。

（スライド 12）そのような入試改革は、今、全国で増えてきています。いわゆる探究型入試と言われるものが出始めました。これから、かなり広がることが予想されます。もちろん、探究型入試と探究活動だけでつなぐのは、個人的にどうかと思うところもありますが、大学側としては、従来の入試方式ではない形で採った方が、自分たちにとってもメリットがあると感じ始めています。

もう一つの要素は、少子化や経営的な厳しさがありますので、最近の大学の入試は、あの手この手を使わないと志願者を集められない状況があります。だからというわけではないですが、選抜という考え方ではなくて、入試そのもので学生を育てていく、高校から大学に行く入試という取り組みを通して育てていくという発想です。これが、とても大事だと思います。最後に紹介する京都大学の事例も、その１つです。

（スライド 13）これも、先ほど、スライドで紹介されていましたので、割愛するのですが、右側にある図が非常に大事です。同じようなことを言っているのですが「総合的な学習の時間」の課題を解決することと自分のあり方を別々に考えていく方法ではなく、むしろ課題を解決していく過程の中に自分を透過させて、その中で、自分と他人、自分の中での今と将来、そのようなことをいろいろ考えながら、探究的な課題に取り組んでいって、学びと成長を加速化させていく。それこそが、今、求められている「総合的な探究の時間」というイメージであり、これがとても大事だと思います。

（スライド 14）こちらの左側の図も先ほど紹介があったと思いますが、探究のサイクルです。大学では探究学習や探究活動とはあまり言わないのですが、それに非常に近いのは、いわゆる「ＰＢＬ」と言われる取り組みです。これは、大学でよく使われる言葉です。２つの意味があります。「Problem Based Learning」と「Project Based Learning」です。それぞれ出どころが、医療系または工学系で少し違います。医療系が「Problem」、工学系が「Project」で、分野によって使い方も違うのですが、いずれにしても「問題解決型学習」と言われ、実世界にある問題、リアルな課題を素材として扱っていく。

工学系であれば、ロボコンが１つの例です。細かい知識を全て積み上げてから「応用ロボッ

トをつくりましょう」ではなくて、最初に「ロボットをつくりなさい」というお題から出発する。それをつくっていく過程で、必要な知識をたくさん入れていく。そのプロジェクトのゴールに至る過程で知識を習得していく。要するに、知識から全て積み上げていく。日本の学校教育はほとんど「基礎から応用に」なので、現場の先生からすると、基礎がないのに応用ができないというロジックで、なかなか応用に行かずにいつまでも基礎をしている。そのため、モチベーションもなかなか上がらない。このようなところを、まず応用、課題から出発し、そこから戻していく、創成教育と言われる方法です。

これに一定の効果、意義があることは、高等教育の分野では以前から言われています。そのため、これと探究というのは非常に親和性が高いと思っています。「学生版の研究活動」とも言われています。これがうまく大学のカリキュラムの中に入っていって、うまくつながると、最終的にはキャップストーンプロジェクトである卒業論文や卒業研究につながっていく。さらに言えば、そこにつなぐための探究が高校時代にあると、高校の探究、大学初年次、２年次でのＰＢＬ、それから卒論・卒研のラインでつながっていくというイメージです。

（スライド 15）本学の入学者の全学の調査で、実際に、このように自由研究・発表の経験率が伸びています。それは、コロナ禍にあっても、ある程度増えています。

（スライド 16）これは、私自身が実際に、今、関西大学で担当し、マネジメントしている、初年次生向けの「プロジェクト学習１」というＰＢＬ科目です。このように、自分たちでグループをつくって、テーマを決めて、調査をして、プレゼンをするという初年次教育があります。少人数で行っています。そこにもパソコンがありますが、この２年間はコロナだったので、日本に来られない中国にいる留学生や基礎疾患のある子と Zoom でつながる、ハイフレックスと言われる形で、活動を続けることを行っています。

（スライド 17）また、高年次向けには「プロジェクト学習２」があります。これは、今、カリキュラム改革で、再来年度に向けて触っているところですが「プロジェクト学習２：自治体との連携」という科目も私が担当しています。具体的には、吹田市の抱える課題を役所と連携して行っています。例えば、水道部の広報であったり、男女共同参画センターの課題であったりなど、学生たちがグループをつくって、最終的には市役所でプレゼンをする取り組みです。今回はコロナ禍でできなかったので、プレゼンを動画にして、オンデマンドで役所の人たちに先に見てもらって、最後は Zoom でつないで、ハイフレックスで講評していただく。このような形も行いました。いずれにしても、大学の中では、入学から高年次にかけて、このような取り組みがいろいろな形で展開されています。

（スライド 18）もう１回、データに戻りますが、これもベネッセの調査です。高校時代に１つのテーマを３カ月以上かけて追究することを経験した子と経験していない子を左側に挙げています。データが 2016 年ですので、少し古いですが、約２割が経験した、８割が経験しなかったです。そのため、まだまだ実体としては「経験した」が少ないです。プロフィールに書いていますが、現状はＳＳＨやＳＧＨの学校の子たちが相対的に多くなっています。

入学時と現在、大学生活をしている中での３つの主体性のレベルです。「自分から積極的にやりたいことを探してやる」「与えられれば興味を持ってやる」「与えられても、よほど興味がなければやらない」の３つを、入学時点で３カ月以上のプロジェクトを経験した子とそうでない子、それから在学中に経験した子とそうでない子で見ても、これほどの差が出ています。つまり、先ほどのＡＯ入試とも関係するのですが、学びを経験した子としていない子では入り

口の時点でかなり差が出ています。そして、その差は、その後も、ほぼそのままスライドしています。そのため、やはり大事という話になります。

（スライド 19）これは、同じ経験ありと経験なしで「深い学び」の、ここに挙げている項目の得点の差を見ています。詳細は割愛しますが、最もポイント差があったのが、下から３番目の「理論、解釈や結論が提示されたとき、エビデンスがあるかどうか確認しようとする」で、探究経験があった子となかった子で最も差が大きく出ています。これは、大学での学びそのもので、研究においては非常に重要なものです。ほかも全てそうなのですが、これだけの差として表れています。

（スライド 20）前任校の京都大学でアセスメントを担当していた教育学部の初年次教育の効果検証の結果があるのですが、本当に簡単にお話しします。

（スライド 21）京都大学では 2016 年度に全学的に「特色入試」を導入しました。それと合わせて、初年次教育もリニューアルしたのが教育学部の事例です。今、大学でも非常に多いですが、従来は、いろいろな先生がオムニバスで自分の専門について話していました。それを刷新して、特色入試に切り替えて、特色で入ってくる子たちもいるから、初年次教育も変えましょうということで、探究型の初年次に変えたパターンです。入試も変えた、初年次も変えた。それを経験した子たちに、どのような学びの変化があったのかをアセスメントした結果の一部になります。

（スライド 22）これも同じです。３カ月以上の長期的な探究学習を経験したか否かで、ここに挙げるような深い学びのスコアがどのように変わったのかを縦断的に見ているものです。

（スライド 23）指標をスコア化するための因子分析の結果ですので、これはまたご覧いただければと思います。

（スライド 24）これも非常に細かいので、統計的な話はさておき「深い学び」の経験のところが赤になっています。これは、どのようなことかというと、経験があった子となかった子で深い学びのスコアに有意差があったという見方です。つまり、経験があった子の方が深い学びのスコアが高かったという話です。また、時期と書いているのは「Ｔ（タイム）１」が入学時点。「Ｔ２」が前期終了時点。「Ｔ３」が後期終了時点です。２地点と３地点、１地点と３地点とで差があるなど、時期の差は、どちらかというと大学の中での差です。「経験」の差は、高校時代の経験の差がそれぞれ出ているところがありますし、出ていないところもあります。そのように見ていただければと思います。

（スライド 25）したがって、改めて高校からつなげたいと思うところと、大学の中でしっかりと育てないとならない部分がそれぞれあるというのが、この結果から導き出される一つの印象です。

結論です。高校での探究活動は、予測困難な時代・厳しい社会を生き抜く力、特に汎用的能力、最近では認知能力や非認知能力など、いろいろな言い方がありますが、そのようなものを身に付ける上でも、大学での専門教育や研究活動に主体的に関与し、力を発揮する上でも、高校から大学、勉強から学問・研究への移行・適応を円滑にする上でも、探究は極めて重要な営みであり、高大接続の実質化の鍵を握っていると思います。また、先ほども申しましたが、特定の科目の中だけではなくて、アクティブラーニングの主体的・対話的で深い学びの展開も含めてです。大学でもそうですが、アクティブラーニングが大事だと言うと、アクティブラーニング科目のようなものを置いてしまって、それ以外は普通、では意味がないわけです。正課内外で組織的に展開していくことが期待される、というのが落としどころかと思います。

（スライド 26）以上で、私の与えられたお時

間になります。ご清聴、どうもありがとうございました。

◆質疑応答

Q：　東山中学・高校で行われている取り組みの顧問をなされている中で、今、中学校から高校、高校から大学という、このグラジュアリーにつないでいっている主体性の流れが、目に見える形で結実していると思われますか。例えば日記やポートフォリオなど、フォーマットの連動性もあると思いますが、主体性の連続性は、東山中学・高校で確認できますか。

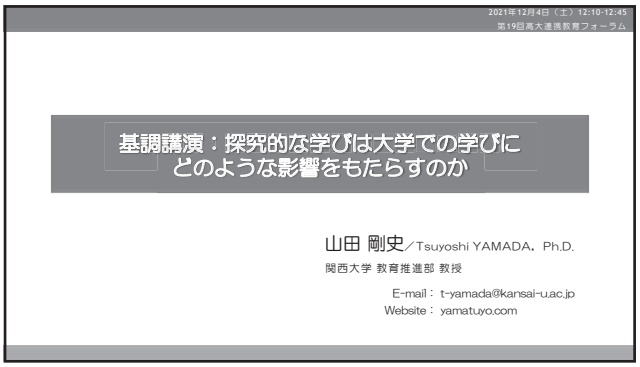
A：　アセスメントもしていて、今はコロナで止まっているのですが、やはり出ています。アクティブラーニング、主体的・対話的で深い学びの経験率が上がれば上がるほど、主体性も上がってきていることは確認できます。直接的には、それが答えかと思います。東山中学・高校の場合は、正課のみではなくて、正課外でもかなりいろいろ行っています。先ほど、日記とおっしゃられたのですが、東山中学・高校では「３年日記」と言って、冊子をつくって、中学３年と高校３年で日記を付けるという取り組みを行っています。毎日、日記を書いている子のアイデンティティーのスコアが非常に高い。しかも、親も一緒に書いているという子が京都大学に入学しました。中高という発達が未成熟な段階で、正課外でのホームルームの時間の使い方や日記、夢などの中で、主体性を育むツールをたくさんつくっているので、そのようなところでの伸びはかなりあるかと思います。

Q：　ＰＢＬと読み替えてもよいかもしれませんが、大学の初年次教育の中で探究型科目を導入するにあたって、テーマ設定などで工夫していることや注意されていることを教えてください。

A：　初年次教育は、高校の先生方にすると、言葉としては知っている方もいるかもしれないですが、幾つかタイプがあります。１つは、本当にスタディ・スキルのようなスキルセットを切り出して、プレゼンテーションスキルやレポートライティングを行う初年次もあります。もう一つは、今のＰＢＬのような形で、探究テーマを決めて行っていく中で身に付けられるプレゼンテーションです。私は、後者を割と推していますし、今の質問も後者の話だと思うのですが、テーマ設定は、かなり学生たちにとってリアリティーのあるテーマがよいでしょう。結論から言うと、学生のことをどれほど理解できているかがテーマ設定に表れると思います。学生たちが何に食い付くのか、何だったら面白いと思うのか。それは大学の先生がこのようにさせたいと思うものと違うかもしれないが、どのテーマだったらよいというよりも、むしろテーマのリアリティーと、そのテーマにどのように向き合わせるかのプロセスの方が大事です。逆に言えば、テーマはその人の専門性に依拠して、自由に設定すればよいのではないか。ただ、学生たちが１年間、あるいは半年間でできる課題を選ぶことです。あまり大き過ぎると何をしてよいか分からなく、例えば、環境問題を扱ってくださいでは広過ぎるので、どのような環境問題を扱ってほしいのかと、テーマの具体性を見せてあげるとよいかもしれないと思います。

山田　剛史（関西大学 教育推進部 教授）

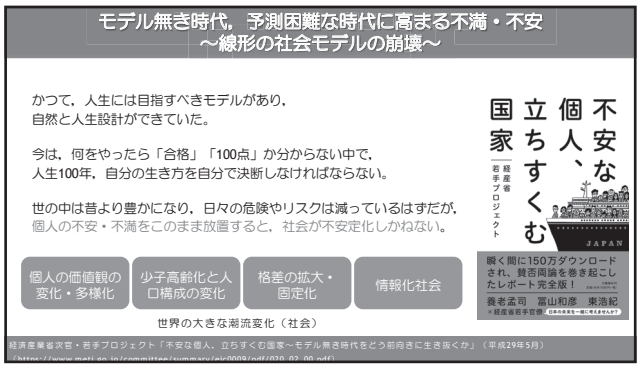
スライド1



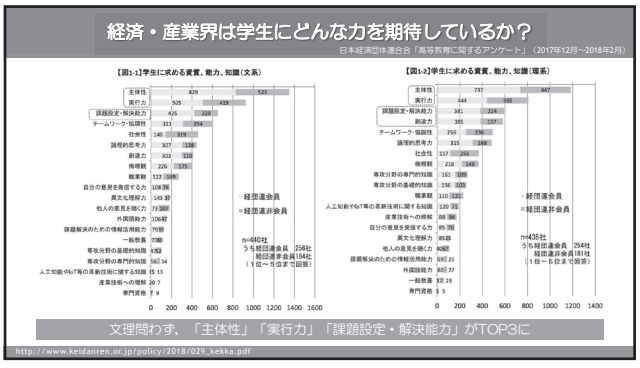
スライド2

スライド3

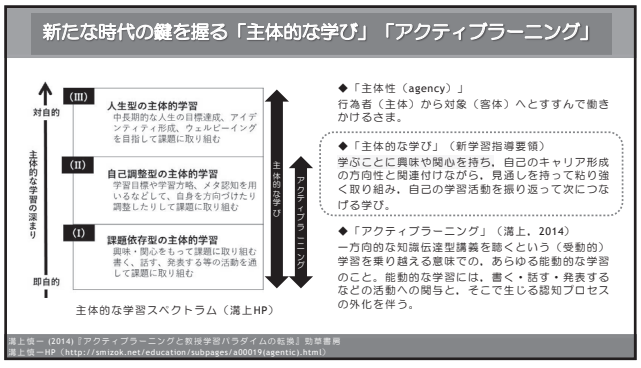
スライド4



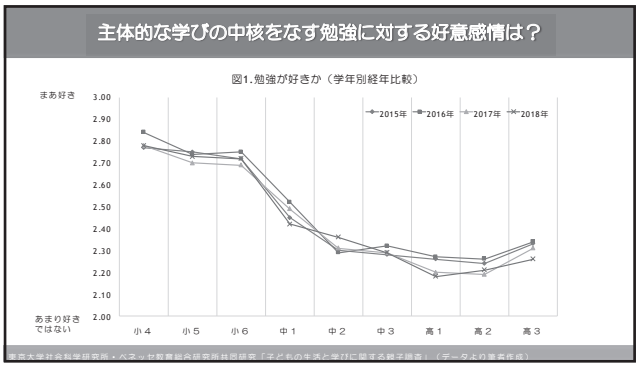
スライド5



スライド6

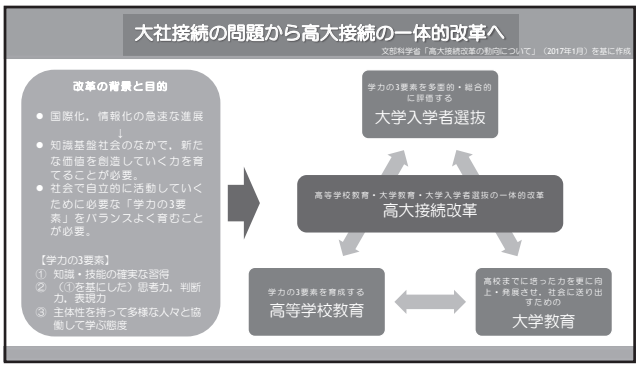


スライド7



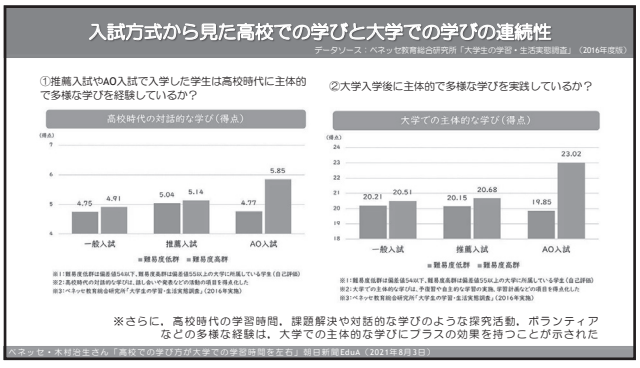
スライド8

スライド9

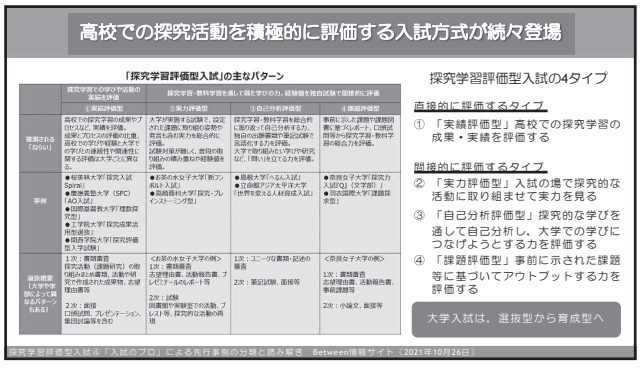


スライド10

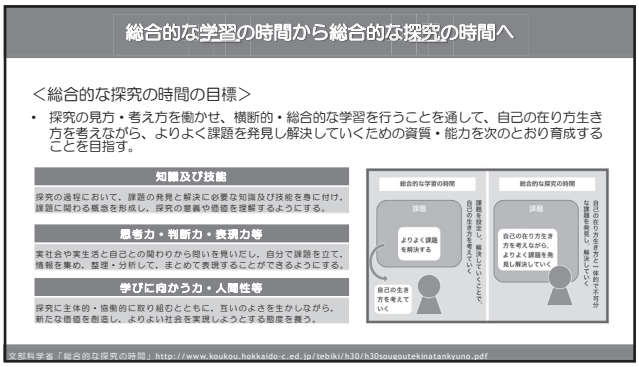
スライド11



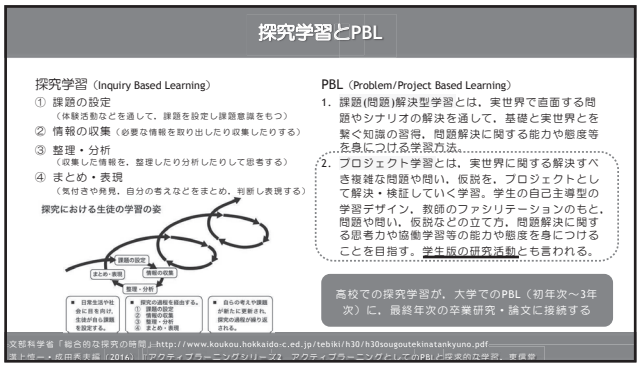
スライド12



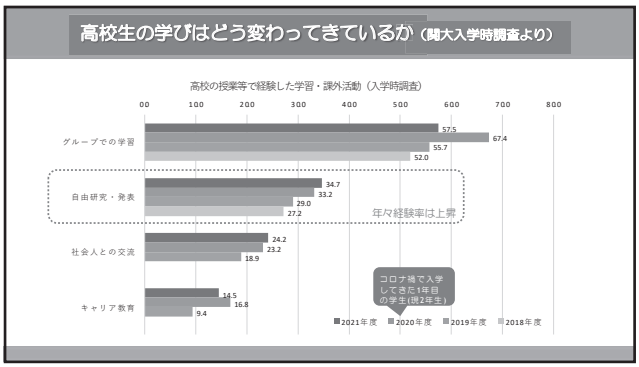
スライド 13



スライド 14



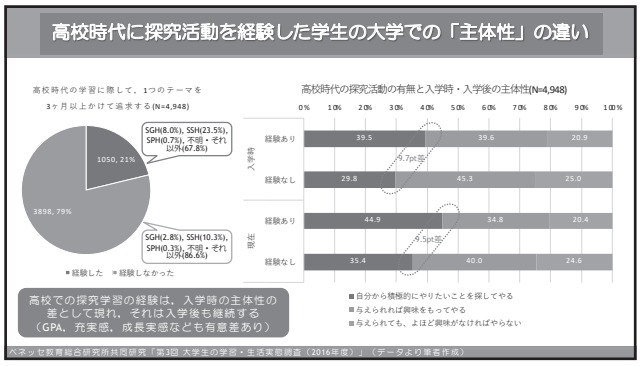
スライド 15



スライド 16

スライド 17

スライド 18



スライド 19

高校時代に探究活動を経験した学生の大学での「深い学び」の違い

高校時代の探究活動の有無による深い学びの差異(N=4,948)

項目内容(平均値の高い順に並び替え)	経験あり	有意差	経験なし	得点差
01.授業では、たとえ難しくても、好奇心をくすぐるようなことを学習したい	3.09	>	2.91	0.18
08.授業の課題を少しでも良いものに仕上げようと努力している	2.92	>	2.72	0.20
09.授業で疑問があればそのままにせずその意味を自分で理解しようとする	2.89	>	2.64	0.25
03.1つの授業で学んだことを、できるだけ他の授業に関連付けようと心がける	2.87	>	2.63	0.24
11.授業では、ものごとの背後にある理由や理屈を理解することが、自分にとっては重要である	2.88	>	2.60	0.28
02.学習をするときは、授業の内容を何度も繰り返して覚えるようにしている	2.83	>	2.59	0.24
12.授業の課題を仕上げるために他の学生と協働するようにしている	2.80	>	2.58	0.22
10.授業で新しい概念を理解しようとするときにはよく、それを実際の状況や日常の出来事に置き換えて考える	2.81	>	2.54	0.27
04.学習をするときは、教科書やノートを見返して重要な概念の概略（図や表）を描くようにしている	2.78	>	2.52	0.26
06.授業の内容を理解することが難しいときは、学習する方法を変えている	2.70	>	2.45	0.25
05.理論、解釈や結論が提示されたとき、エビデンス（証拠・論拠）があるかどうか確認しようとする	2.71	>	2.38	0.33
07.授業で示された内容が難しくても、自分には理解できるという自信がある	2.61	>	2.34	0.27

※「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法

高校での探究学習の経験は，大学での研究に繋がる深い学びに繋がっている

ベネッセ教育総合研究所共同研究「第3回 大学生の学習・生活実態調査（2016年度）」（データより筆者作成）

スライド 20

「探究」を軸に据えた高大接続一体改革

京都大学教育学部「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」の効果検証

《関連文献・発表》

1. 橋見孝・南部広孝・西岡加名恵・山田剛史・斎藤有吾（2016）「パフォーマンス評価を活かした高大接続のための入試－京都大学教育学部における特色入試の取り組み－」『京都大学高等教育研究』第22号，55-66.
2. 服部憲児・山田剛史（2017）「高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践(1)」『第22回大学教育研究フォーラム発表論文集』366-367.
3. 山田剛史・服部憲児（2017）「高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価：京都大学教育学部「教育研究入門」における実践(2)」『第22回大学教育研究フォーラム発表論文集』368-369.
4. 山田剛史・溝口侑（2019）「高大接続を視野に入れた探究型初年次教育～高校での探究学習を経験した学生はどのように学び成長するか～」『初年次教育学会第12回大会要旨集』74-75.

スライド 21

京大教育学部における初年次教育科目「教育研究入門Ⅰ・Ⅱ」

《実践概要》

初年次に設定されている通年の専門必修科目。「特色入試」の導入に併せて，2016年度より探究型科目に刷新。各系から3名の先生で担当。全体のコンセプトや大きな流れは共通化しているが，詳細は年度ごとに検討。アセスメントの結果を含め担当者間の引き継ぎを実施して，PDCAサイクルを実現。

教育研究入門Ⅰ（前期）	教育研究入門Ⅱ（後期）
【到達目標】 1. 共通テーマに対してグループで研究課題を設定して調査活動を進め，研究方法についての理解を深める。 2. 調査した過程と成果・課題について，ポスター発表形式で端的に伝えるプレゼンテーションを作成し，発表を行うとともに，質疑応答に対応する力を伸ばす。 【授業計画・内容（前期）】 1-4. オリエンテーション 5-7. グループ別活動 8-10. 中間発表会 11-13. グループ別活動 14-15. 全体発表会，フィードバック	【到達目標】 1.授業で取り上げた各分野の基本概念や研究方法論を理解する。 2.各自が設定した課題について調査・発表活動を経験することで，研究レポートを作成する能力を育成する。 【授業計画・内容（前期）】 1. オリエンテーション 2. 個人発表の準備 3-6. 講義・演習 7-11. 個人発表の準備とグループ別中間検討会 12-15. 成果報告とフィードバック

スライド 22

調査の概要

【調査対象】

2016年度～2018年度の教育研究入門Ⅰ・Ⅱの受講生187名（男性106名，女性79名，未回答2名）

【調査時期・方法】

前期開始時（4月：T1），前期終了時（7月：T2），後期終了時（1月：T3）の3時点で，授業時間内に質問紙を配付・回収。

【調査目的】

高校時代に3ヶ月以上の長期的な探究学習を経験したか否かが，入学後の探究型初年次教育に及ぼす影響について，学習・研究に対する取組方や身についた力の観点から検討を行うこと

【調査内容（本研究で使用する項目のみ）】

① 高校時代の長期的（3ヶ月以上）な探究学習（個人・グループ）の経験の有無（T1）
② 深い学び4項目（1因子）（T1，T2，T3）
③ 探究学習への取組方10項目（「研究に対する態度」「応用」の2因子）（T2，T3）
④ 身についた力11項目（「情報整理」「論理的思考」「説得的なレポート」「プレゼンテーション」など）（T1，T2，T3）

スライド 23

（参考）使用する尺度項目に関する因子分析結果

「深い学び」に関する因子分析結果
（最尤法，回転なし：α=.609）

	項目内容	因子負荷量
T2Q7_12	授業では，ものごとの背後にある理由や理屈を理解することが，自分にとっては重要である	.754
T2Q7_6	理論，解釈や結論が授業や文献の中で提示されたとき，それを支持するエビデンス（証拠・論拠）があるかどうか判断しようとする	.506
T2Q7_10	授業で学ばなければならないことがらの意味を自分で理解しようとする	.466
T2Q7_4	1つの授業で学んだことを，できるだけ他の授業に関連付けようと心がける	.421

「探究学習への取組」に関する因子分析結果
（最尤法，Promax回転：α=.647，α=.650）

	項目内容	因子負荷量	
T2Q6_8	扱った問題を分析し，パターン，違い，類似性などを明らかにした	.695	-.035
T2Q6_9	今回の探究では扱えなかった点や言及することが出来なかった点（限界点）を明確にした	.559	-.042
T2Q6_7	適切なソースからの情報を総合的に扱った	.506	-.038
T2Q6_4	複数の問題解決のアプローチを考え，適切なものを選んだ	.437	.200
T2Q6_6	あるテーマにおいて先行研究等でこれまで検討されていない側面を取りあげた	.378	.020
T2Q6_2	複数の学問分野（教育学，心理学，社会学など）の知見や理論などを考慮してこの授業の課題の結論を導き出した	-.019	.649
T2Q6_3	ある状況や場に基本的な知識・スキル・方法論などを，この授業の課題に応用した	.034	.644
T2Q6_1	この授業での学習内容の理解を深めるために，この授業外での諸経験(生活経験やボランティアの経験など)との間のつながりを意識した	-.042	.599

スライド 24

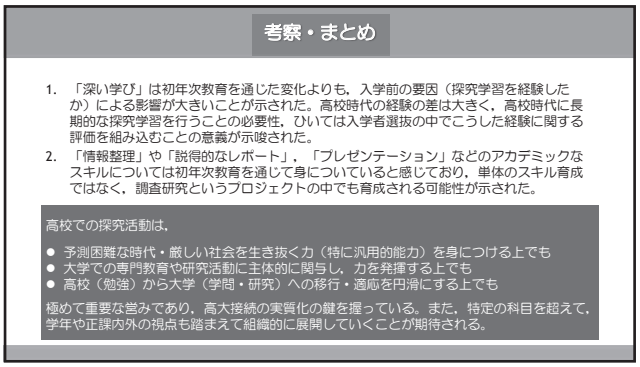
分析結果

図　高校時代の探究学習の経験の有無と各調査時期の平均値，SD，2要因混合計画の分散分析の結果

	高校時代の探究学習の経験	上段:平均値 下段:(SD) T1	T2	T3	分散分析結果(上段:F値 下段:η²) 経験		時期		交互作用
深い学び(4項目1因子)	あり	3.14 (0.43)	3.18 (0.42)	3.09 (0.62)	10.7	**	1.42		0.14
	なし	2.87 (0.51)	2.93 (0.46)	2.87 (0.46)	.059		.003		.000
探究学習への取組									
F1. 研究に対する態度(5項目)	あり		2.97 (0.47)	2.68 (0.47)	2.32		31.2	**	0.00
	なし		2.86 (0.49)	2.57 (0.45)	.012		.083		.000
F2. 応用(3項目)	あり		2.69 (0.68)	2.55 (0.73)	1.88		0.86		1.79
	なし		2.48 (0.55)	2.50 (0.55)	.010		.002		.004
学習成果(身につけた力に関する認識)									
情報整理	あり	3.00 (0.50)	3.00 (0.54)	3.16 (0.47)	7.43	**	4.03	*	1.77
	なし	2.72 (0.63)	2.93 (0.58)	2.91 (0.57)	.030		.016		.007
論理的思考	あり	2.67 (0.59)	2.78 (0.65)	2.82 (0.75)	0.07		3.51	*	0.48
	なし	2.65 (0.63)	2.88 (0.70)	2.81 (0.69)	.000		.010		.001
説得的なレポート	あり	2.00 (0.50)	2.45 (0.71)	2.45 (0.82)	4.95	*	15.6	**	1.23
	なし	1.92 (0.73)	2.19 (0.67)	2.16 (0.66)	.022		.053		.004
プレゼンテーション	あり	2.57 (0.84)	2.67 (0.72)	2.65 (0.75)	14.9	**	7.64	**	3.85 *
	なし	2.01 (0.76)	2.51 (0.74)	2.17 (0.67)	.066		.026		.012

※ **p<.01 *p<.05 +p<.10

スライド 25



スライド 26

事例報告①

村高発「地域を育てる学力」への挑戦
～若者が地域を創る～

［報告者］　岡田　厚志（兵庫県立村岡高等学校 教頭）

皆さん、こんにちは。兵庫県立村岡高等学校からまいりました、岡田と申します。本日は、このような場で発表させていただく機会を与えていただいて、本当にありがとうございます。私も、皆さんとともに学んで帰りたいと思っております。よろしくお願いいたします。

（スライド１）それでは、本校の取り組みにつきまして、今から発表させていただきたいと思います。たくさんのスライドをつくっておりますので、少し駆け足になるかもしれません。そのときは、またご質問等でよろしくお願いいたします。

（スライド２、３）まずは、概要説明からです。本校は兵庫県北西部の美方郡香美町というところにあります。生活圏は、どちらかと言えば鳥取の方になります。自然が豊かですし、自然を生かしたアウトドア施設が点在しています。下にも書いておりますが、兵庫県の中でも有数の少子高齢化が進んでいる地域であるという土壌があります。

（スライド４）学校概要としましては、本校の教育は、地域等の協働や関わりによって人材を育成することを第一の目標としております。一番下に書いています「教育指針『人みな使命あり』」という言葉は、先輩から脈々と受け継がれている、探究スローガン的な意味合いを持つ言葉です。地域にも浸透しております。

（スライド５）本校は全日制普通科、各学年２クラス規模です。「地域アウトドアスポーツ類型」です。この類型は「学区を設けない」ということです。いわゆる全国から、生徒を募集しています。普通コースは、兵庫県北部の第５学区から募集しています。類型と普通コースの割合は半々です。兵庫県北部以外から来ている生徒については、地域の協力を得まして、寮ではなくて下宿で、今、22 名が生活を送っています。

（スライド６）概要の中の、地域の動きが本校のポイントになります。この地域の支援が、教育活動の原動力になっています。まずは、学校存続の請願書や要望書、この動きが行政を動かしたという歴史があります。それに伴って、学校が変革を行っていきました。

（スライド７）学校の変遷です。昭和 60 年から、いわゆる進学コースである、英語コースやユニバーサルコースを進めていました。しかし、地域の動きに伴って、平成 23 年に地域創造類型、そして平成 26 年に地域アウトドアスポーツ類型という、今の形になりました。今の１年生で８期生になります。

（スライド８）学校では、進学に関係のない

「地域」をテーマにした学習が保護者や中学生に認知されるだろうかという、大変な議論と苦悩があったようですが、決断をして、これをスタートさせました。

（スライド９）今、学校の概要を説明しましたが、それを表にしたものです。時系列でまとめました。また、資料として見ておいてください。

（スライド 10）いよいよ本校の「村高発『地域を育てる学力』への挑戦」について、お話をさせていただきたいと思います。

（スライド 11）村岡高校の考え方は、学校が「地域との協働によるまちづくりの拠点」、そして「未来を創造する人づくりの拠点」になることです。その大元は、日本のペスタロッチという言い方もされておりますが、兵庫県北部の教育者、東井義雄先生の「村を育てる学力」が基本になっています。その相対する考え方を「村を捨てる学力」と言い、いわゆる私たちが受けた競争型教育としています。

（スライド 12）もう少し説明させてもらいますと「村」、いわゆる「地域を育てる学力」とは、協働、経験、コミュニケーションを通じて、科学化された生活的思考を育てることです。それが「生きて働く主体性」、それから「意欲を伴った学力」となって、自ら、そして地域を成長させると考えています。

（スライド 13）全国にはいろいろな地域との協働による教育活動を行っている学校があります。本校は、その中でも少し特異な取り組みを行っているのではないかと思いますが、地域の最高学府である高校が拠点となる形で進めています。いわゆる学校を核とした「スクール・コミュニティ」を実践しようとしています。

（スライド 14）それでは、本校の具体的な取り組みを３つ紹介させていただきたいと思います。

（スライド 15、16）まず１つ目「村高発！地域元気化プロジェクト」です。総合的な探究の時間で、週１単位です。これは少し珍しいのではないかと思いますが、全校生徒を縦割り８班で編成しまして、地域と協働し、活性化する活動を行っています。

（スライド 17）活動班とその内容です。上の２つの民芸班と吹奏楽班は、本校の職員によって指導しておりますが、それ以外については大学の先生や地域・行政の講師と連携して実施運営しています。

（スライド 18）これは細かい資料ですので、また見ておいていただければと思いますが、具体的な内容、講師の名前が出ています。

（スライド 19～21）民芸班、吹奏楽班、食文化班です。

（スライド 22）環境Ａ班は棚田保全を中心に行っていますが、今年からは土壌の調査や地すべり対策等の探究も行っています。

（スライド 23）環境Ｂ班は、森林環境の調査活動を行う班です。

（スライド 24、25）地域福祉班は、冬になると「村高除雪隊」に名前が変わります。

（スライド 26、27）紙漉き班、そして集落調査班、この８つの班に分かれて活動をしています。

（スライド 28、29）それから、全校生で年２回実施される地域の全国規模のマラソン大会の運営スタッフを行います。1,600～1,700 人くらいの地域なのですが、約 3,000 人のランナーが訪れます。事務局によると、その 77％がリピーターで、中高生に会いに来てくれるという話を聞きます。生徒たちは、マラソン関係者や地域の人たちと協議して、自分たちでランナーをねぎらう方法、おもてなしの方法を考えて、提案・計画、そして実践します。ランナーの方と接することで、多くのことを経験し、感じ、学ぶことができます。これも、授業で行っています。

（スライド 30）活動については、年度当初に、まず「計画」と「仮説」を立てて行います。

そして、年度末に活動報告と講師の先生による振り返りを実施して、次年度への改善へとつなげています。

（スライド 31、32）２つ目は「地域アウトドアスポーツ類型」の地域探求学習です。これは、学校設定教科の「地域探求」という１単位によって実践しています。見ていただいたら分かるように「たんきゅう」を打ち間違えたかと思われるかもしれませんが、この文字を「求める」と「究める」のどちらにするのか、学校の中でもかなり議論があったようですが、生涯を通じて「探し求める力」を育成したいという意味で、この字に決まったと聞いております。鳥取大学地域学部の先生に、学年を３年間担当していただくのが大きな特徴です。

（スライド 33）また、ほかの特徴を挙げますと、赤で書いているようなことになるかと思います。公開授業であること、外部講師の活用は 200 時間以上になります。調査活動、フィールドワークを中心に行います。それから、全国の動きを知る機会や発表の場をできるだけ創出しています。最後には、卒業論文という形で自分たちの考えをまとめて、それを進路に生かしていくことになります。成果物を作成して、それを地域に発信する取り組みも行っています。

（スライド 34）学びの流れを図にしたものです。課題解決能力を培うことを目標にしています。１年生では、地域の専門家に地域の現状を教えていただきます。そして、大学の先生から、探求活動の視点を教えていただきます。２年生では、疑問や問題に対して、調査活動と協議によって解決方法を探ります。３年生では、さらに調査活動・協議を行って、提言書を作成しています。

（スライド 35）授業の進め方は、調査活動、ワークショップ、プレゼンテーション、疑問が出たらまた現地調査、ワークショップ、プレゼンテーションを繰り返すような流れです。方向性を決めるようなポイント授業ですが、年間５回程度、大学の先生に来ていただいて、指導をしていただきます。それ以外は、学校の教員が連携を取りながら、指導を行っています。

（スライド 36）今、８期生と言いましたが、これが探求のテーマで、青で書いているのが今の在校生の取り組みになります。

（スライド 37）そして、地域創造系は、過疎地において地域活性を行っている地域を見に行こうということから、２年生の夏季休業中には研修合宿を行っています。

（スライド 38）もう一つのアウトドアスポーツ系です。同様に、学校設定教科の「地域探求」によって「スポーツ観光と地域活性」「健康づくりと地域活性」という大きな２本の柱で、３年間、系統立てて探求活動を行います。

（スライド 39～41）これが、スポーツ系の探求テーマです。少し詳しい資料ですので、またご覧ください。

（スライド 42）それを「総合的な探究の時間」、それから「地域探求」の発表会として、10 月に「村高フォーラム」を開催します。それぞれの学年、また班がプレゼンテーション、ポスターセッション、体験、実践、実演という形で発表を行います。これは、もちろん、発表の場にも、地域への発信・提案・啓発の場にもなりますし、討論の場とも位置付けています。

（スライド 43）成果物を簡単に紹介させていただきます。

（スライド 44）これは、地域創造類型のころ

の成果物です。

（スライド 45、46）これは、現地域アウトドアスポーツ類型の１期生からの成果物です。業者に出して、きちんと製本しています。

（スライド 47、48）このように、ゲーム等も入っています。ふるさとゲームです。

（スライド 49、50）アウトドアスポーツ系の成果物です。今は「介護予防体操」というＤＶＤ・テキストで普及を行っています。

（スライド 51）３年間のまとめとして、卒業論文「私の地域活性化プラン」を作成して、進路に生かすとともに、最後には香美町長に提案に行きます。

（スライド 52～54）ふるさと協働活動です。これはボランティア活動的な意味合いが多いのですが、生徒会や類型、それから「総合的な探究の時間」の班ごとに実践している内容です。

（スライド 55）また、連携先ですが、多くの支援や連携によって本校の活動は成り立っています。

（スライド 56）まず、平成 29 年からコミュニティスクールが始まりましたが、本校は平成 25 年より「学校運営連携協議会」を設定しまして、校長は連携活動の方針や案を提案し、同意を得て活動を行っています。

（スライド 57）大学との連携です。鳥取大学地域学部と 10 年以上の連携を行っておりまして、特に赤で書いております、山根副学長と筒井先生は、本校のコーディネーター、またはアドバイザーという形で、本校の取り組みにはなくてはならない存在となっております。

（スライド 58）行政との連携例です。学びや発表の場となっています。

（スライド 59）地域の専門家との連携例です。

（スライド 60）それから「格好いい大人になろう」ということから、地域の卒業生や地域で頑張っている若者との連携も大切にしています。

（スライド 61）行政の支援もとても大きくて、地元香美町から年間約 180 万円頂いて、全国募集や広報、成果物の作成に使わせていただいたり、下宿費用の家賃４万円を支援していただいています。「高校支援連絡会」というのは、毎月、必ず教育委員会、町との三者において、協議をして活動を進めています。それから「教育コーディネーター」として、地域おこし協力隊が本校に常駐しています。香美町の職員ですが、常駐して業務支援ならびに連絡調整をしてくれていて、本当に大きな存在です。

（スライド 62、63）これからの展望について、少し大きなことを書いていますが、研究センターを設立したいと思っています。

（スライド 64、65）村高フォーラムでも提案したのですが、高校の出身者、関係者、地域住民、行政からなる地域づくりの知見を集結して、地域づくりの総合研究を行うような組織をつくりたいと思っています。退職された高校の先生の活躍の場でもあるかと思います。

（スライド 66）２年前より本校の卒業生が「Connect Kami（こねかみ）」というグループで、香美町を活性しようという動きをしてくれています。そのような点の活動を集結させることで、研究センターも意味があるのかと考えています。

（スライド 67、68）あとは、ハンドブックを作成しています。これは鳥取大学の先生と協力して、高校を中心とした地域活性または探求学習について、ほかの学校やスクール・コミュニティのメンバーに情報提供したいという目的があります。今年度末に出来上がる予定です。

（スライド 69～72）担う役割について、いろいろな意見を載せさせていただきます。これは、一つ一つ説明しませんが、卒業生や大学の先生、それから地域の声、地域の想いの強さがこの中にも表れています。

（スライド 73）現在は、文部科学省の事業を受けて、今年２年目、来年３年目となるのです

が「村高メソッド」として「人づくりネットワーク」をつくりたいと取り組んでいます。

（スライド74）これは、資料です。また、ご覧ください。

（スライド75）ロジックモデルです。

（スライド76）最後ですが、その活動が終了した後が本校の本当の取り組みになると思います。本校は、地域と行政に支えていただくことはもちろんなのですが、強みを生かす、特に「協働性」「多様性」「主体性」を伸ばす学びの中で、学校と地域をさらに良いクロスな関係として発展させて、地域に学んで、地域を支えて、地域になくてはならないという学校づくりをしていきたいと、今、職員全員で取り組んでいます。

（スライド77）少し駆け足になりましたが、以上で本校の取り組みについて報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

スライド1

第19回高大連携教育フォーラム

令和3年12月4日
兵庫県立村岡高等学校　教頭　岡田厚志

1

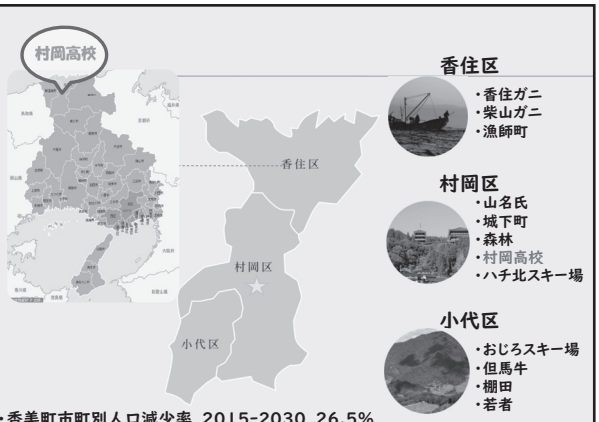
スライド2

学校概況

みんな(生徒)が主役

2

スライド3



・香美町市町別人口減少率 2015-2030 26.5%
・高齢化率 36.60%（2030年46.7%）

3

スライド4

学校概況(その1)

村岡高校の教育方針

地域に学び、知識と知恵を身につけ、地域と協働する創造的な人材を育てる。

村岡高校の重点目標

地域での学びをさらに充実させ、地域を支え、元気にする人材を育成する。

教育指針「人みな使命あり」

4

スライド5

学校概況(その2)

2021年度 在籍生徒数 内訳

全日制 普通科		1年	2年	3年	合計	
地域アウトドアスポーツ類型	地域創造系	9	13	15	37	74
	(但馬外の生徒数)	(0)	(0)	(1)	(1)	(17)
	ｱｳﾄﾄﾞｱｽﾎﾟｰﾂ系	10	11	16	37	
	(但馬外の生徒数)	(2)	(6)	(7)	(16)	
普通コース		22	30	27	79	
合 計 [連携校内の生徒数]		41 [27]	54 [42]	58 [38]	153 [107]	

＊クラス編成は普通コースとのミックス
＊( )内は但馬外生徒数／[ ]内は連携校生徒数

5

スライド6

学校概況(その3)

地域の動き

1999年度(H11) 住民過半数の「学級減阻止」の請願書

2006年度(H17) 香美町議会、県議会へ学校存続について の要望書を提出（住民の75%）

＊2011(H23)～2014(H26) 高校の変革

2015年度(H27)～2019年度(R1)「香美町総合戦略」
⇒ 施策の柱
「高校存続に向けた入学者増加の取り組みに対する支援」

2019年2月(R1)「香美町村岡区地域連合協議会」の提言
⇒ 地域づくりのリーダーとなる人材育成の学舎である村岡高校を地域住民が守り支援していく。

6

スライド7

学校概況（その4）

村岡高校の変遷

1985年度（S60） 普通科に英語コース設置

2002年度（H14） 英語コースをユニバーサルコースに改編

2006年度（H18） ユニバーサルコース募集停止（学年2クラス）

2011年度（H23） 地域創造類型設置（特色ある学校づくり）

2013年度（H25） 学級減（1学年1クラス）

2014年度（H26） 地域アウトドアスポーツ類型に改編
2類型設置（地域創造系・ｱｳﾄﾄﾞｱｽﾎﾟｰﾂ系）
≪学区なし：全国募集≫（学年2クラス）

2020年度（R2） 文科省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」研究指定校

7

スライド8

学校概況（その5）

教職員の苦悩と決断

県下各校の特色化、学級減対策
2011年度「地域創造類型」を創設して募集開始

保護者の興味関心は、卒業後の進学保障。進学に関係のない「地域」をテーマにした学習・・・
・保護者の理解は得られるのか？
・どうすれば生徒募集の切り札とできるのか？

◎2011（H23）年度 学校設定教科『地域探求』設置
大学教授の助言もあり、「知識伝達型の授業」から「探求心を育む授業」へ（自己の夢への探求心の育成）

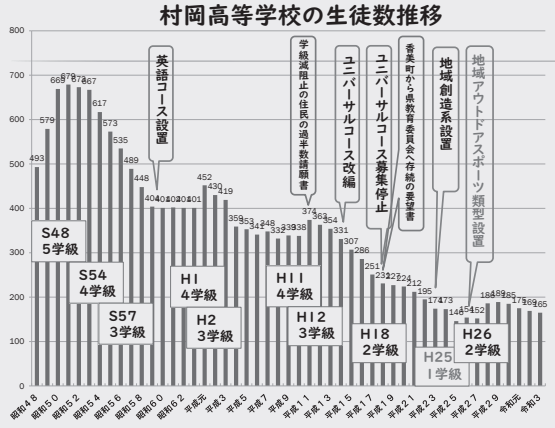
◎2013(H25)年度 総合的な学習の時間「村高発 地域元気化プロジェクト」開始
全校生による地域活性化へ向けての実践活動として、全校生で地域づくりに取り組むこととした。

2014年度 地域アウトドアスポーツ類型に改編（全国募集）

8

スライド9

村岡高等学校の生徒数推移



9

スライド10

村高発
「地域を育てる学力」
への挑戦

10

スライド11

地域社会で村岡高校が担うポジションは・・・

村岡高等学校は、

協働のまちづくりの拠点

地域の未来を創造する人づくりの拠点

村を育てる学力	村を捨てる学力
「みじめな村をさえも見捨てず、愛し、育て得るような、主体性をもった学力」 （東井義雄(1957)『村を育てる学力』明治図書）	□競争型教育 □受験のための知識獲得 □地域の若者を都市へ 送りだす装置としての学校

11

スライド12

地域（村）を育てる学力とは？

知識偏重の競争型教育から脱却した、生活の中でたくましく生きて働く、主体性や生きる意欲を伴った学力。

地域づくりの過程を通して、地域と協働し、地域の魅力を活かして、地域を育て,自らも育つ学力。

12

スライド 13

高校生が地域づくりに関わる実践（地域系高校）

「このままでは高校や地域が存続できない」という危機意識

① 行政（議員集団）が学校に働きかけて地域づくりを進めようとするケース — 岐阜県立可児高等学校 等

② 地元の行政やコミュニティが高校に働きかけて、一緒に地域づくりを進めようとするケース — 島根県立隠岐島前高等学校 等

③ 高校が地域に働きかけて一緒に地域づくりを進めようとするケース — 兵庫県立村岡高等学校

13

スライド 14

「地域を育てる学力」育成の具体化

1 村高発！地域元気化プロジェクト
（総合的な探究の時間 1単位）

2 地域アウトドアスポーツ類型の授業
（学校設定教科：地域探求 各1単位）

3 高校生ふるさと協働活動

14

スライド 15

1

村高発！
地域元気化プロジェクト
[総合的な探究の時間 1単位]

15

スライド 16

村高発！ 地域元気化プロジェクト

■学年縦割で編成したグループ活動

■地域と協働した活動を各班で展開

■全校生が地域イベントのスタッフとして参加

■活動成果を全校生や地域へ発表

16

スライド 17

村高発！ 地域元気化プロジェクト2021

活動ｸﾞﾙｰﾌﾟ名	活 動 内 容
民芸班	踊りと太鼓の出前演舞活動、出前ﾚｯｽﾝ活動。
吹奏楽班	出前コンサート活動、近隣小学校へ出前レッスン活動。
食文化班	村岡食材研究、商品開発、郷土料理提供サービス活動
環境A班	「棚田保全」・「水田の土壌調査」
環境B班	「森の健康診断」「木の駅ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」
地域福祉班	聞き取り調査し支援策を検討・実践活動/冬季：村高除雪隊
紙漉き班	射添紙復活プロジェクト協力
集落調査班	集落の魅力を発信するための集落調査活動

開催月日	全 班 参 加 活 動 内 容
10月31日(日)	みかた残酷ﾏﾗｿﾝに学校行事（全員参加）として企画から参画2021年度中止
9月26日(日)	村岡ﾀﾞﾌﾞﾙﾌﾙﾏﾗｿﾝに学校行事（全員参加）として企画から参画2021年度中止
10月9日(土)	住民を招いて開催する「村高フォーラム」で活動発表2021年度は非公開で実施
3月9日(火)	「総合的な探究の時間発表会」校内で活動発表会を開催

17

スライド 18

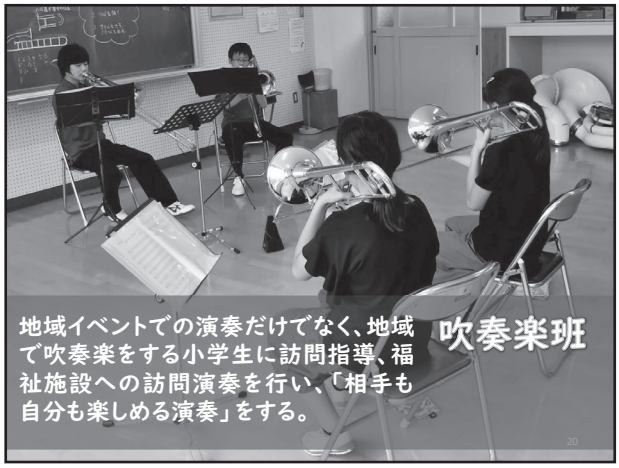
総合的な探究の時間[村高発 地域元気化プロジェクト（1単位）]

	活 動 内 容
①民芸班	・民踊集団森武を中心に踊りと太鼓の出前演舞活動 ・出前レッスン活動
②紙漉き班	・長須集落での射添紙復活プロジェクト協力 ・村岡ﾀﾞﾌﾞﾙﾌﾙ賞状作成 （木多秋香 氏） ・射添小 紙漉き体験授業スタッフ
③吹奏楽班	・施設・病院等への出前コンサート活動。 ・近隣小学校への出前レッスン活動
④食文化班	・村岡食材研究。 （木谷恒子氏） ・商品開発。 （井上治世先生） ・地域イベントでの郷土料理提供サービス ・美方大納言普及活動（予定）（香美町農林水産課）
⑤環境A班（棚田保全）	・貫田集落「うへ山棚田」の保全活動 （小代地域局長：上田和章氏） （小林良斉氏） ・水田の土壌調査 （小代地域局：西谷雄紀氏） ・地すべり防止と長寿化（但馬県民局、豊岡土地改良センター）
⑥環境B班（森の健康診断）	・「森の健康診断」（鳥取大学：永松大先生） ・「木の駅ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」（香美町農林水産課：北村浩史氏） （地域おこし協力隊：谷野 博氏）
⑦地域福祉班	聞き取り調査・支援策の検討および実践活動。 （高齢者・子どもに関わる課題を見つけ、解決策を考え、企画案を作り、地域で実践していく。） ・「村高除雪隊」
⑧集落調査班	・集落の魅力を発信するため、地域調査を実施する。 （鳥取大学：筒井一伸先生） （小代地域局長：上田和章氏）
地元ﾏﾗｿﾝ大会へ全校生ｽﾀｯﾌ活動（9/26・10/31）	みかた残酷マラソン・村岡ﾀﾞﾌﾞﾙﾌﾙｳﾙﾄﾗﾗﾝﾆﾝｸﾞに企画から参画し、全校生がスタッフとして参加する。 （みかた残酷マラソン実行委員会）10/31 （村岡ﾀﾞﾌﾞﾙﾌﾙｳﾙﾄﾗﾗﾝﾆﾝｸﾞ実行委員会）9/26
村高ﾌｫｰﾗﾑ開催（10/9）	地域住民を招いて、活動の報告および地域の活性化について議論する。 （鳥取大学：筒井一伸先生・ｱﾚｸｻﾝﾀﾞｰ・ｷﾞｯﾁﾝｸﾞ先生） （立教大学：小泉元宏先生）
地域づくりサミットin但馬(7/17)	高校生による地域づくりサミットin但馬の企画・運営 （鳥取大学：多田憲一郎先生・筒井一伸先生）
総合発表会（3/8）	総合的な探究の時間の成果を発表する。 （鳥取大学：石山雄貴先生）

18

スライド19

スライド20



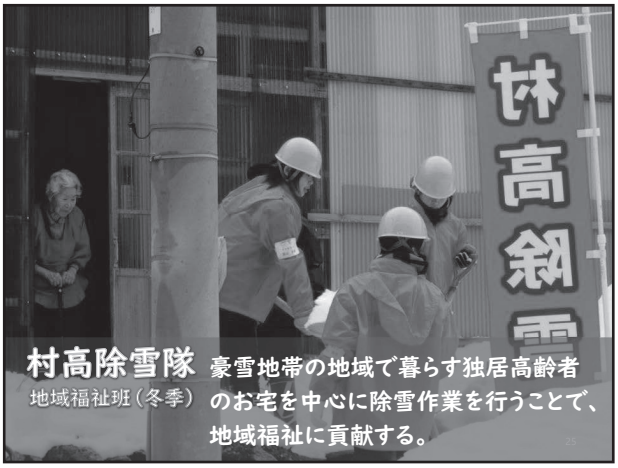
スライド21

スライド22

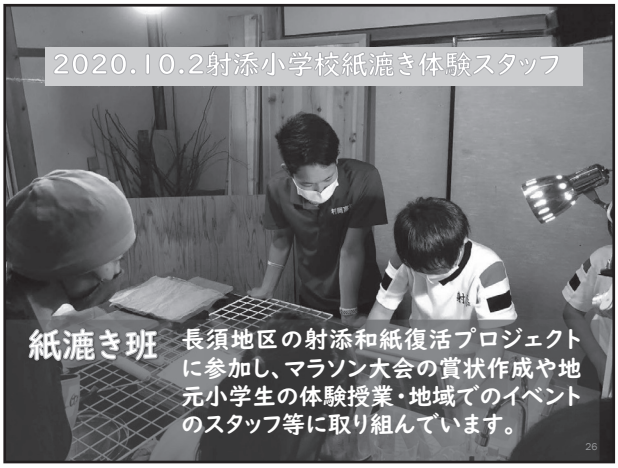
スライド23

スライド24

スライド 25



スライド 26



スライド 27

スライド 28

スライド 29

スライド 30

スライド31

スライド32

学校設定教科「地域探求」

- 「知識伝承型」から「探求心を育む」授業へ
- 1年生で「地域を知り」（体験）、2年生で「地域を深め」（調査）、3年で「地域を創る」（提案・実践）をテーマに学校設定教科を置く
- 各科目に大学教員等を配置して「学習の体系化」を図る。（学年を3年間担当する）

32

スライド33

「地域探求」の特徴

①すべてを公開授業とする。（住民参加）
②地元の外部講師を活用する。（地域に開かれた学校）
③調査活動を中心に置く。（地域への働きかけを行う）
④大学等の公開講座等へ積極的に参加する。（全国の地域づくりの動きを知る）
⑤町長講演会・教育講演会・地域づくりサミット等を開催。（学びの場・発表の場を創出）
⑥第2学年で地域創造系生徒が2泊3日の夏季現地研修（先進地の住民と情報交換を行う。）
⑦第3学年で地域への提言として、卒業論文「私の地域活性化プラン」を作成し、香美町へ提言する。
⑧3年間のまとめとして毎年、冊子・ビデオ・パンフレット等を作成し、地域に配布する。

33

スライド34

地域創造系の学習のねらい

知識ではなく、学ぶ方法を学ぶ。（課題解決能力を培う）

地域を知る 地域学入門	地域を深める 地域探求Ⅰ	地域を創る 地域探求Ⅱ
地域の自然と歴史 各分野の専門家の視点から「郷土」を知る。 探求の視点を学ぶ （3年間の基礎）	課題の設定 知ることで発生した疑問や問題に対する解決方法を、調査活動を通して探る。	地域への提言 「課題」に対する、調査活動と提言書の作成。

34

スライド35

「地域探求」の進め方

- 大学、地元講師等による講義・現地調査で知識、調査活動の方法、ポイントの理解を深める。（地域学入門）

→ 現地調査①
→ まとめ（疑問、課題）
→ プレゼン（講師による助言）
→ WS意見共有
→ 現地調査②・・・
→ まとめ（探求テーマ）・プレゼン（講師）
→ 関係者と協働した活動
→ まとめ・プレゼン（講師）
→ 発表・発信・提案

地域探求ⅠⅡ

35

スライド36

鳥取大学や地域の専門家の指導

地域活性を探求・発信・提言する

1期生 集落魅力発信プロジェクト
～小規模集落の魅力発見～
2期生 ふるさと教育の体系化
3期生 八幡山彫刻公園復活プロジェクト
4期生 まち歩きゲームの開発「目指せ！村岡ものしり博士」
5期生 ふるさと教育教材開発プロジェクト
6期生(3年) 石碑を巡る香美の旅（映像による発信）
7期生(2年) マーケティングを活用した地域づくり
～ヒト・モノ・コトを売り出す～
8期生(1年) SDGsによる持続可能社会を目指して

36

スライド 37

夏季現場研修（夏季休業に実施）

【2021年度 合宿研修:地域創造系2年】2021.8.3
徳島県上勝町（日帰り研修）
「葉っぱビジネス」による地域活性化

【過去の訪問先】（2泊3日で実施）
2012年～2015年　島根県海士町
2016年　山口県長門市俵山地区
2017年　山口県宇部市ときわミュージアム
2018年　岡山県西粟倉村
2019年　島根県太田市
2020年　奈良県明日香村（オンライン研修）

37

スライド 38

アウトドアスポーツ系の展開

1学年	2学年	3学年
地域学入門	地域スポーツⅠ	地域スポーツⅡ
アウトドアスポーツの体験とスポーツ理論を学ぶ。 ・スポーツ概論 ・スポーツ指導論 ・トレーニング理論 ・栄養学 ・鍼灸 ・ｺﾝﾃﾞｨｼｮﾆﾝｸﾞ実習 ・ｱｳﾄﾄﾞｱｽﾎﾟｰﾂ体験 ・野外合宿	スポーツ観光と地域活性 健康づくりと地域活性	

冒険教育Ⅰ・Ⅱ
アウトドアスポーツインストラクターの資格取得

生涯スポーツ探究Ⅰ・Ⅱ
ゴルフ・スキー等の技術修得

スポーツ実践Ⅰ・Ⅱ
トレーニングの理論と実践を学ぶ

38

スライド 39

鳥取大学や地域の専門家の指導
スポーツによる地域活性を探求する

1期生「香美町ｳｫｰｷﾝｸﾞﾏｯﾌﾟ」作成
2期生「産学連携によるｽﾎﾟｰﾂﾂｰﾘｽﾞﾑ実践」
3期生「ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞｺｰｽ作成」「ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ普及」
「ｳｫｰｷﾝｸﾞﾏｯﾌﾟ活用」
4期生 ｲﾍﾞﾝﾄ企画運営「村岡ｳｫｰｸとﾊﾞｰﾑｸｰﾍﾝ作り」
5期生「ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞの普及と教育的効果」
6期生(3年)「介護予防体操による身体機能改善」
DVD化
7期生（2年）「ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞの普及と教育的効果」
8期生（1年）＊2年次で決定

39

スライド 40

地域アウトドアスポーツ類型［学校設定教科：地域探求（各1単位）］

「知識ではなく、学ぶ方法を学ぶ（課題解決能力を培う）」を趣旨として、各学年類型に科目を設置し、地域を知り（1年）、地域を深め（2年）、地域を創る（3年）をテーマに学習を進めている。また、各科目に大学講師を配置し、学習の体系化を図り、大学・地域等の講師との連絡調整は香美町地域おこし協力隊（教育コーディネーター）が行う。

学年	科目	系	講師・協力者	内容
1年 62期生	地域学入門	地域創造系	地元講師 （西田昭夫氏） （吉岡 尚氏） （菅村定昌氏） （石松 崇氏）	地元の自然・歴史・文化の学習
			兵庫県立大学 （横山真弓先生）	獣被害について
			鳥取大学 （石山先生）	SDGsによる持続可能社会を目指して （仮称）
		アウトドアスポーツ系	地元講師 （西垣幸造氏）	ｱｳﾄﾄﾞｱｽﾎﾟｰﾂ体験
			専門学校講師 （㈱正社㈱㈱ｽﾎﾟｰﾂ専門学校等）	ｽﾎﾟｰﾂ基礎理論の習得 栄養学
2年 61期生	地域探求Ⅰ	地域創造系	鳥取大学 （白石先生）	マーケティングを活用した地域づくり 『ヒト・モノ・コトを売り出す』
			香美町教育委員会 教育総務課	地域探求合同研修会 日程：7／下旬
	地域ｽﾎﾟｰﾂⅠ	アウトドアスポーツ系	香美町教育委員会 （田中利彦氏） 鳥取大学 （関耕二先生）	健康づくりと地域活性 ・ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞの普及活動 ※ﾜｰﾙﾄﾞﾏｽﾀｰｽﾞｹﾞｰﾑｽﾞ関西へ向けて
3年 60期生	地域探求Ⅱ	地域創造系	鳥取大学 （ギンナン先生）香美町教育委員会	国際的・芸術的・文化的アプローチによる地域活性『石碑を巡る香美の旅』 ※紹介動画作成予定
			香美町企画課 鳥取大学 （塩沢健一先生）	香美町長講演会（7/中旬） （地域創造系1～3年対象）
	地域ｽﾎﾟｰﾂⅡ	アウトドアスポーツ系	香美町福祉課 （大西琢代氏） 鳥取大学 （関耕二先生）	健康づくりと地域活性 ・介護予防体操による身体機能改善 ※元気体操作成・普及 （DVD作成）

40

スライド 41

アウトドアスポーツ系実施科目［学校設定教科：総合スポーツ学］

学年	科目	単位数	講師・協力者	内容
2年	冒険教育Ⅰ	2単位	地元講師 （とちのき村）	ツリーイングジュニアクライマー、MFA、キャンプインストラクター資格取得を目指し講義・実習を行う
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ探究Ⅰ	1単位	地元講師 （井上直樹氏）	地域の自然を活かして、ゴルフ・スキーの実習を中心に行う。
	ｽﾎﾟｰﾂ実践Ⅰ	1単位	地元講師 （森井勇希氏）	体力トレーニングの理論と実習を行う。
3年	冒険教育Ⅱ	2単位	地元講師 （とちのき村）	ツリーイングジュニアクライマー、MFA、キャンプインストラクター資格取得を目指し講義・実習を行う
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ探究Ⅱ	1単位	地元講師 （井上直樹氏）	地域の自然を活かして、ゴルフ・スキーの実習を中心に行う。
	ｽﾎﾟｰﾂ実践Ⅱ	1単位	地元講師 （森井勇希氏）	ｽﾎﾟｰﾂにおけるﾘｰﾀﾞｰ（指導者）となるための理論と実習を行う

41

スライド 42

村高フォーラム

【プレゼン・ポスター発表】
「地域創造系」「アウトドアスポーツ系」「総探」の成果をまとめ発表する。

【記念講演】
ゲストを招き地域づくりを学ぶ。

【パネル討論会】
地域づくりをテーマに、行政や地域住民と共に討論する。

地域住民・行政への発信・提案・啓発

42

スライド 43

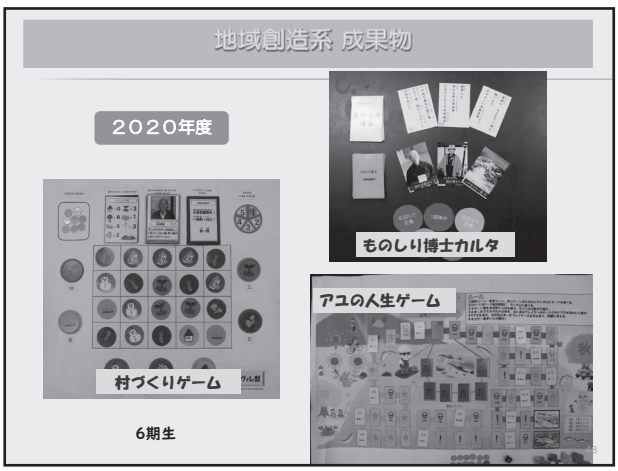
スライド 44

スライド 45

スライド 46

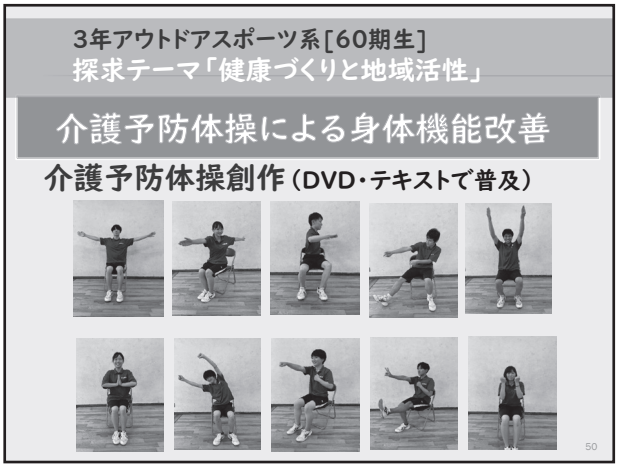
スライド 47

スライド 48

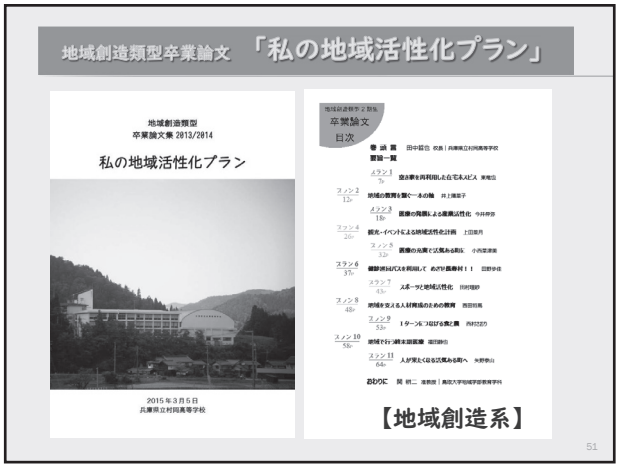


スライド 49

スライド 50



スライド 51



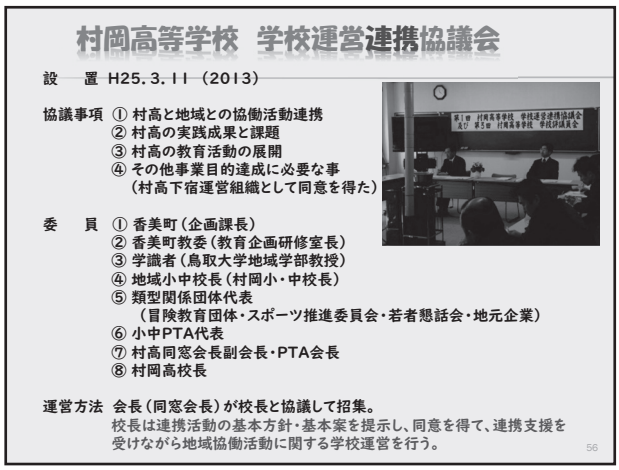
スライド 52

スライド 53

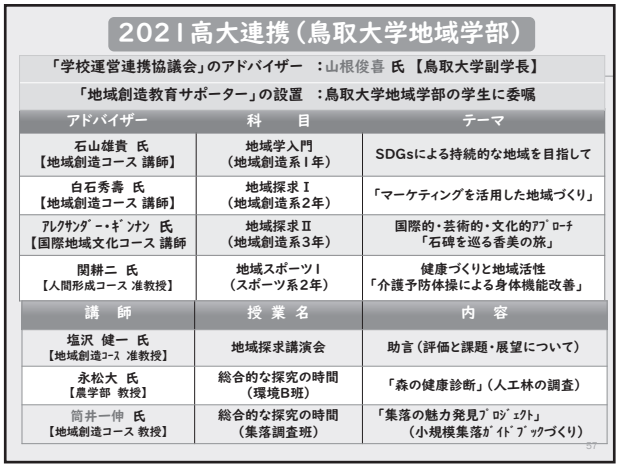
スライド 54

スライド55

スライド56



スライド57



スライド58

スライド59

スライド60

スライド 61

行政の支援・連携

①「高等学校魅力化支援事業」
魅力ある高校づくりに資する事業80万円／生徒募集活動に資する事業100万円

②「香美町高校生徒下宿費補助金交付制度」
村岡高校・香住高校に通学不可能な生徒に、上限月4万円の下宿費補助金を交付 <全県・全国から生徒を募集するための香美町の支援策>

③「高校支援連絡会」
香美町企画課・香美町教育委員会・高校の3者で毎月1回 開催し、情報交換を行っている。

④「香美町総合戦略」(2015-2019)
高校存続に向けた入学者増加の取組に対する支援が施策の柱 のひとつに掲げられている。

⑤「教育コーディネーター」
香美町地域おこし協力隊（総務省事業）を派遣（学校に常勤）。

61

スライド 62

今後の
展望

62

スライド 63

展望1

「教育のまち」を創る

研究センター設立構想

大人の探究コミュニティ構築へ向けて

63

スライド 64

64

スライド 65

研究センターの位置づけ

官民学一体となった地域プラットフォーム構築

① 高校を卒業した若者の学びの共同体
② 小中高の「ふるさと教育」のコーディネーター
③ 地域を担う人材育成・確保」（新過疎法）を具体化する(公立)機関

高校出身者・関係者の知見を集結

キーワード
地域 教育 協働 人材 コーディネート

65

スライド 66

こねかみについて

こねかみ Connect

【こねかみとは】

「香美町を若者から盛り上げたい。自分たちのまちは自分たちでよくしたい。そんな行動を起こしたい」と思う心熱いメンバー7人で活動している団体です。
代表である井端・小林を筆頭に香美町で育った若者が未来の香美町について考え、日々活動しています。

【こねかみの理念】

広大な面積、豊かな自然を持つ兵庫県香美町。そんな香美町の魅力に目を向け、帰ることが出来る場所、住み続けられるまちを 自分たちの手でつくっていく そのために香美町を構成する3つの地区、香住・村岡・小代の境目 世代の境目を越えて 若者からまちをつなぐ。そして、その先に広がる仲間の輪。立ち上がろう、「香美町をもっと楽く！」

66

スライド67

展望2

探求ハンドブック作成へ

全国どこでもできる実践を目指して

67

スライド68

書籍企画案
“学び”が地域を創る
ふつうの普通科高校の地域協働物語（仮題）
（2021年度末発行予定）

全国で進められる高校魅力化が行政や地域住民から高校に働きかけられてきた傾向が強い中で，村岡高校は教員主体で発案され，高校を中心に地域協働が進められてきた普通科高校教育の展開という特長を持っており，教員として地域とかかわる教育の位置づけが本書の柱となる。

活動に参画する誰もがキーパーソンとなって進展する学びとは何か，それを支える関係づくりの要諦とは何か。そして，地域との連携が求められる現場教師を中心に，高校と連携を進めたい行政や地域コミュニティのメンバーなどに有益な情報を提供するものと期待する。

68

スライド69

まとめにかえて...

村岡高校の担う役割

69

スライド70

生徒の声（地域創造系卒業生）

●地域探求の活動で活性化に取り組んでいる人と話をするだけで新たな発見があった。故郷が好きになった。
●地域探求で地域の多くの人に会った。地域が若者に大変期待していることが分かった。
●私は香美町職員となって香美町の課題に正面から向き合って活性化に貢献したい。
●地域探求で自分の考えが大きく変わった。大学を卒業して地元に帰ってくる。そして、私の地域活性化策（卒業論文）を実行に移したい。

70

スライド71

大学講師の声（寄稿文より）

発見したのは、思いを持った教員のみなさま、地域おこし協力隊などを含めた地域の方々、そして、村岡の人々の関係性のなかで大きく成長していく生徒たちであった。

私から見れば、「地域の隠された魅力」というのは、村高そのものであり、みなさんであった。卒業生のみなさんは、どうか誇りに思ってもらいたい。他に、こんな高校はないのだから。私は本当に、村岡高校のような学校で、学んでみたかった。

71

スライド72

地域の声

●私は町の抱える課題に取り組んでいる村高の「応援団」です。ぜひ香美町に残って町づくり、地域づくりにがんばってください。これからも応援します。
●村岡高校の存続は、私たちの地域の存続でもあります。学校を失った地域が急速に求心力を失っているのはみなさんもご存じのとおりです。今本当に手を打たなければこどもたちの未来はありません。

72

スライド 73

地域との協働による高等学校教育改革推進事業
（地域魅力化型）　R2～4

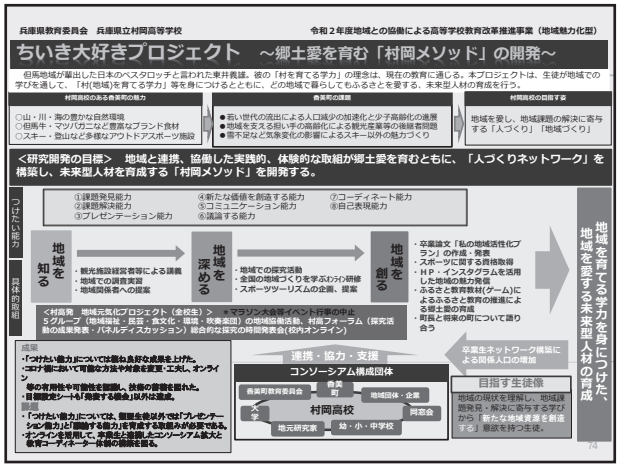
「村高メソッド」の開発

＜研究開発の目標＞
地域と連携、協働した実践的、体験的な取組が郷土愛を育むとともに、「人づくりネットワーク」を構築し、未来型人材を育成する。

＜目指す生徒像＞
地域の現状を理解し、地域課題発見・解決に寄与する学びから「新たな地域資源を創造する」意欲を持つ生徒。

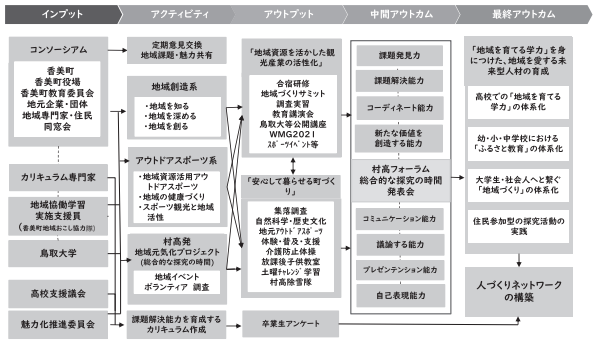
73

スライド 74

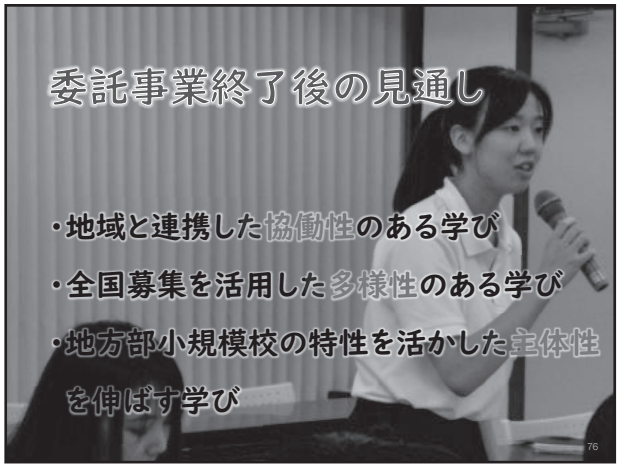


スライド 75

ちいき大好きプロジェクト ～郷土愛を育む「村岡メソッド」の研究開発



スライド 76



スライド 77

ご清聴ありがとうございました。

77

事例報告②

REALIZE！ゼロから始めた探究の現在地
～生徒の「やりたい」をカタチに～

［報告者］　多々納　智（京都府立宮津高等学校・京都府立宮津天橋高等学校 教諭）

（スライド１）ご紹介にあずかりました、多々納です。このような場でお話をさせていただくのは不慣れなもので、緊張しておりますが、よろしくお願いします。本日、日本三景の天橋立のある宮津からやってまいりました。写真を用意してなかったのですが、脳裏に思い浮かべてください。

（スライド２）先ほどの私の紹介の肩書にも高校が２つ付いていたのですが、この所属校が２つある理由についてです。先ほどの兵庫県北部と同様に、京都府北部も人口減少が著しい地域であり、クラス数も徐々に減ってまいりましたので、今の２年生から宮津高校と加悦谷高校の２つの学校が合わさりまして、宮津天橋高校としてスタートを切っております。そのため、３年生は宮津高校生、１～２年生は宮津天橋高校生として本校に在籍している状態となっております。旧制中学校から続くので、非常に長い歴史を持った学校と言えます。

（スライド３）ここからは宮津学舎という呼び方にさせていただきます。教育目標はここに書いてあります「青雲の志を持つ人」で、これを前面に押し出しています。

設置学科については、普通科４クラス、建築科１クラスです。本日、説明をさせていただくのは、普通科４クラスの探究活動についてです。例年の進路状況につきましては、パーセンテージで示しております。とても多くの生徒が大学へ進学するのが特徴で、地域の中でも進学校という認知で間違いないかと思います。これまで進路指導・学習指導の充実に注力してきた歴史があります。

（スライド４）そのような本校で、探究を導入するきっかけになったことですが、まず従来の総学はどのようだったかというと、ここではあまり大きな声では言えない状況でした。ここに書いているように「横断的・発展的な学習を各教科に依頼」で、あくまでも各教科が考えて何かしていたにすぎないのです。しかし、学校を取り巻く状況がいろいろと変化してきまして、200 人の定員だった普通科が、いまや在籍数は１学年 120～130 人で、うんと減りました。この 10 年くらいで、定員を満たすこともなかなか難しい状況に変わりました。それから、入試制度の変化などもあり、主体性の伸長や多様なニーズに対応する必要が出てきたことで、学校の中に、大きな声で言えない状態の総学をそのまま放っておいてよいのだろうかという危機感が生じてきたのがきっかけです。

（スライド５）総学改革に向けた準備として３点、挙げさせていただきます。

（スライド６）まず「プロジェクト会議」の発足です。順に説明をさせていただきますと、主幹と中堅７名で、このうちの１名として私が入っておりました。ここでどのような仕事をしてきたかというと、すでに探究活動、先進的な総学をされている高校を見に行ったのです。何か変えなければならないとは思っていたのですが、実際のところ、何をしたらよいのかが全く分からなかったのです。最初の趣旨説明の中にも、何をしたらよいのかが全く分からないと手をこまねいている先生方がいまだに多いとのことでしたが、私も例に漏れず、そうでした。見てきては持ち帰り、そして教職員研修会でそれを全教職員に共有してきました。

その研修会では、視察報告だけではなく、ここにありますように、導入にあたっての校内体制の整備などの意見交流もしてきました。特に、この意見交流はとても大きな意味を持っていたと思います。意見交流では、今の宮津高校生に足りないものは何か、卒業するときにどのようになっていてほしいかというイメージを全教職員で共有しようと、小グループで話し合ってもらって、このような意見をたくさんもらいました。これは、もしかすると探究で実現できることなのではないかという意見が出そろったところで、教員間の目線はある程度、一致したと感じました。

その後、探究テーマを考えることをしたのですが、本校の探究は、後でも説明させていただきますが、本当に自由です。何をしてもよいというスタンスでいます。われわれ教職員も立ち上げに先だってテーマを考えました。そうすると、教員から 100 くらい出てきたのです。自分の専門、趣味のことからいろいろ出てきたので、生徒にもそれを盗んでもいいよと言ったのですが、いまだに一人もそれを選びません。せっかく面白い、とっておきなのにと思っているのですが、やはり、自分でしたいものがあるのです。それは主体性か、と喜ばしいことと思っております。

（スライド７）準備の２つ目「フィールド探究同好会」です。まずパイロットクラブとして小グループをつくって、進めていくことにしました。ここの顧問を務めることになったのが私です。何か面白いことをしなさいと当時の管理職から指令を受けまして、非常に困った思い出があります。それまで私は野球の顧問をしていて、家と学校とグラウンドの行き来しかしていなかったのです。13 年目を迎えていますが、６～７年目までは地域のことが何も分かりませんでした。１年くらいは何をしたらよいのか分からず、ずっともじもじしていたのですが、偶然に当時の管理職から「近くの自然公園でツアーをやっているぞ。生徒を連れて行ってみたら」と言ってもらったので、そこに行きました。そうしたところ、地域の課題を熱く語る大人がいるわけです。これはタケノコを持っておられますが、竹林をなんとか管理しなければとおっしゃっているところです。そのようなことから、地域に目が向き始めました。

普段の学校の中で何をしようかと生徒と協議しました。私は専門が理科なので、研究というもののイメージがなんとなくありました。そのため、取りあえず、学校の池からあれこれすくってきて、遊んでいる水槽で飼ってみようということになったわけです。そうすると、スジエビという小さいエビがいまして、そのエビがなかなか面白い行動を取るのです。サイズ違いで言うと、大きいエビが石の陰にいて、小さいエビはそこからはじき出されて、周りをうろちょろしているのです。生徒が、これをうまくデータ化できないかと気付いたのです。ただ、飼っていただけなのですが、それをどうにか研究という形にまでこぎつけて、教職員研修で発表させてみました。ここで具体的なイメージを全教職員に持ってもらうことができたと感じています。

（スライド８）３つ目の準備は「探究推進部

の設置」で、私プラス１の２名です。ここでは実務を行っているのですが、このような探究テキストをオリジナルでつくって、生徒に使わせて授業を行っています。

（スライド９）そして、2017 年です。そのような準備を経て、探究がスタートすることになりました。キーワードは、この３つです。「自立する個性」「安心と愉しさを」「REALIZE!（気付く、実現する）」の３つのワードを大事にしています。

（スライド 10）次に、１年次の活動と目標ですが、基本的には「REALIZE!」に立脚したテーマを並べています。「気付く」と「実現する」という２つの訳があります。気付きから実現に向けてということから、この配列にしているのです。

（スライド 11）主だったところを説明させていただきます。まず１年生の１学期に、文理選択をしなければならないのですが、その際に、それまではどうしてもここに挙げているような課題がありました。「君は、本当にそちらの方面に行きたいの？」というように、興味関心とかけ離れた科目設定。〇系が就職に有利という先入観や、小さなころに何々になりなさいと言われたことが続いてしまい、保護者の価値観から独立できないこと。それから「せめて、あの大学には」のように大学名が志望理由になってしまうこと。このようなことが課題だったのです。それを解消するために「学問への興味関心」を一番大事にしようということです。次に「キャリアの広がり」です。ここに曼陀羅チックに出しているのですが、サッカーが好きだったとしても、いろいろなものになれるのだよというように、とにかく興味関心を大事にしましょうということを、最初に行います。

（スライド 12）次に、２学期に行っている「合意形成ＷＳ（ワークショップ）」ですが、これが地域の課題に対する気付きを促します。それをＳＤＧｓと絡めて、さらに自分事化します。総合地球環境研究所や宮津市、宮津わかもの会議に協力してもらって進めているところです。

（スライド 13）１年次カリキュラムの改善です。当初から現在にかけて、このように変えています。特に「『型』の習得」においては、考え方やロジカルシンキングはとても大事だと思います。そのため、当初は「型」を勉強しようとしていたのですが、実（じつ）のあるように何かの取り組みと合わせて行うようにしました。それから、当初、ディベートをしていたのですが、意見を戦わせることに関しては、あまり面白くありませんでした。どちらかというと、１つの課題に対して、積み上げていく方が面白いのではないかということで、合意形成を大事にしています。まとめると、このようなことかと思います。

（スライド 14）２年次については、目標とテーマ設定をこのようにしています。目標については、この３点で「実現するためのチカラ」を付けることです。テーマ設定に関しては、とにかく基本は自由です。興味関心が一番です。それから、課題意識です。１年生のときに、準備として地域課題などにいったん目を置いて、そこから、もう一度、自由に考えてみなさいというように決めています。ただし、探究テーマにならないものをたくさん挙げてくるので、その場合は、もちろん、ディスカッションが必要です。

（スライド 15）指導体制についてですが、ここに挙げているようなことです。生徒 120～130 名に対して、テーマ数が例年 70 前後、立ち上がってきますので、非常に多いかと思います。一人で探究をしている生徒ももちろんいます。これはいろいろ面白いところがありまして、複数名で行っているところが、必ずしも深まる探究をするわけではないのです。一人では、にっちもさっちもいかなくて、なかなか前に進まなくなる生徒もいるのですが、高いクオリティ

ーのものを出してくる生徒もいます。そのため、一概にどちらがよいとは言えないかと思っています。自分でしたいと思うことを一番大事にしてほしいので、人数も自由にしています。

指導のスタンスに関しては、基本は伴走です。担当してもらっている 16 人の教員に、私が伝えていることは「伴走は、並走＋半歩前後」で、時にはやはり少し引っ張ってあげなければならないときもあるし、見守らなければならないときもある、上手に使い分けてくださいと伝えています。

月１回、担当者のミーティングをしています。ゼミ活動をしていますので、そのゼミの代表者に集まってもらって、困り事、進捗状況を共有するようにしています。

（スライド 16）協力機関については、ここに挙げているように、基本的には私がいろいろなつてで知り合いになった方々を、とにかく手を離さずに、全て、学校の探究に引っ張ってきているという状況です。

（スライド 17）テーマ設定についてですが、各ゼミから２つずつテーマを挙げています。本当にたくさんのテーマが出てくるのです。これは今年行っているものの一部ですが、多岐にわたります。地域に関係するものでは、一番下の「TANGOlogy」というゼミをつくって、行っています。それから、名前として少し変わっているかと思うのですが「行動科学」ゼミというのがあります。もともとは、心理学が好きな子が心理ゼミに集まっていたのですが、どうしても定量化できないところがあって、それは行動に反映されるだろうということで、このように改称してゼミをつくっています。

（スライド 18）テーマ設定は自由でよいのですが、できれば地域探究に目を向けてほしいという思いがあります。それを強制してしまうのは、今のところ本校には色が合わないと思っているので、１年生でＳＤＧｓや地域課題などを学ぶことを一つのきっかけとして、地域に目を向けてほしいと思っています。

本校で２年生の探究が始まったのは平成 30 年なのですが、このときには地域を題材にしたテーマは 20％を若干切るくらいでしたが、そこから減りました。これは、おそらく、当初、何を探究したらよいのか分からないので、とにかく身近なところからということが働いて、平成 30 年はある程度の数字になったと思うのですが、その後、２年間で減ってしまいました。少し寂しいと思いました。そのため、令和３年の今の２年生は、１年生のときに地域探究を行うようにしました。それが効果になったと思うのですが、30％くらいの生徒が地域の課題を設定してくれました。さて、次年度の２年生はどのようになるかというところなのですが、去年の１年生、今年の２年生はＳＤＧｓから入って地域に行きました。しかし、今年の１年生は地域から入ってＳＤＧｓに行っているので、その違いがどのようになるのか、今から楽しみではあります。

（スライド 19）これが、実際の２年生の探究活動の様子です。いろいろなことをしています。ここに挙げているのは、基本的に、動きのあるものを選んだら、理系のことが多くなってしまいましたが、文系のテーマも半数くらいあります。

（スライド 20）本校で大事にしているのは対話です。面談のような時間を設けなくても、週２時間の探究の時間にとにかく担当者と生

徒は対話をして、方向性を確認して、またはその出てきたデータについての解釈を詰めていきます。

（スライド21)「探究を牽引　フィールド探究部」についてです。私が当初顧問を務めた同好会が、部に昇格しています。モットーは「ホンモノを感じろ！」「地域で科学、地域を科学」で、学校のカリキュラム上の探究を長年、牽引している状態です。活動場所については、丹後地域全域で行っています。ここ１～２年で、各コンテスト等で評価してもらえることが非常に増えました。

（スライド22) 今年行っている活動は、このように、いろいろなことを行っています。

特に、これは巨木調査の結果です。丹後半島全域で山に入って、神社に行って、大きな木を測り回り「地域で科学」として、まずはデータ化していくことがとても大事です。そのために、生徒と一緒に走り回っています。

（スライド 23）それを還元していくこともしています。生徒に還元する方法として「スタディーツアー」があります。これは、部の生徒が企画・運営をします。それから地域での発表会もします。学校での探究の発表会は、もちろん行っているのですが、部としては地域で発表することをしています。書籍も頑張ってつくっています。いろいろなところに協力をいただいた上での、ようやくの成果なのです。

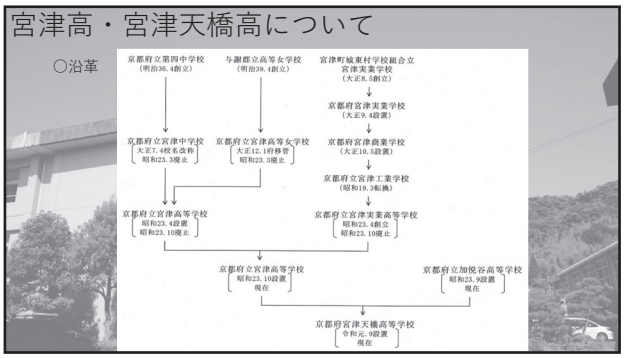
（スライド24) 探究の効果は、このように紹介させていただきます。「進路実現に役立った」が60%くらい。「社会的課題・要請への気付きになった」75%。「進路の方向性に何らかの影響があった」約半数。「キャリアを考えるきっかけになった」３分の２です。この程度です。今、これが現状です。

（スライド25～27) 最後に、これだけ紹介させてください。進路への影響という、２つの事例です。当初、放射線技師になりたいと言っていた生徒が、タンポポの研究をして、農学へ志望変更しました。もう一人は、電子情報系、ゲームの延長のようだったのですが、スタディーツアーの企画・運営をして、観光・文化学へ志望変更しました。このように志望に影響を与えています。地域が原風景になって、その生徒の思いが変わっていったかと感じています。

以上です。ありがとうございました。

スライド１

スライド２



スライド３

宮津学舎について

○教育目標

我が国や地域の発展に貢献する「社会的使命感と青雲の志を持つ人」を育成する。

○設置学科

普通科（４クラス）＋建築科（１クラス）

○進路状況（例年）

・国公立大学（30～35%）
・私立大学　（40～50%）
・短大・専門（15～20%）
・就職　　（5%程度）

} 進路指導・学習指導の充実

スライド４

探究導入のきっかけ（普通科）

○従来の総学

横断的・発展的な学習を各教科に依頼

○学校を取り巻く状況の変化

社会の変容、新指導要領、総合型選抜の拡充、少子高齢化による生徒数の減少

⇩

主体性の伸長、多様なニーズに対応する必要性

「総学、今のままで大丈夫か？」

スライド５

総学改革に向けた準備

①プロジェクト会議の発足（2015年）

②フィールド探究同好会の創設（2015年）

③探究推進部の創設（2017年）

スライド６

①プロジェクト会議

○メンバー　主幹＋中堅７名

仕事①　先進校視察
三次高校、三田祥雲館高校、堀川高校、京教大付属高校、守山高校、津高校

仕事②　教職員研修会（計６回）
・視察報告
・校内体制（教育課程や人員配置）
・意見交流（宮高生に不足しているもの／卒業時の生徒の姿）
・探究テーマを考える

「目標を持って！」
「もっと主体性を！」
「丹後に戻ってきて！」
「夢を語れるように！」

⇨ 実現する手段＝「探究」

スライド7

②フィールド探究同好会

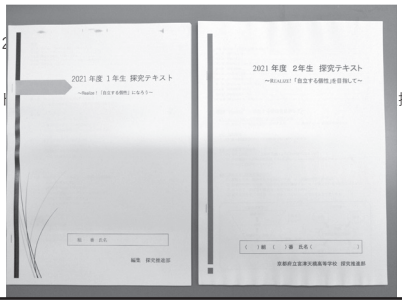
スライド8

③探究推進部の設置

○人員：2

○業務

テキス



携

スライド9

2017年、探究スタート

Keyword

自立する個性の育成

安心と愉しさを

REALIZE!（気付く、実現する）

スライド10

1年次の活動と目標

・自分の興味関心と進路の広がりに気付く

→　主体的なコース選択につなげる

・社会課題や社会的要請に気付く

→　地域課題をSDGsに関連付け、自分事化する

・意見をまとめて実現の方策を提示する

→　協働の中で合意形成し、最適解を導く

・2年次の探究テーマの決定

スライド11

キャリアパス探究

課題

・興味関心とかけ離れた科目選択

・就職には○系に有利だという先入観

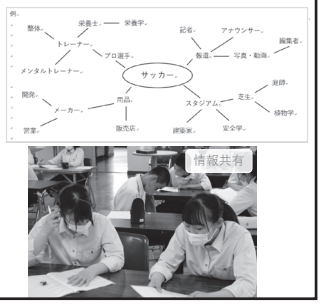
・保護者の価値観から独立できない

・大学名が志望理由になってしまう

主体的な進路選択の第一歩

・学問への興味関心

・キャリアの広がり



スライド12

合意形成WS

目的

・社会的課題や要請への気付き→自分事化

・協働の中で合意形成し、最適解を提示する

題材

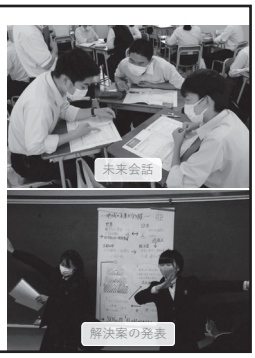
・地域課題とSDGs

→未来を想像しながら、今できることを探る

協力

総合地球環境研究所

宮津市　宮津わかもの会議



スライド 13

1 年次カリキュラムの改善

当初
- 話し方、書き方の「型」の習得
- 職種からコース選択
- 社会的課題についての理解
- ディベート

現在
- 取組の中で「型」を習得
- 興味関心からコース選択
- 地域の課題にフォーカス
- 合意形成

自分自身と地域を題材にして、対話を通して理解を深める

スライド 14

2 年次の活動と目標

目標
- 自分のテーマを究める
- 具体的なアクションを起こす
- 誰か（何か）とつながる

実現するためのチカラ

テーマ設定
- 興味関心があること
- 課題意識をもっていること
- 希望進路に関わること

自由に決める
（ディスカッションは必須）

スライド 15

指導体制
- 授業形態：4 クラス同時開講（2 単位、昨年度までは 1 単位）
- 設置ゼミ：人文・社会・理科・数学・行動科学・スポーツ健康・TANGOlogy
- 担当教員：16名（1 人あたり 4 ～ 5 テーマを担当）
- 発表会　：中間（10月上旬）、最終（1 月下旬）
- テーマ数：例年70前後

指導のスタンス
- 伴走は、併走＋半歩前後
- 困ったことは情報共有（月 1 回のゼミ担当者ミーティング）

スライド 16

協力機関
- 大学（京都教育大学、福知山公立大学、滋賀県立大学、龍谷大学）
- 京都職業能力開発短期大学校
- 京都府立丹後海と星の見える丘公園
- 京都府立丹後郷土資料館
- 兵庫県立人と自然の博物館
- 総合地球環境研究所
- 地元自治体（宮津市、与謝野町、京丹後市、伊根町）
- 地元NPO団体
- 地域おこし協力隊　等

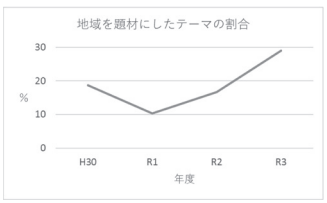
スライド 17

テーマ設定は自由

ゼミ名	担当教員	テーマ数	テーマ例
人文	2 名	9	計量言語学の観点から考える魅力的なプレゼンテーションとは 歌合の勝敗決定に関わっているものとは
社会	2 名	10	写真を通じて宮津を作る 全ての子供たちに当たり前の教育を
理科	4 名	16	人・川・ハッピー作戦（大手川の生物調査と親水公園の整備） 金引の滝～シダ植物調査～
数学	1 名	2	ラプラス変換で非線形微分方程式は解けるのか 虚数解交点の謎
行動科学	3 名	16	夢を操ることはできるのか 独裁者と生い立ちの関係、それに従う人々の心理
スポーツ健康	2 名	5	シューズのフィット感におけるパフォーマンスへの影響 効率の良いボートの進め方
TANGOlogy	2 名	11	探Go！スタディーツアー 丹後の出し風（南からの強風）について

スライド 18

地域探究の充実



○昨年度 1 年生
SDGsを地域に落とし込む

○今年度 1 年生
地域課題とSDGsを結びつける

○次年度 2 年生　？？？

スライド 19

スライド 20

スライド 21

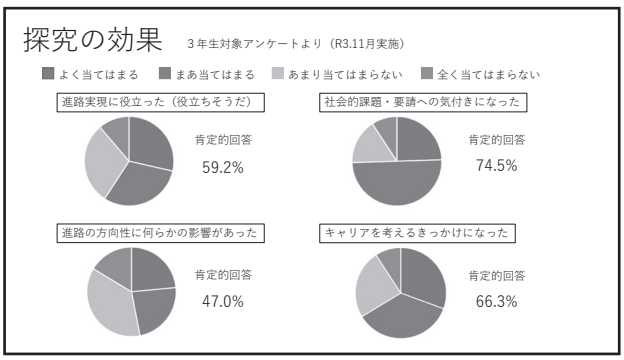
探究を牽引　フィールド探究部

○モットー：「ホンモノを感じろ！」「地域で科学、地域を科学」
○活動場所：丹後地域全域
○受賞歴
・奈良大学全国高校生歴史フォーラム　優秀賞（H28）
・全国高校生マイプロジェクトアワード全国サミット　全国優秀賞（R2）
・森林林業交流研究発表会　育種場長賞（R2）
・全国ユース環境活動発表大会近畿地区大会
　教員選考賞（R1、R2）、協賛企業特別賞（R2）、優秀賞（R1）
・日本自然保護大賞　入選（R1、R２）
・日本森林学会高校生ポスター発表　最優秀賞、特別賞（R2）

スライド 22

スライド 23

スライド 24



スライド 25

進路への影響

事例１

当初：放射線技師（収入の安定）

↓

タンポポの研究

↓

農学への志望変更

事例２

当初：電子情報系（ゲームの延長？）

↓

スタディーツアーの企画・運営

↓

観光・文化学への志望変更

探究→地域を原風景に

スライド 26

今後の課題

運営

- 校内組織の拡充（外部との連携や事務作業）
- 地域探究のさらなる充実（行政・民間との連携の強化）

指導

- 課題設定の際の論点の絞り込み
- テコでも動かない生徒にどう伴走するか
- 心理学が好きな生徒への対応（調べ学習になりがち）
- ネットの情報に頼りすぎる
- すべての生徒が効果を実感できる探究づくり

スライド 27

パネルディスカッション

探究的な学びから研究へ

［パネリスト］　山田　剛史（関西大学 教育推進部 教授）
［パネリスト］　岡田　厚志（兵庫県立村岡高等学校 教頭）
［パネリスト］　多々納　智（京都府立宮津高等学校・京都府立宮津天橋高等学校 教諭）
［コーディネーター］　滋野　哲秀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室コーディネーター／龍谷大学 文学部 教授）

滋野：　それでは、早速、パネルディスカッションに入りたいと思います。

パネルディスカッションでは、まず、山田先生から、２校の発表につきましてコメントをいただきます。その後、基調講演に関しまして、ご質問がございましたので、山田先生に答えていただきます。村岡高校、宮津高校・宮津天橋高校に関しまして、皆さまからお寄せいただいた質問を、幾つか整理させていただきましたので、２つの高校の取り組みから回答をいただく流れで進めたいと思います。最後の残りの時間でまとめと、３名の方から一言ずつメッセージをいただいて、このパネルディスカッションの時間を終了したいと思います。

それでは、まず、２校の発表につきまして、山田先生からコメントをいただけたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

山田：　よろしくお願いします。まずは、全く打ち合わせをしていないのですが、どこも全て「主体性」が共通のキーワードとして入っていまして、その時点で、つながっていると非常にうれしく思いました。それぞれの目指すベクトルが合っていることが感じられたのが、非常に良かったです。

やはり２校とも、取り組みの背景には、学校の存続の危機、子どもの数の減少、統廃合等があり、それなりの覚悟があったとは思うのですが、その危機を危機のままにせずに、どのようにすればチャンスに変えられるかと、先生たちが立ち上がって、地域に開いて、つくり上げてきたことに敬意を表したいです。なかなかできていない皆さんからすると、どのようにしたらここまでいけるのだろうというのが素朴な疑問としてあると思います。さらりと話されていますが、保護者の理解、地域や先生方の理解など、非常に大変なご苦労があったと聞きながら感じました。

細かい話は、この後のディスカッションでできればと思います。

滋野：　ありがとうございました。

それでは、山田先生にお寄せいただいた質問の中に、先ほど、お答えできなかった部分が２つありますので、回答いただければと思います。１つは、大学の初年次教育で探究型科目を導入するにあたり、テーマ設定などの工夫や注意点を伺いたいという質問ですが、いかがでしょうか。

山田：　先ほど、少しお伝えしたかと思うのですが、今日のお二方の発表を見ても、テーマ設定はとても大事です。どの程度の線でこちらが提供するのか、自由度をどのくらいにするのか

は考えものだと思います。大学にもよりますが、初年次で実施する場合は、何でもよいでも構わなくて、僕も割とそのような方法をしてきたのですが、学生が乗りやすいのは、決めてしまわない、自由にさせ過ぎない、幾つかテーマの大枠を示して、その中で自分がフィットしそうなところを選んで、細かなテーマを決めていく。そうではなく、自由なところから始めると、テーマ設定だけで何週も取ってしまうことになるので、場合によっては、その中で５つくらいキーワードを示してから選ぶのもよいかと思います。目的によっても、いろいろ違うかと思いますが、今のところ、私の落ち着きどころとしては、そのようなところかと思っています。

滋野：　ありがとうございます。どちらかというと高校の内容になるかも分かりませんが、イベント的になってしまう危険性があるようにも思います。このような危険性を回避するためのご助言をいただければという質問なのですが、いかがでしょうか。

山田：　幾つか考え方があると思うのですが、１つは、イベント的でもよいのではないかということ。いきなり全学展開、全校展開というのは厳しいと思うので、まずパイロット的に行ってみて、イベント的なところからでも、きちんと生徒たちの反応を見て、アセスメントもして、なかなかよい、というところを少しずつ増やして、次にこちらでしようかというように広げていくのが１つ。

もう一つは、今年３月に学校教育法の施行規則改正で、高校において「スクール・ミッション」「スクール・ポリシー」の策定公表が求められるという話が出ています。これは、大学で言えば「ディプロマ・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「アドミッション・ポリシー」という３つのポリシーがあって、それが、高校に下りてきたという話です。おそらく皆さんも存じ上げていると思うのですが、改めて言うと、スクール・ポリシーの中には「育成を目指す資質・能力」「教育課程の編成・実施」「入学者の受け入れ」の３つがあります。要するに、高校を出るときに、どのような力を持った子を育てたいのかを、はっきりさせましょうというのが、この最初の「育成を目指す資質・能力」です。そのために、どのような教育課程の編成を実施するのかというのが、真ん中のカリキュラムの部分です。どのような子どもたちを受け入れたいのかに関する方針、この３つをつくってという話が来ています。

今日の２校のポイントもそうなのですが、まず「探究」をイベント的にさせないためには、そもそも、その学校でどのような子を育てたいのかをきちんと定義することだろうと思います。２校ともその議論があって、先ほどの宮津高校・宮津天橋高校でもありました「自立」したり「REALISE!」であったりなどの目標があって、それを実現するためには何が必要か。そのために探究も必要です。しかし、通常の教科教育の中でもこれがきちんと身に付けられるようになるためには、やはり、アクティブラーニングを入れないとならない。それぞれの科目を、もう一度、目標に照らし合わせて位置付けていく作業をすることによって全体に広げていくという方向性が、今、求められているのだろうと思います。このように少しずつ草の根的に広げていく方法、または、スクール・ミッション、スクール・ポリシーに合わせて各教科の位置付

けを再構成していく方法、この２つで広げていくということなのでしょう。

滋野：　ありがとうございました。今、２つ目の質問について、山田先生から育てるべき生徒像をみんなで共有するというコメントがありましたが、お二人の高校の取り組みから、簡単にコメントをいただければと思います。

岡田：　報告の中でも少し話をさせていただいたのですが、本校は、過疎・少子化が進んでおりまして、生徒がいない、子どもがいない地域です。近隣の中学生全員が本校に来ても定員を割ってしまうのです。その上、上位層は近くの進学校に流れるということがありますので、近隣の進学校と本校で、大学進学率、または国公立の数を競争できるかといった議論があったようです。そのような中で、高校がなくなったら地域もなくなる、そこを守るのは高校ではないか、若者ではないかと展開して、地域との協働の中で若者を育てる、力を育てる、地域づくりのリーダーをつくるという考え方で、学校の中が統一しているところはあるかと思います。

滋野：　宮津高校・宮津天橋高校はいかがでしょうか。

多々納：　本校では、事例報告でも述べさせていただきましたが、探究の立ち上げに先だって、教員研修で目線を合わせることをしました。やはり進学を期待されているので、従来の偏差値教育は避けては通れないところはあったのですが、それが学びの楽しさにつながっていないところが非常に問題だったのです。山田先生からもありましたが、まさに、そこからどのように脱却するかということから「安心と愉しさを」というワードを立ち上げました。安心というのは、一定の学力、上級学校に行っても通用する力は確実に担保します、ということです。その手だてに探究をきちんと位置付けていくことです。当初、従来の授業から幾らか単位数が削られることにもなるという時点で、ただ単に減るのではなく発展的だと、ある一定の目線合わせができていたと思います。そのため、今、全校体制でできているのだろうと思っています。

滋野：　ありがとうございます。

事例報告に関しまして、皆さまから出された質問を幾つかまとめてみました。今回のフォーラムが「高校の探究から大学の研究へ」というテーマでもありますので、進路に絡んだところについても後で触れて、皆さんと一緒に協議しようと思うのですが、まず、高等学校の分掌組織体制、校内運営です。両校ともに公立高校ですので、当然、転任されてくる先生がおられる中で、特定の教員に負担がかかることなく、全ての教員が探究を指導できるようになっていくためには、どのようにすればよいのかというところに、１つ目の焦点が絞られるかと思います。

私も、幾つかの学校で伴走していますと、義務教育の学校でも高校でも、校内組織の体制で同じような課題が出てきます。先ほど、紹介していただいた「探究推進部」があるなどの部分は省略していただいて、どの部分に関わってもよいので、学校の中で工夫された点がありましたら、村岡高校から順にお話しいただけますでしょうか。

岡田：　組織については、全校職員で組織をつくっています。校内運営につきましても、できるだけ無理のかからないように、得意分野を指導するということがポイントです。報告の中にも、総合的な探究の時間は８つのグループで縦割りにするとありましたが、この基本は、部活動の単位で縦割りにします。民芸班はスキー部とバレー部の顧問が就き、指導します。不特定多数で集まるよりも、そのように部活動の単位

で行う方が、生徒は動きやすいのです。土日も活動しますので、部活動の日程を考慮しやすいのです。そのようなこともあって、縦割りにしています。３年生が指導する、２年生が引き継ぐ、１年生は覚えるという役割で活動を進めています。

例えば「環境Ｂ班」が森林を探求する場合には、そこには計算等が入ってきますから、数学の先生に担当してもらう。一人の数学の先生が変わって、次の先生が入って、そこでまたコミュニケーションが生まれて、引き継ぎもできるだろうなど、できるだけ無理のない班を持とう、先生がいなくても３年生が指導できる体制をつくろうということから、今の形になったと聞いています。

今、元締めの先生がいます。教育コーディネーターである地域おこし協力隊が、この３月で任期が終わって、10 月まで不在でした。10 月に新しい人に来てもらったのですが、その間は大変でした。通常は地域おこし協力隊が、教育コーディネーターとして手となり足となり動いていただいているのが本校の体制の特徴です。その先生は、みんなを巻き込むよう声を掛けています。みんなで分担してできているということです。

それから、学校設定教科「地域探求」では、大学の先生に入っていただくのですが、職員を、１年生団、２年生団というように３つの大きな学年団に分けています。その先生たちが分担してＴＴを行っています。そのため、班別活動やフィールドワークなど、その時の授業の形態において柔軟に担当者や人数を配置します。できるだけ負担が最小限になるように行っています。

滋野：　転任の先生たちは、初めに何か特別にガイダンスなどを受けられますか。

岡田：　全員で、一緒に動いて覚えていくという流れで行っています。大まかに説明はしますが、細かいことまでは言わずに、一緒に動こうということです。

滋野：　ありがとうございます。宮津高校・宮津天橋高校は、いかがですか。

多々納：　まず、本校では、１年生もそうなのですが、２年生の普通科の各クラスの中に組織があり、３人の「探究委員」がいます。私がその生徒たちに指示を送ると、それを各クラスで流し、何か現状と指示が合っていないところがあると、その委員から話が上がってくるというように、基本は探究委員を中心に回しています。

すでに名前を出している探究推進部では、二人分掌で、私は常に定点観測をしているのですが、あと一人が１年生の担任に翌年入って、１年生の探究の担当をして実働部隊として行う。そして、新たな教員を探究推進部に迎え入れて、勉強してもらう。校内人事が、偶然このような巡りになっています。

本校にはコーディネーターがおりません。私が地域活動をする「フィールド探究部」という部活動をしながら、地域の人とのコネクションをつくっています。それが特定の教員の負担になっているかと言われると、私は、自由に丹後を駆け回らせていただいて、ライフワーク化していて、どちらかというとそれが好きなので、良しとしています。

滋野：　ありがとうございます。今、校内の体制について、お二人の先生からお話しいただいたのですが、この組織体制づくりについて、山田先生が入られている学校のことも含めて、何かアドバイスがありますでしょうか。

山田：　先ほど、僕にいただいた質問とも関係すると思いますし、おそらく、２校ともそうですが、いかに混ぜるかが大事だと思うのです。

どうしても先生は教科の縦割りやクラスがあって、良くも悪くも、自分のクラスや自分の教科の責任を持っています。そこをどのようにして違う教科や違う学年の先生と、探究という教科を超えたチームをつくり、緩やかに連携していくのかですが、２校とも自然にそうなっている。今、合教科とも言いますが、これからはそのように教科に縛られずに、先生たち自身が混ざっていくことがとても大事なのだろうと改めて思いました。

東山高校でも授業公開研究会を定期的に行っているのですが、そのときも、教科の違う３人の先生でチームを組んでいます。例えば、国語の授業を、理科と英語の先生がＴＴのようにサポートに入って、１つの授業をつくるなどです。いかに先生方が柔軟に、自由に動いて生徒たちの学びに関わるか、探究が学校の組織文化に与える影響は非常に大きいと思うのです。ここで風穴を開けるきっかけになっているのではないか、そのようなものが出てくると、普通の教科の中でも自然にそのようなことが議論されるようになって、非常に透明感のある学校になる。他のクラスだが、他の先生がその子に指導するような形がとても良いのではないかと思いました。

滋野：　ありがとうございます。１つのものを取り組む中で、みんなが同じものを共有していける、共通の話題ができることが非常に大きいのでしょう。村岡高校と宮津高校・宮津天橋高校の場合では、その辺りはいかがでしょうか。

岡田：　私が実際に生徒と接して、という場面は少ないのですが、先生方の動きを見ていると、先生方も楽しんでいます。それをきっかけに、生徒以上に地域に愛着を持ってくれる先生もいますし、休みの日には、廃村を巡って「こんな課題がありますよ」と私たちに言ってくれる先生もいます。フィールドワーク等の時間が足らず、時間外に動いてくれることもあるのですが、嫌がらずに楽しそうに活動してくれています。私たちの立場としては、先生も楽しんでくれている体制をつくっていかないとならないと、日ごろから感じているところです。

滋野：　ありがとうございます。宮津高校・宮津天橋高校は、いかがでしょうか。

多々納：　本校でも、特に、２年生の探究は16名の先生方に当たってもらっていますが、本校は地域に限定しているわけではないので、今年から、とにかく外で誰かとつながってください、何かしら情報を得て、生徒たちに還元してくださいというようにトライしています。基本的に、学校の組織の中では、役職のない教員は部活動の関係での他校との連絡くらいしか外部とつながることがないのです。しかし、新たなことを得て、良い刺激をもらっていると言っている先生もいます。１年生で地域の課題を探そうというのも、今までそこに目を向けていなかった教員が多かったからで、今では地域への気付きにつながっていると思います。われわれ教員にとっても、本当に有意義な活動と思っているところです。

滋野：　ありがとうございます。

村岡高校の報告への質問ではありますが、おそらく宮津高校・宮津天橋高校も同じで、コーディネーターがおられる、おられないはあると

は思うのですが、地域の人との人脈づくりについては、いかがでしょうか。

それから、村岡高校のみへの質問なのですが、上級生と縦割り組織をつくるときの工夫を併せてお答えいただけたらと思います。

岡田： 人脈づくりですが、これも無理のないようにということです。初めにスタートしたときには、フットワークの軽い方や若者と連携したというように聞いています。その当時、地域おこしの若者懇談会という会が存在していて、その人たちに声を掛けて、その中に棚田の保全をしている若者がいた。地域の活性化をしている人たちが町の役場の職員であったなど、そのようなところから少しずつ広がっています。

それから、鳥取大学とのつながりです。初めにも言いましたが、生活圏が鳥取なので、鳥取からも、本校に来やすい状況にあるのです。鳥取大学が、まず香美町に依頼されて、地域の集落調査をされていました。高校生も手伝いますよ、というところから集落調査が始まりました。まず手の届くところから、また、相手としてはフットワークの軽い方から、少しずつ範囲が広がって、今のような形になっている。環境班でも、初めはごみ拾いから始まったと言われています。しかし、ごみ拾いだけでは駄目だろう、次に何をしようかというような展開をしていきました。

滋野： 上級生との縦割り組織では、何か工夫をされていますか。

岡田： 部活動の単位、それが、顧問も生徒も負担が軽く、活動もしやすいということです。

滋野： ありがとうございます。宮津高校・宮津天橋高校からも、大学も含めた、人脈づくりのお話をしていただけますか。

多々納： まず、人脈づくりについては、私の報告の中で、巨木の調査でマッピングしたものを見せましたが、丹後の村という村は全て回りましたので、そのようなところで出会って、お話しいただいた面白い方を私がとにかく捕まえました。それから、当初、何をしたらよいか分からなかったときに、当時の管理職に勧めてもらった「京都府立丹後海と星の見える丘公園」で出会った方々が好意的にハブになって、いろいろつなげてもらって、今もその広がりは続いているのです。新たな出会いがたくさんあって、私は楽しいと思っているところです。

大学の方々とのコネクションに関しては、まずお隣にいらっしゃる滋野先生が、本校の探究に最初に注目して来ていただいて、ご専門である地学で、風に関するアドバイスをもらったり、丹後海と星の見える丘公園で、偶然出会った京都教育大学の先生をがっちりキープしたりというところです。杉岡先生は、昨日も会いまして、おそらく、あさっても会うのですが、偶然ご一緒させていただく機会が多いので、いかがですかと、すぐに声を掛け、巻き込ませていただいています。

滋野： ありがとうございます。村岡高校では、鳥取大学と長い間続いているということですが、その秘訣は何かありますでしょうか。

岡田： 秘訣ということはないのですが、やはり３年ずつの担当制でしていただいているの

が、よい流れになっているのではないかと思うのです。今、２サイクル目の先生もおられます。足かけ６年、継続して学年を見ていただいています。大学の先生も異動がありますから、そのときにはキーになっている筒井先生と連絡を取りながら次の担当者を決めてもらいます。そのような方が大学におられることが、本校としてはとてもありがたいですし、そのようなところが続いている理由かと思います。

滋野：　ありがとうございます。村岡高校への質問になるのですが、全国から入学してきた生徒と地元の中学校から進学してきた生徒の温度差やモチベーションについて、特に工夫されている点はありますでしょうか。

岡田：　兵庫県の北部以外から来ている生徒は、現在はアウトドアスポーツ系です。中学校のときと環境を変えたいと思って来る生徒もたくさんいます。もちろん、地元には自然やいろいろなアウトドア施設がありますから、アウトドアスポーツに関心を持って来る生徒もいますが、一概にそのような生徒ばかりではないのが現状です。そのため、モチベーションが違う生徒もいますが、学校の風土や地域の温かさなどといった他校に負けないような雰囲気がありますし、地域イベントのマラソン大会でいろいろな人に声を掛けてもらうなど、地域の人と触れ合う機会の中で生徒たちは変わっていきます。

香美町が何を求めるかといったら、移住定住です。しかし、本校の狙い、私たちの考えは、その子が自分の地域に戻って、そこで活性化するリーダーになってくれる生徒をつくりたいというところがありますので、そこまで残れとは言いません。ステージの上でプレゼンテーションをしている生徒の姿を見ると、本校での取り組みは間違っていないのではないかと感じます。小規模ですので、役割がきちんと全員に与えられます。卒業するときには、多くの生徒から入学して良かったという声を聞くことができます。

滋野：　ありがとうございました。

山田先生、大学と連携して探究活動を進めていくことに関して、お互いにウィンウィンの関係がないとならないとは思うのですが、大学の教員から見たメリットはいかがですか。

山田：　少し気になるのは、大学と連携しているのかということです。大学の先生に協力を仰いでいるという話と、学校の場合は学校が主語だと思うのですが、本当の意味で大学と連携と言ってよいのかという話がまずあるのです。本来は、難しいのでしょうか。どうしてもそういうのが好きな先生とのコネクションができ、それがきっかけになってというように、偶然そのような知り合いやコネクションがあればつながることはできるが、それは属人的なところがあるので、つながれない。さらに言うと、僕も皆さんもそうですが、捕まえられる人はすでに捕まえられていて、そのようなことに興味のある大学の先生自体がどこにいるのだろうというように、先に手を付けた方が勝ちになっている印象もある。正直に言うと、大学の人たちが、高校のこのような取り組みを一緒になってしようという気運が高まっているかというと、おそらく全体としては、今はまだ、受け入れた学生の初年次教育や学修指導など、多様化している学生の問題にどのように向き合うのかで手いっぱいというところがあり、少し課題かと思っています。

滋野：　ありがとうございます。

このフォーラムの大事な趣旨でもある、大学との接続を考えれば、卒業生の進路選択はどうなのかという質問がありました。少しお話しいただいた例もありますが、村岡高校、宮津高校・

宮津天橋高校の生徒の進路選択はいかがでしょうか。

岡田：　本校の現状として、他校と進学で競り合うのは、なかなか厳しい状況からスタートして、どのように特色を出して進学に生かしていこうかというところです。実際、数字で言えば、英語コースやユニバーサルコースの類型がスタートしたときには、国公立が数名でしたが、地域との探求活動を始めてからは、７～８名くらいまで上昇したので、成果だと思います。目標としては、各学年の 20%という声も上がっていたようですが、コロナがあって、少し厳しかったりします。

また、近年、各校が探究活動を始めているので、今までと同じような進学指導ではなかなか難しくなりました。本校の受験は、総合型選抜が中心でした。探求活動とプラスして、本校は学校設定教科で「スピーチ」という授業を行っています。２単位で、１つはプレゼンテーション能力向上。もう一つは「夢ゼミ」といって、自分の将来、キャリアについて考えます。それから、小規模校ですから、個別の指導をしながら、進路に向けての取り組みをします。今までは、そのようなことで走ってきたが、新しい教育課程になって、学習指導要領が始まって、進路指導を含めてどのようにするかというのは、今の本校の課題でもあり、議論しているところです。

滋野：　卒業論文を進学に利用されることについて具体的に教えてほしいという質問がありましたので、簡単に教えてください。

岡田：　夏休みに、第１回目の原稿の締め切りを迎えます。それは、２学期に総合型選抜が始まるからです。３年間の自分の取り組みをきちんと整理して、まとめる機会をそこでつくります。生徒一人に教員が担当で付いて、その卒業論文を磨いていきます。自分の３年間のまとめをして、その生徒に自分の探求の柱を植え付けていくのです。そして、進路に向けての取り組みをしていく。最終的な発行は３月なのですが、大きな筋は２学期でつくり上げているという経過で取り組んでいます。

滋野：　ありがとうございます。では、宮津高校・宮津天橋高校の卒業生の進路選択という観点からはいかがでしょうか。

多々納：　この報告の資料作成には間に合わなかったのですが、つい最近合格発表がありまして、幸い、総合型選抜で出願をしていた者がみんな丸をもらいました。しかも、探究のことをネタにして、きちんと評価をいただいたので、私は、担当者として、ほっと胸をなで下ろしているところです。やはり行ってきたことをきちんと面接や志望理由書で書けて、具体的な何かがあるところが全く違うかと思っています。

私の報告に対する質問の中に、志望が変わった生徒の、その志望の変更は良かったのかというご質問がありました。果たして、それが良かったか悪かったかは、今、その子が判断できるかといったらそうでもなく、私が判断するわけでもなく、ただ、現時点で言えるのは、それによって前向きな気持ちで学校生活を送れて、勉学に励めたことが全てではないかと思います。そして、そこから大学に進むので、大学での学修・研究にもおそらく前向きに臨むだろうと思います。現時点で、そこまでで正解と言ってよいのか、また、その先は分からないところがあります。

これは村岡高校も同じだと思うのですが、大学や専門学校など、とにかく一度出るのです。探究を立ち上げて本校はそれほど時間が経っていませんので、出た後に戻ってくるかどうかという結果が出たというものがないのですが、私が見てきたフィールド探究部の生徒たちは、

心は丹後に置いていっています。どのような形かは分からないが、帰るかもしれないし、帰らなかったとしても、丹後のことを何か応援できるようにしたいと言ってくれるのは、とても心強いと思っています。

滋野：　ありがとうございました。山田先生、初めの基調講演でもお話はされたのですが、大学に入学してくる学生という観点から考えると、このような取り組みをして大学に入ってきた学生はいかがですか。

山田：　やはり、いろいろな形で明らかに違いが出てきています。例えば、グループディスカッションやプレゼンテーションをすることになったときに、数年前だと「どうやったらいいんですか？」のように、みんながちがちになっていたのが、本当にスムーズにしている。これは、ほとんどの大学人が経験していると思います。一方で、みんなタブレットなので、パソコンのキーボードが打てないなど、逆に使えないものがかなり出てきました。

進路について、僕が最後に投げ掛けて終わりたいと思います。校内で探究がなかなか広がらない、さらに言えばアクティブラーニングが広がらないのです。僕も５～６年前から中高に関わるようになって、一番多く受けた質問が「それをやって、進学実績にプラスなのですか？」です。従来の学力的な形でのラインに邪魔になるものではないか、教科書が終わらないのではないかという話が以前からあって、学校の中でなかなか広がらない。そこを熱量で、属人的に突破口を見つけて行っているところと、従来型の方法で、どこどこ大学に何人合格というアドバルーンを掲げること自体がその文化をつくっているところがあるので、少し暴論過ぎるのですが、やめた方がよいのではないかと個人的には思うのです。そうではなくて、その子自身がしたいことができるための選択をしてもらう、そのマッチング率100％を目指すと、非常に幸せな高大連携だと思いました。勉強ができる子、できない子ではなくて、したいことを探究するための大学の選択につながるようになっていくとよいと思いました。

滋野：　ありがとうございます。村岡高校では、地元に戻ってくるのを期待しつつ、それぞれが生きていく場でどれだけ頑張っていく子に育てるかとおっしゃっていましたが、探究活動をつくっていかれる中で、そこから育てたい生徒像や学校像など、何か一つ最後にメッセージとしてお話しいただけたらと思います。

岡田：　もちろん、地元に残って、地元の活性化をしてくれるのが最大の夢ですし、目的です。そのような中、本校はキャリア教育で、地元の活性を意識した指導をしています。その取り組みの中で、それをベースにしながら生徒は進路を考えています。例えば、美容師になるために専門学校に行って、都会で美容室をするが、お盆に帰ってきたら、地域のおじいちゃん・おばあちゃんの散髪をしてあげたいというような意識を持ちながら進路を選択していくのは、本校独自のキャリア教育ができているのかと思います。

本校の近くに廃校になった高等学校もありますし、その地域が今どのような姿になっているかを地域の方が目の当たりにされています。私たちも、それを見ています。そのような中で、

地域と行政が今以上にきちんと連携を取らないといけないと感じています。学校だけでは無理ですし、人だけでも無理なので、それを１つの線や面にして、さらに地元で活躍できる、または地域を意識して、将来、自分の課題・生き方を探し求めてくれるような生徒を、これから一人でもたくさんつくっていきたいと思っています。

村岡高校のみでは無理なので、今日、見ていただいている方や、今日、お知り合いになった方などと、さらにコミュニケーションを取って、連携をさらに広げていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

滋野：　では、宮津高校・宮津天橋高校の多々納先生、お願いします。

多々納：　僕がそうであったように、学校と家の行き来になってしまうと、生徒の可能性は狭まると思うのです。それを打開するために地域というものが存在すると思いますし、それは教員ももちろんそうなのです。つまり、学校の教育活動は教育全体のうちの一場面に過ぎなくて、先ほど、岡田先生からもありましたが、地域や行政の力などが一体となって、生徒の成長を後押しできるのが一番よいのかと思います。私は、今の担当をする前の自分よりも、今の自分の方がよほどハッピーな人生を送れていると思っています。とても楽しいですし、これからも頑張ろうと思っています。

滋野：　ありがとうございます。

最後に、宮津高校・宮津天橋高校への質問の中で、都会でも同じように地域に根差した探究活動は可能でしょうかという質問がありました。村岡高校も宮津高校・宮津天橋高校も、どちらかというと人口減少が進む地域の事例報告となりましたので、山田先生、これに答えていただいたら探究活動全体のことになるかと思いますが、いかがでしょうか。

山田：　「地方だからいいよね」「資源がいっぱいあるからいいよね」というのは、僕よりも先生方の方が言われると思います。もちろん、リソースの違いはあると思いますが、歴史や環境など、いろいろな問題はむしろ都市部の方が山積みになっている部分もあります。テーマは変わるかもしれないですが、課題の立て方はあるのではないですか。ただ、早くしないと、学校が密集しているところは取り合いになるかもしれないという問題はあるかもしれませんが、十分に可能だと思います。

滋野：　ありがとうございました。山田先生に、最後に一言まとめていただいて、終わりにしたいと思いますが、いかがでしょうか。

山田：　僕は 50 分もつかなと思っていたのですが、あと１時間くらい話したいです。本当にたくさんあって、大学のことも、さらにお伝えしたい。少し思い出したのは、京都大学の教育学部の特色入試の子たちが、グループで調査活動をしているときに、リーダーシップを取っている子たちはみんな特色の子たちでしたという事例がありました。ただ単にプレゼンが上手というわけではなくて、グループの中でリーダーシップを発揮してくれている子たちがほとんど探究を経験している、それがとても印象に残っているエピソードだとお伝えしたかったのです。

しかし、それを冷めて見る子たちも出始めていて、自分が浮いているように感じて、遠慮するようになっていく。つまり、まだまだ、その人たちが前に出てもよいという雰囲気ができていない状況もあるので、やはりいろいろな学校がこのようなチャレンジをしていくと、よりそのようなところに臆せずにチャレンジして、

リーダーシップを取っていく子たちがさらに増えると思います。学生たちは、よい考えを持っているのに言わないのです。自信がないのです。そのため、自信を付けてほしい、間違っていてもよいから、自分はこれがよいと思うことを発言できるような子になるとよいと思っています。大学では非常にリッチな学びが幾らでもできるので、そのような形を探究に期待したいと思っています。

もう一つ、学生たち、特に関大生を見ていて思うのですが、先ほどのテーマでも将来のことがありましたが、少し早過ぎるキャリア教育がとても気になっています。みんな入学時点で、どの職業やどの職種に行かなければならないであったり「私、何も決めていないんです」と言ったりしているのです。なぜ、そのように早くなったのだろう。今はどの職種やどの職業などは要らない、ただ、どのようなところで自分が働きたいのか、どのようなところに自分は価値を見出したいのかというところまでをしてほしいです。見ていて、非常にかわいそうで、窮屈な感じがしています。そのキャリアの問題も、少し気になっています。

組織の問題も、まだまだ話をしたいのですが、これくらいにしたいと思います。課題をたくさん考えさせられました。とても楽しい時間を、本当にありがとうございました。

滋野:　どうもありがとうございました。私も、とても勉強になりました。2022 年度から、高等学校では新しい学習指導要領が完全実施になります。このフォーラムをきっかけに、それぞれの学校での取り組みがさらに活発になりましたら、大変幸いに存じます。

本日は、皆さん、お忙しい中、本当にありがとうございました。

第１分科会【国　語】

国語科における探究的な学びのあり方
～「実社会」「言語文化」をキーワードに～

［報告者］　中島　涼太（京都市立紫野高等学校 教諭）
［報告者］　中川　　愛（京都市立堀川高等学校 教諭）
［コーディネーター］　加藤　　健（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）

「生涯にわたる社会生活に必要な国語」の力や「我が国の言語文化の担い手」となり得るための資質・能力の育成といった、新学習指導要領における国語科の目標を達成するためのこれからの学びのあり方について、高等学校からの授業実践報告を踏まえて考えるとともに、それを大学での学びにどうつなげていくかについて交流した。

概　略

中島氏より、次年度より実施される学習指導要領において新たに設置される「古典探究」の科目の位置付けについて確認した上で、関連資料を調べて発表したり、古語と現代語を比較して考察したりといった、探究的な学びのプロセスに関わる活動を意識した実践例をご紹介いただいた。現在でもさまざまな漫画や小説等のモチーフとなっている「竹取物語」を取り上げ、「竹取物語」が元ネタとなっているような題材について考察する活動や、古典に描かれている人々の悩みに、いわば「未来人」としてアドバイスを考える活動など、生徒にとって自身の興味関心から出発しやすく、古典世界と現代の世界をつなぐことを意識した実践例は、生徒の主体的な学びにもつながると考えられる。

中川氏からは、授業において当然のように発せられてきた「問い」を問い直すという視点が紹介された。授業者が用意した問いには、それ自体が生徒の視点を限定したり、読みの方向を狭めてしまう側面があるため、主体的な読みを促すために、生徒自身に問いをつくらせる活動はよく行われているが、問いをつくることがゴールとなってしまい、問いの「質」まで踏み込めていないことも多い。精読によって本文中に正解の根拠が見つけられることを意識させてつくる問いと、解決可能性を度外視した純粋な疑問としての問いを区別して考えさせたり、授業での「気づき」を毎回記述させ、共有することで、講座全体としての読みの深まりを狙う工夫をしたりと、生徒の知的関心を尊重しつつ、読む力と併せて問う力を育てていこうとする取り組みを示していただいた。

全体討論の内容

３人ずつのグループに分かれて、大学での学びに必要な「国語の力」とはどのようなものかについて、意見を交流するブレイクアウトセッションを行った。全グループのものを共有できては

いないが、話す・書くという「伝える力」とともに、改めて生徒の「読む力」を伸ばしていくことの重要性を再確認したという意見が複数挙がっていた。高校までの国語の学習においては、教科書をはじめ、与えられたテキストで学びを完結させることも可能であるが、大学での学びはそうではなく、学習者が自分にとって必要な資料を自身で探し、選び取る力が求められる。学習意欲や主体的な姿勢とともに、必要な文献にアクセスできる力も身に付けさせていく必要がある。

到達点と今後の課題

高校現場からは「大学での学びに必要な国語の力」が「大学に入るために必要な国語の力」の延長線上には必ずしも位置していないように捉えられる部分があり、次年度より実施される学習指導要領の趣旨を踏まえた指導と、いわゆる受験指導の両立ができるのかという不安の声も大きい。今回報告者よりご紹介いただいた授業例は、生徒自身に調べさせたり、考えさせたりする時間が多く、ある程度まとまった授業時間数を要するものであるが、探究的な学び、主体的な学びという観点から、授業の年間計画を検討する中で、このような取り組みを確保できるよう意を用いたい。

中島　涼太（京都市立紫野高等学校 教諭）

スライド1

なぜやる？　どうやる？
古典探究

京都市立紫野高等学校　中島涼太

スライド2

自己紹介

- 京都市立堀川高等学校　出身
- 京都市立紫野高等学校　赴任

  総合的な学習の時間再編プロジェクトチーム（H28～）

  企画部研究主任（H30～）

スライド3

総合的な探究の時間

- 目的…探究力
- 題材…総合的
- 手法…探究
- 小論文・志望理由書・面接、主体的なキャリア選択に活かせる
- 将来の学びや仕事に繋がることも

スライド4

古典探究

- 目的…国語力
- 題材…古典
- 手法…探究、創作、朗読、議論ほか
- ？？？に活かせる
- ？？？に繋がる

スライド5

古典学習の必要性

- 現代語…ことばの枝幹
- 古　語…ことばの根本

  （& 最も簡単な異言語）

スライド6

古典学習の必要性

- 現代文…自重トレーニング
- 古　典…ウェイトトレーニング・高地トレーニング

※研究分野を問わず過去の文献調査には不可欠

（タイムカプセルを開ける）

スライド7

古典探究の必要性

⇨**では、古典における探究学習の必要性は？**（なぜやる？）

・学習指導要領解説「**古典の意義と価値について探究する**」

答えの自明でない問いを自分で立てて、自分で解決を試みる

※大学入学共通テストのことを考えれば、「古典探究」は

文理を問わず事実上の必履修科目とも言えるが…

スライド8

古典探究の必要性－指導事項から

①思考力・判断力・表現力 A「**読む**」**力のため？**

ア・イ　構成や展開、内容を捉える

ウ・エ　解釈、評価、考察する

オ・カ・キ　自分の知見や感性を豊かにする

ク　言語文化について自分の考えを広げ、深める

スライド9

古典探究の必要性－指導事項から

②知識及び技能(2)「**言語文化**」**の理解のため？**

ア　日本文化の特質や、外国文化との関係

イ　文法・句法

ウ　言葉の変化や現代語の成り立ち

エ　読書の意義と効用

スライド10

古典探究の言語活動例

ア・イ　読んで調べて／読み比べて、発表・議論・論述

ウ・エ　創作・朗読

オ　関連資料を調べて発表・報告

カ　古語と現代語を比較して考察

特にこの二つは
学習指導要領解説で
「探究」の言及あり

キ　名句・名言が題材のエッセイ

スライド11

古典探究の必要性と方向性

⇨**常に探究学習でなくとも良いが、指導事項を網羅するのに必要**

…

⇨**では、どうやる？**

自分で課題解決を試みる

答えの自明でない問いを自分で立てて

古典の意義と価値について

受験生にとって文理問わず履修すべき科目

スライド12

古典探究の方向性

- **特定の作品の価値や解釈について探究する**
  - →自分で問いを立てるのが難しい
  - →国文学研究のノウハウが必要
- **探究活動を通して言語文化の理解を深める**
- **自分の課題に対するヒントを古典に求める**

発展問題・課題解決学習で良い
題材もまず現代小説の方が良い

スライド 13

探究案１－今に繋がる古典文学

①平安時代の伝記物語「竹取物語」を通読する

②与えられた資料から「竹取物語」の元ネタを探し出す

1.「古事記」開化天皇皇統譜・垂仁天皇皇統譜

2.「万葉集」巻一六・3791～3802の詞書

3.「丹後国風土記（逸文）」比治真奈井・奈具社の条

スライド 14

探究案１－今に繋がる古典文学

①平安時代の伝記物語「竹取物語」を通読する

②与えられた資料から「竹取物語」の元ネタを探し出す

（4.求婚難題の出典となった漢文を読む）

（5.阿倍・大伴・石上を歴史事典で調べる）

スライド 15

探究案１－今に繋がる古典文学

③もう一つの竹取物語（「今昔物語集」巻三一第三三話）を読む

④「竹取物語」が元ネタのものを自分で探して概要を発表する

→絵画・楽曲・小説・漫画・映画・アニメ・ゲーム・CM

キャラクター・人工衛星・農作物・施設・取り組み…

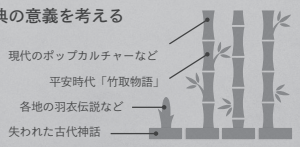
※自分の興味・関心に基づいて自由に探究する

スライド 16

探究案１－今に繋がる古典文学

⑤「竹取の元ネタ」から「竹取が元ネタ」までを系図にまとめ、

社会における古典の意義を考える



スライド 17

探究案１－今に繋がる古典文学

※これは元々は３年生の選択科目「古典購読」の指導案

→本来①～⑤の手順を全生徒がなぞるべきだが、３年の秋冬なら

②「竹取の元ネタ」・③「もう一つの竹取」・④「竹取が元ネタ」

の３つの活動を「人文系志望組」「受験組」「受験勉強不要組」

に割り振って、同時並行で活動してから⑤でまとめてもよい。

スライド 18

探究案２－過去に繋がる私の悩み

①自分の興味・関心や問題意識に応じて、テーマを選択する。

→恋愛・性差・家庭・社交・上下関係・仕事・離別・死…

②教員が事前にテーマ別に選定しておいた作品群をつまみ読み

③昔の人がどういう社会情勢で何に悩んでいたかを整理する

④「未来人」の目線で筆者や登場人物の「悩み相談」に応える

スライド 19

探究案２－過去に繋がる私の悩み

⑤逆に、自分の悩みが昔の人の目にはどう映るのかを考える

→過去への視線を反転させて現代社会に投射する

スライド 20

古典探究の必要性と方向性：結論

- 自己の知見や感性を豊かにし、言語文化を理解するために、
- 古典作品や関連資料を用いて、自分の興味・関心に従って、
- 学習者自身が**古典世界と現代の世界を往還する**ような活動。
- それは、今に活かせるし、未来に繋がる。
- ただし、指導には相応の工夫が必要。

スライド1

2021年12月4日
第19回 高大連携教育フォーラム　第1分科会　実践発表

現代文の授業における「問い」とは
～『舞姫』を通して～

京都市立堀川高等学校　中川　愛

スライド2

自己紹介

＊京都市立堀川高等学校　出身
＊京都市立塔南高等学校　赴任（H27～）
＊京都市立堀川高等学校　赴任（H30～）
＊担任7年目　現在3年生の担任

スライド3

「問い」について問う

当然のように「問い」と「解答」を用意して授業に臨んでいて良いのだろうか？

本当に「問い」は大事なのか？

スライド4

「問い」について問う

『広辞苑』によると…
「問い」＝問うこと。
「問う」＝物事を尋ねただして返答をはっきりさせる。
「尋ねる」＝何かを手づるにして源を求めていく。

スライド5

「問い」について問う

国語（現代文）の授業における「問い」

文章全体を精確に読解し、その本質に迫る（さらに自らの考えを深める）ために、授業者及び生徒が答えを期待して発するもの。

スライド6

「問い」について問う

授業の中の「問い」
①教員が用意する（発問/設問）
②生徒に考えさせる（例：初読時の疑問）
③生徒が自発的に持つ（例：授業で扱う意味）
→本当に「問い」なのか？

スライド 7

「問い」について問う

「問い」ではなく「指示」？

「用意された答え」を忖度するのでは？

生徒の「疑問」は単なる「答えようのない問い」？

生徒に「問い」を作らせるのは何のため？

「問い」は本当に大事？

スライド 8

「問い」について問う

「問い」は大事！「問う」前に意識したいことは…

生徒に「未知」と「既知」の弁別を促す

生徒と授業者が互いに「未知」と「既知」の領域を知る

スライド 9

『舞姫』を読む前に

【大テーマ】

これまでの授業で読んできた「近代小説」を貫くもの（構造）を俯瞰的に分析する

「近代の延長線上に私たちがいる」

「近代的自我」VS somethingという構造

→新指導要領により「定番教材」ではなくなる？

スライド 10

『舞姫』前篇　～読むための「問い」～

「余」はどのような状況でこの文章を書いているか

「余」はなぜこの文章を書こうと思ったのか

スライド 11

『舞姫』前篇　～読むための「問い」～

「クロステル巷」の景観はどのように描写されているか

豊太郎とエリスが「離れがたき仲」になったのはなぜか

スライド 12

『舞姫』前篇　～読むための「問い」～

「我が学問は荒みぬ」とあるが、そのかわりに豊太郎が手に入れたものは何か

スライド 13

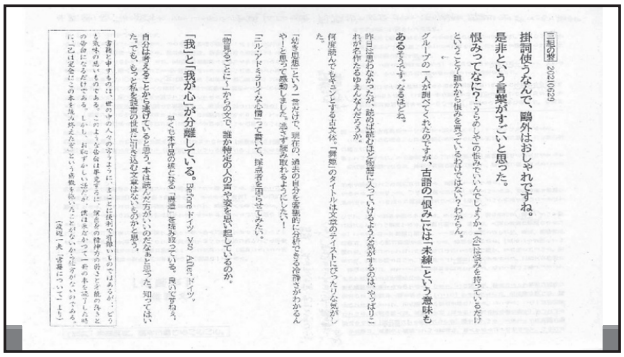
『舞姫』前篇　～内発的な「問い」～

「現代文研究Ⅱ日々の記録」より

毎回の授業で「学んだこと（普遍的教訓）」と「気づきや感想」を書く

→読むための「問い」・「読みたい」「読めた」の表明が見られる

スライド 14



掛詞使うなんて、職外はおしゃれですね。

是非という言葉がすごいと思った。

恨みってなに？ どうやったらこの恨みがいなくなるのか、二点に強みを持っているだけということを知るかに恨みを見ているわけではないからわからん。

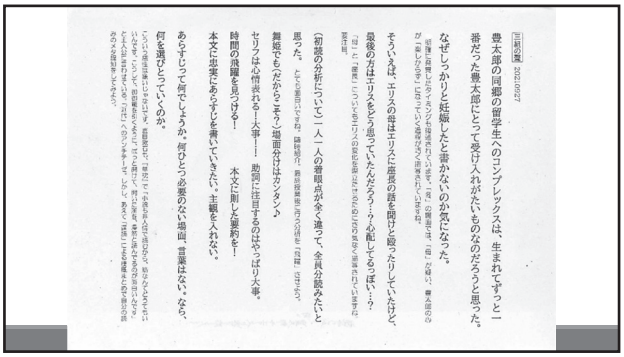
グループの一人が例でくれたのですが、古語の「恨み」には「未練」という意味もあるそうです。なるほど。

昨日に思うのからが、絶対的な存在に入っていけるような気がするのは、やっぱりこれがあるからなんだろうか。

何度読んでもエンジンとする点が「舞姫」のタイトルには合ったりな気がした。

「我」と「我が心」が分離している。

スライド 15



豊太郎の同郷の留学生へのコンプレックスは、生まれてずっと一番だった豊太郎にとって受け入れがたいものなのだろうと思った。

なぜしっかりと妊娠したと偽かないのかが気になった。

そういえば、エリスの母はエリスに座席の話を聞けと殴ったりしていたけど、最後の方はエリスをどう思っていたんだろう？心配してるっぽい…？

（初読の分析について）一人一人の着眼点が全く違って、全員分読みたいと思った。

舞姫でも「だから」「そう」場面分けはカンタン♪

セリフは心情表れる！！大事！！　助詞に注目するのはやっぱり大事。

時間の流れを見つける！　本文に即して要約を！

本文に忠実にあらすじを書いていきたい。主観を入れない。

あらすじって何でしょうか。何ひとつ必要のない場面、言葉はない。なら、何を選びとっていくのか。

スライド 16

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

①通読後の感想や解釈を記述しよう
　前篇の内容と接続させて述べること

②豊太郎の心情（の変化）に関する問いを一つ考えよう
　その問いが良いと思われる理由、解答に至るプロセスの案も明示すること

スライド 17

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

③その他に、読解の鍵となるであろう箇所、純粋な疑問、授業で考えたいことなどを書こう

スライド 18

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

②より

「いかで命に従はざらん」と答えたときの豊太郎の心情を説明せよ

「ああ、余はこの文を見て初めて我が地位を明視し得たり」とあるが、このときの豊太郎の心情を、前後の内容から読み取って述べよ

スライド 19

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

②より

「ああ、なんらの特操なき心ぞ、『承りはべり』と答へたるは」から、当時の自身の言動を、日記を書いた日の豊太郎がどのように思っていることが分かるか

スライド 20

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

②より

「一点の彼を憎む心」とはどのような心か

スライド 21

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

③より

エリスのその後が気になって仕方がない

なぜ豊太郎はエリスを連れて帰ろうとしなかったのか

エリスがそこまで不安定になる…？

スライド 22

『舞姫』後編　～自ら「問う」～

③より

いつから豊太郎はエリスに愛情を抱かなくなったのか

結局、豊太郎は何のためにこの日記を書いたのか

なぜ鷗外はわざわざこのような作品を書いて世に発表したのか

スライド 23

『舞姫』を通して

「現代に生きる私たち」を俯瞰的に捉えなおす

文章読解のために「問う」こと自体を捉え直す（授業者も生徒も）

「問いづくり」は安易に取り入れがちだが生徒に「問う力」が培われた段階でこそ有効

スライド 24

「問い」は大事

本当に読めている？（読みたい！）と問う

「問える」は「読める」

「読み切れない」部分も問い続ける

加藤　　健（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）

スライド1

2021年12月4日
第19回 高大連携教育フォーラム 第1分科会

国語科における探究的な学びのあり方

～「実社会」「言語文化」をキーワードに～

京都市教育委員会
学校指導課　指導主事
加藤　健

1

スライド2

新学習指導要領における「探究」

①「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」へ

○第1の目標
総合的な学習の時間（平成 29 年告示）
探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（後略）

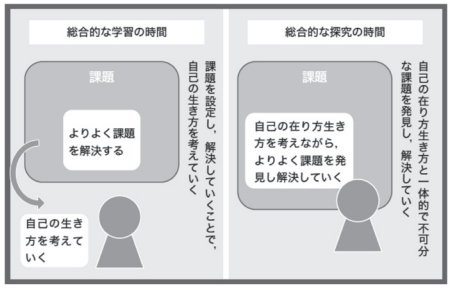
総合的な探究の時間（平成 30 年告示）
探究の見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，自己の在り方生き方を考えながら，よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。（後略）
（指導要領解説　総合的な探究の時間編）

2

スライド3

総合的な「探究」の時間へ

課題と生徒との関係（イメージ）



「学習」→課題を解決することで自己の生き方を考えていく学び
「探究」→自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を
自ら発見し，解決していくような学び

3

スライド4

総合的な探究の時間　「質の高い探究」に向けて

Ⅰ　探究の過程の高度化
①探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）
②探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）
③焦点化し深く掘り下げて探究している（鋭角性）
④幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）
などの姿で捉えることができる

Ⅱ　探究の自律化
①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）
②探究の過程を見通しつつ，自分の力で進められる（運用）
③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）
などの姿で捉えることができる

（指導要領解説　総合的な探究の時間編）

4

スライド5

新学習指導要領における「探究」

②名称に「探究」を含む科目の新設

・古典探究
・地理探究
・日本史探究
・世界史探究
・理数探究基礎
・理数探究

「当該の教科・科目における理解をより深めるために，
探究を重視する方向で見直しが図られたもの」
（指導要領解説　総合的な探究の時間編）

5

スライド6

新学習指導要領における「探究」

※各科目の「探究」と総合的な探究の時間の「探究」の違い
総合的な探究の時間における探究では，
①学習の対象や領域が，特定の教科・科目等に留まらず，横断的・総合的である

②複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究する

③解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や，唯一の正解が存在しない課題に対して，最適解や納得解を見いだすことを重視する
（指導要領解説　総合的な探究の時間編）

6

スライド 7

「古典探究」について

1 性格

伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視。

2 目標

(1)生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

7

スライド 8

「古典探究」について

「古典探究」は，共通必履修科目「言語文化」により育成された資質・能力のうち，「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため，ジャンルとしての古典を学習対象とし，古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し，自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視した科目として新設しています。

平成 30 年改訂の高等学校学習指導要領に関する Q&A ＜国語に関すること＞
https://www.mext.go.jp/content/1422366_001.pdf

8

スライド 9

「古典探究」の指導事項より

探究的な学びと特に関連が強いように思われる項目

〔思考力，判断力，表現力等〕 A 読むこと

エ 作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察すること。

オ 古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすること。

カ 古典の作品や文章などに表れているものの見方，感じ方，考え方を踏まえ，人間，社会，自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。

キ 関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。

9

スライド 10

新学習指導要領における「実社会」について

実社会とは，私たちが生きる現実の社会そのものである。実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるとは，学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも，社会人として活躍していく高校生が，他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し，それを適切に使うことができるようにすることを示している。

（指導要領解説 国語編）

10

スライド 11

国語科目における「実社会」

○「現代の国語」は，実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目として，……

○「論理国語」は，実社会において必要となる，論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成を重視した科目として，……

○「国語表現」は，実社会において必要となる，他者との多様な関わりの中で伝え合う力の育成を重視した科目として，……

（指導要領解説 国語編）

11

スライド 12

各科目の指導事項より

「現代の国語」 読むこと イ
目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。

「論理国語」 読むこと ウ
主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し，文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。

「国語表現」 書くこと ア
目的や意図に応じて，実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め，情報の組合せなどを工夫して，伝えたいことを明確にすること。

「探究的」な学びを意識している

12

スライド 13

報告を踏まえて考える

①「言語文化としての古典」のとらえ方

古典探究 「読むこと」の指導についての配慮事項
ウ 必要に応じて、古典の変遷を扱うこと。

古典の変遷とは，近世以前の文章史や文学史のことである。上代から近世に至る時代の推移と，文章や文学の変遷とは密接な関連がある。読んだ作品や文章の書き手がどのような考えをもち，その時代の他の書き手はどのような考えをもっているのかを知ることや，散文や韻文といった文章の種類が，書かれた時代によってどのように変遷しているのかなどについて理解を深めることが，主体的で多面的・多角的な視点からの読書にも結び付いていく。

13

スライド 14

報告を踏まえて考える

①「言語文化としての古典」のとらえ方

古典探究の目標（再掲）
（2）論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
（3）言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

14

スライド 15

報告を踏まえて考える

①「言語文化としての古典」のとらえ方

（現行）古典Aの目標
古典としての古文と漢文，古典に関連する文章を読むことによって，我が国の伝統と文化に対する理解を深め，生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

（現行）古典Bの目標
古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに，ものの見方，感じ方，考え方を広くし，古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

「古典探究」の目標では，対他・社会が意識されている

15

スライド 16

報告を踏まえて考える

②「教材ありき」から資質・能力ベースへの転換

- （既に価値付け，権威付けされた）「名作」「定番教材」をじっくり読ませることが中心となってはいなかったか
- テキストを授業の中で扱うことで生徒にどのような力を身につけさせるのかについて，改めて考える必要がある
- 学習の「手段」として消費していくだけではもったいない
- 作品そのものに対する（学問的）関心を喚起するようなアプローチも必要か
- 国語の授業をきっかけに文学部を志したというような体験をする生徒は今後も生まれうるか？

16

スライド 17

丸山真男『文明論之概略を読む』より

古典を読み、古典から学ぶことの意味は一一少なくとも意味の一つは、自分自身を現代から隔離することにあります。「隔離」というのはそれ自体が積極的な努力であって、「逃避」ではありません。むしろ逆です。私たちの住んでいる現代の雰囲気から意識的に自分を隔離することによって、まさにその現代の全体像を「距離を置いて」観察する目を養うことができます。

古典との「距離感」をどうとらえるべきか

17

スライド 18

求められる「国語の力」

①高校での学びに必要な国語の力

②大学入学時に必要な国語の力

③大学での学びに必要な国語の力

④大学卒業後（社会で）必要な国語の力

⑤生涯を通じて必要な国語の力

18

スライド 19

求められる「国語の力」

①高校での学びに必要な国語の力

②大学入学時に必要な国語の力

③大学での学びに必要な国語の力

④大学卒業後（社会で）必要な国語の力

⑤生涯を通じて必要な国語の力

19

スライド 20

あまり時間はありませんが……

①高校での学びに必要な国語の力
②大学入学時に必要な国語の力
③大学での学びに必要な国語の力
④大学卒業後（社会で）必要な国語の力
⑤生涯を通じて必要な国語の力

３人グループに分けさせていただきますので，③の力とはどのようなものか，どうすればその力が身につくか，意見交換をお願いします。

（探究的な学びとの関連などについても……）

20

第２分科会【地歴・公民】

“知”の世界地図をつくろう
～探究心を深める授業づくりにおける高大接続の在り方～

［報告者］　小林　未来（京都府立東宇治高等学校 教諭）
［報告者］　神代　健彦（京都教育大学 教育学部 准教授）
［コーディネーター］　藤田　五樹（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）

京都教育大学「グローバル・スタディーズ」の一貫として、グローバル化の時代における価値観の探究を軸に、高校教員と大学教員が連携して、新たな視点からつくり上げる高校倫理の授業実践を報告した。その報告を通して、高校の探究から大学の研究へとつながる授業実践と探究活動のあり方について考えた。

概　略

本研究発表は、京都教育大学と東宇治高校で 2020 年度より実施している「グローバル・スタディーズ」の共同研究の取り組みとその成果について、紹介・解説するものである。「グローバル・スタディーズ」とは、2014 年度より京都教育大学と同附属学校園で進めてきた「グローバル人材育成プログラム」の一環であり、グローバル化する現代社会をよりよく生きる力を育む新しいカリキュラムや授業のあり方を提案している。東宇治高校との共同研究では、大学で開発したそのカリキュラムや授業づくりの知見を、地域の公立学校との協働でさらに深め、発展させていくことがねらいとされている。

初めに、小林氏から、当授業のねらい、授業内容、授業後の生徒の変容について報告がなされた。当授業のねらいは、世界における哲学の知の広がりを示す「“知”の世界地図」の協働作成を通して、生徒たちが人間としてのあり方や生き方についての見方・考え方を再構築し、改めて「私」を発見して表現することである。古今東西の幅広い「知」を協働作業で集積・発表することを通じて、多くの生徒たちの中で、自らの生き方の見つめ直しへつながったこと、倫理の授業が「学ぶ」ものではなく「考える」ものへと変容したこと、これまでには思いもかけなかった地域や存在にも哲学はあるのだ、という気付きにつながったことなどが報告された。

続いて、神代氏より、教材観を中心に当研究授業の解説がなされた。当授業では「グループ学習パック」としてさまざまな教材が準備されたが、このパックとは教科書の学びを超えて、事柄のダイナミックな理解が成立するように、市販の哲学史や宗教史の一般書・入門書を大量に準備して構成されている。その教材での学びを通じて、ヨーロッパ世界の知のダイナミックな展開を的確に捉えて表現した生徒の感想を例に挙げながら、当授業で見られた生徒の変容について報告がなされた。加えて、当連携を通じて、大学の「真性（オーセンティック）」な知を学べるという高校側のメリット、高校生の学びの実態を知ることで、学習者目線での学びのシークエンスを構築して、大学教育を再構成できるという大学側のメリットに触れ、高大連携から生じる高校教育

および大学教育の影響についても報告がなされた。

全体討論の内容

以下、グループセッションでの議題およびその報告である。

議題１：高大連携の具体的な取り組みの共有

報　告：・「ウィンターセッション」と称する、生徒たちが大学を訪問し、学びを深める取り組み
・様々な大学から大学教員を招き、学年全生徒を対象に、多数の講座を展開する取り組み
・「東京フィールドワーク」と称する、大学に進学した卒業生を高校生が訪ね、学びを深める取り組み

議題２：探究活動に求められる思考活動の質について

報　告：・調べ学習を経る中で生じる疑問を、深みのある「問い」へとつなげていくことで質が高められる。
・課題について、まずは個人で主体的に考え、その内容をグループで共有する。共有化する活動を通じて各個人が他者の考えとの違いに気付き、改めて自分の考えを見つめ直すことができる。その後にグループでの発表活動を取り組むことで、思考の質を高める一連の活動へとつなげられるのではないか。

到達点と今後の課題

本報告の取り組みは、単発的な高大連携の取り組みではなく、高校・大学双方がそれぞれの知見を駆使して授業をデザインし、生徒の変容へとつなげることを目的とした継続的取り組みである。取り組みを通じて高校側は、高校での学びの枠を超えて、大学の「真性（オーセンティック）」な知に触れる学びを生徒たちに提供できている。一方、大学側は高校生が学びを深める過程を目の当たりにすることで、大学教育、特に入学年次生への教育のあり方を再考することが可能となっている。こういったことは全てそこに学ぶ生徒・学生に還元されるメリットであり、本取り組みが効果的な高大連携につながっていることを示している。ここで得られた知見をいかにして他校、他大学へと広げていくかが今後の課題と言える。

スライド１

“知”の世界地図をつくろう
～探究心を深める授業づくりにおける
高大接続の在り方～

報告者　小林　未来
（京都府立東宇治高等学校）

スライド２

自己紹介

- 教員になり12年目、東宇治高校３年目
- 中学社会での採用
  （精華町立精華西中学校⇒府立洛北附属中学校⇒洛北高校
  ⇒東宇治高校（現在））
- 現在は、高校３年生の倫理と２年生の「総合的な探究の時間」を担当
- 総務企画部、弓道部顧問

スライド３

実践報告

1　授業の概要
2　授業の目標・ねらい
3　授業の展開について（３時間）
4　この授業の手ごたえ（生徒の感想より）
5　授業を終えて

スライド４

１　授業の概要

- 対象　京都府立東宇治高等学校
  ３年６組（特進コース）　倫理選択者　28名
- 日時　令和２年12月８日（火）３校時
  12月９日（水）２校時、３校時
- 題材　「“知”の世界地図をつくろう」

スライド５

２　授業の目標・ねらい

○「私」を表現してほしい！

- 既習事項をもとに「“知”の世界地図」を作成
  ⇒「人間とは？」を自ら問い直し、表現する。

⇩ つまり…

- 「人間としてのあり方・生き方についての見方・考え方」から、新たに「私とは？」という視点をもち、自己の探究活動を発展させる。

スライド６

２　授業の目標・ねらい

○「倫理」はムダな教科ではない！
「おもしろく」て「役に立つ」教科である！

〈前提〉
・12月までの授業　＝「古今東西の幅広い知的集積」
・協同学習

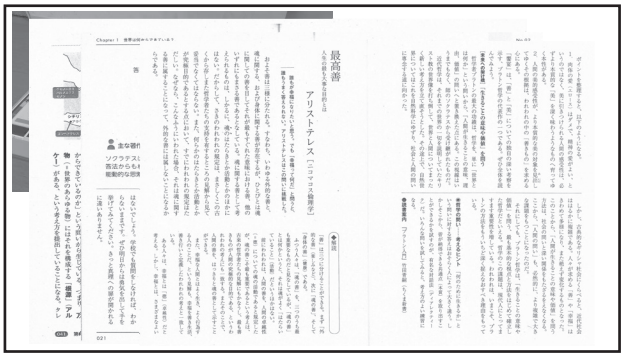
- 「新たな発見＝新たな“知”との出会い」＝「私」の発見
- 他者との関わりの中で「私」は生きている

スライド 7

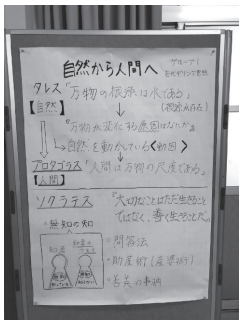
３　授業の展開について（３時間）

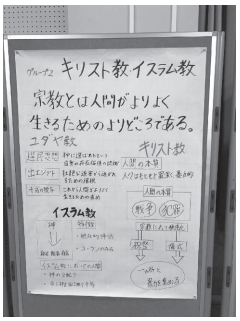
- **１時間目**　…**グループ学習**
  各時代の「人間とは？」の答えとなるプレゼンを行う準備をする
- **２時間目**　…**グループ発表・交流**
  ６グループの発表
  キーワードを付箋に書き、白地図に貼る
- **３時間目**　…**担当者による授業**
  ヨーロッパ中心の「人間とは？」の問いは不十分

スライド 8

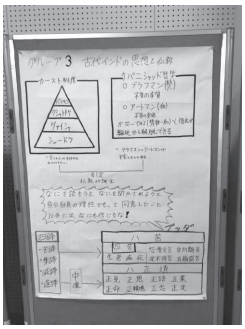


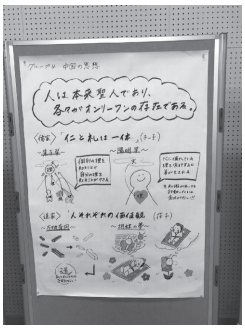
スライド 9



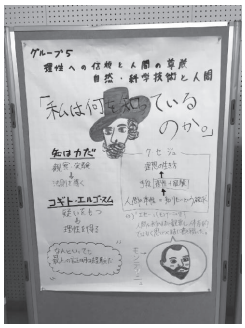


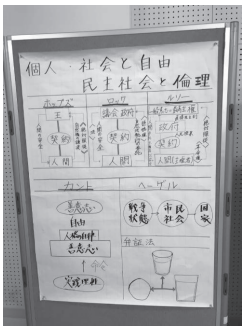
スライド 10



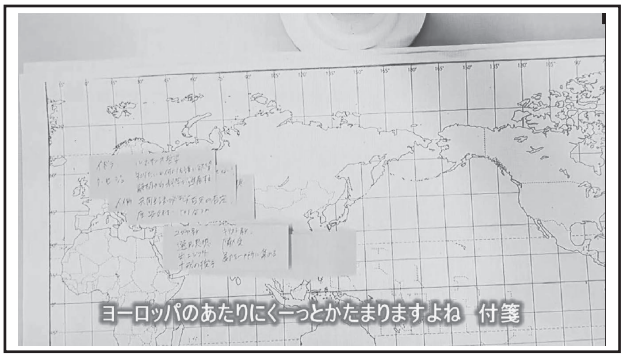


スライド 11





スライド 12



スライド 13

３時間目　…担当者による授業

- グループ発表のまとめ
- 生徒の「“知”の世界地図」を活用しての授業

世界地図の「空白」をうめよう！

- 東宇治高校の「校歌」から考える

スライド 14

男は人間として定義され、
女は女性として定義される。

シモーヌ・ド・ボーヴォワール

スライド 15

スライド 16

東宇治高校校歌

作詞　深井隆三
作曲　中原昭哉

一　朝日輝く　緑の丘は
古き伝え　織りなして
美しき白亜の　学舎にし
若人は理想に　燃えつつ
豊かなる日々　重ねつつ
たくましく　未来に生きん
ああ　東宇治　わが母校

二　夕日映える　宇治の流れは
常に人の世　うつしゆく
学舎に　希望の鐘響き
若人は真理を　求め拓きつつ
遙かなる道　未来を築かん
望みある　東宇治　わが母校
ああ

スライド 17

４　この授業の手ごたえ（生徒の感想より）

- 「自分とはどのような存在なのか改めて考えるようになった。これから入試を迎えるが、大学に合格することが目的ではなく、その後、**どのような生き方をするのかが重要**と考えた」（男子生徒）
- 「昔の偉かった人の考えを学ぶのが倫理の授業ではなく、そこから**「私のこと」として、昔の人の言葉を参考に考えるのが倫理の授業**であると思った」（男子生徒）
- 「オーストラリアや女性など、哲学（宗教も）は世界にあるのだと、**言われてみれば、“そうだなぁ”**と気づいた」（女子生徒）
- 「いつも聞いている**校歌が新鮮に聞こえた**」（女子生徒）

スライド 18

５　授業を終えて

〈生徒の様子〉
・「私」を少しでも出せた　…かな
　→グループ学習、発表の様子
　→感想
〈授業者〉
・生徒への「負荷」のかけ方のさじ加減
　→高大連携により、生徒分析とアドバイスを受けられた
・次年度への課題　…生徒の「表現方法」の検討

スライド 19

最後に

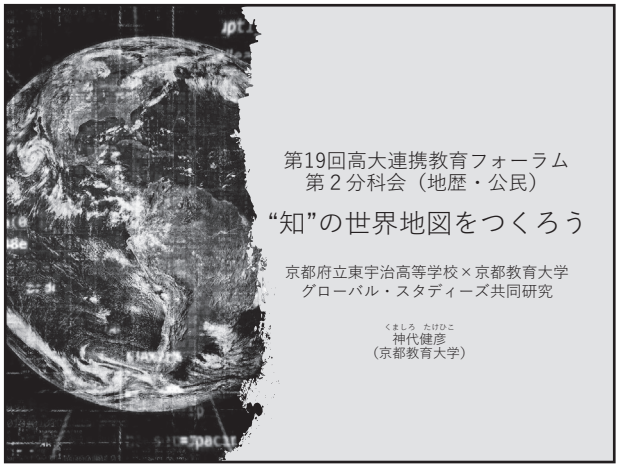
- 今年度の高大連携は、**「小論文」**にチャレンジ！

テーマ

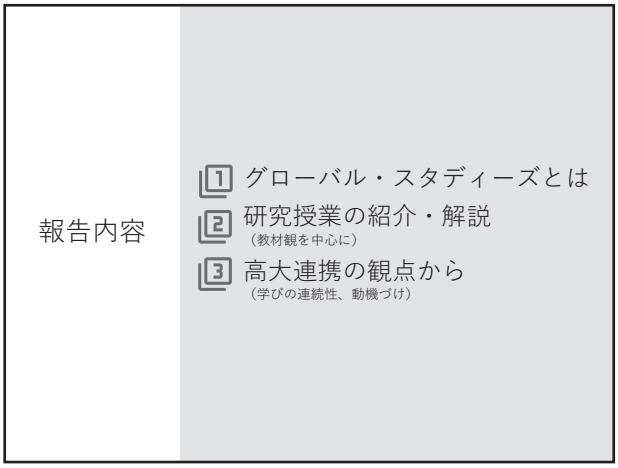
「哲学」と「宗教」はどちらが人間を「幸せ」にするか？

・12月に2000字にまとめる
・今は、このテーマに関するネタ探し中…
→毎時間のコメントカード　「知識の箱」

スライド1

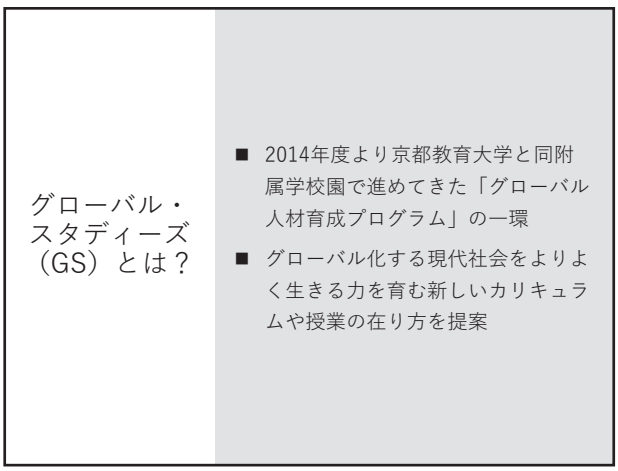


スライド2

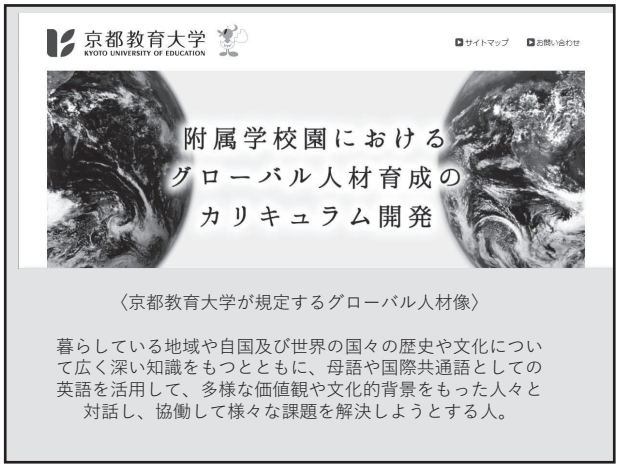


スライド3

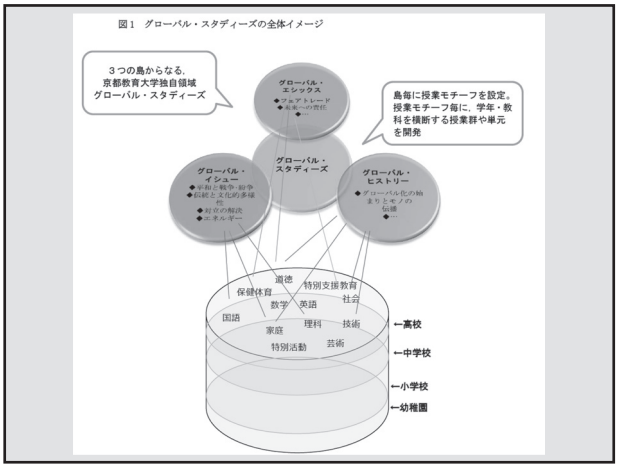
スライド4



スライド5



スライド6



スライド 7

東宇治高校
×
京都教育大学
GS

- 大学で開発したそのカリキュラムや授業づくりの知見を地域の公立学校との協働でさらに深め発展させていくことをねらいとした共同研究事業（2020年～）。
- 今回は共同研究のパートナーとして地元の高等学校の協力を得られたことで、地域に根ざした高大連携の取り組みという意義をもつに至った。

スライド 8

授業の概要

対象　第３学年　28名

日時　令和２年12月８日（火）
３校時（10：45～11：30）

令和２年12月９日（水）
２校時（９：50～10：35）
３校時（10：45～11：30）

場所　アカデミックルーム
（東宇治高校２棟１階）

題材　「“知”の世界地図をつくろう」

スライド 9

研究授業の紹介・解説
（教材観を中心に）

スライド 10

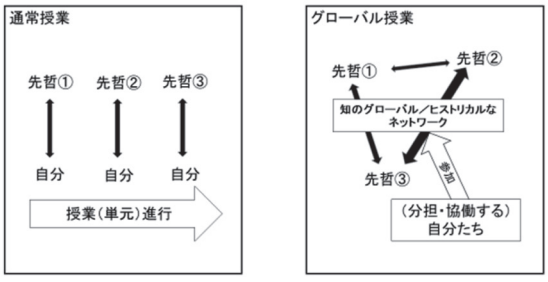
教材観
―教科書の学びを超える―

検定教科書は知識・理解の面で優れた教材である反面、思想史の知識を時系列順（いわゆる「列伝」風）に組織したものであり、本研究がめざす、

- **事柄のグローバルでダイナミックな理解**
- **価値葛藤の体験**

という点で弱い。

スライド 11



スライド 12

教材観
―教科書の学びを超える―

- 本研究授業では、市販の哲学史や宗教史の一般書・入門書を大量に準備し、多種多様な資料群のなかから事柄のダイナミックな理解が自然と成立するよう配慮した

□ 市販の一般書・入門書は、必ずしも検定教科書のような体系性を備えてはいない反面、「教えるための書物」である教科書とは違う、「独学するための書物」

□ 他方で、市販の一般書・入門書は内容的に玉石混交という側面もある

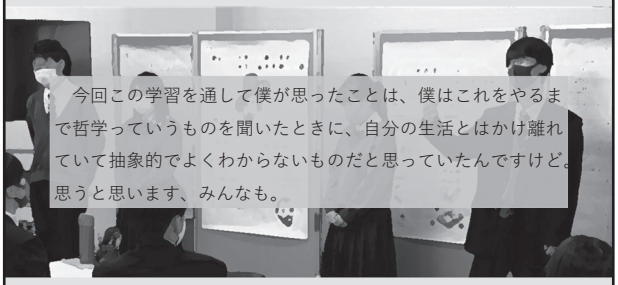
◆準備段階である程度信頼性の高い資料を「グループ学習パック」として整理し、それを配布

スライド 13

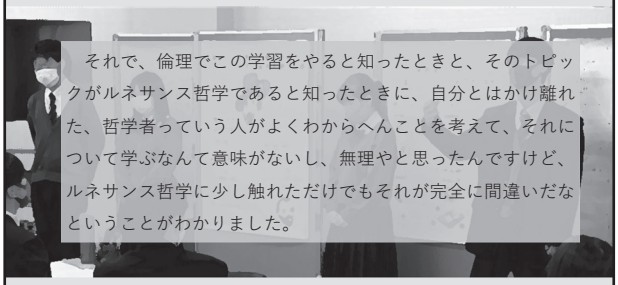
スライド 14

- バッキンガム、W.『哲学大図鑑 三省堂大図鑑シリーズ』小須田健訳、三省堂、2012年.
- ドーリング・キンダースリー社編『宗教学大図鑑 三省堂大図鑑シリーズ』豊島実和ほか訳、三省堂、2015年
- ジャクソン、T.『図鑑 哲学 人生を変える100の話』屋代菜海訳、ニュートンプレス、2020年.
- ケリー、P.『政治学大図鑑 三省堂大図鑑シリーズ』豊島実和訳、三省堂、2014年.
- 納富信留ほか編『よくわかる哲学・思想（やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ）』ミネルヴァ書房、2019年.
- 小川 仁志『図解 使える哲学』KADOKAWA、2014年.
- 田中正人『哲学用語図鑑』プレジデント社、2015年.
- 田中正人『続・哲学用語図鑑ー中国・日本・英米(分析哲学)編』プレジデント社、2017年.
- 山竹伸二『本当にわかる哲学』日本実業出版社、2011年.

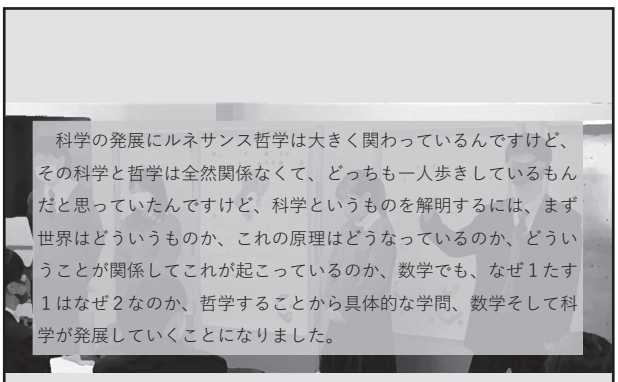
スライド 15



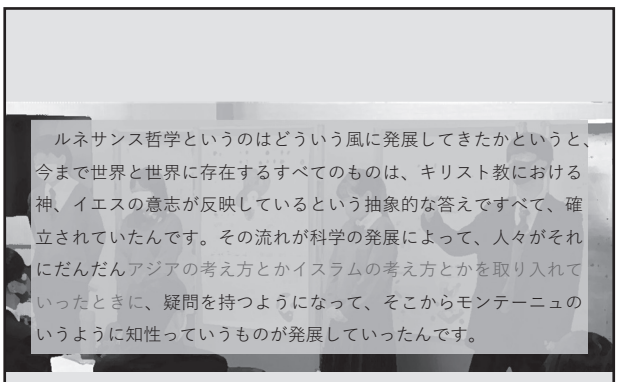
スライド 16



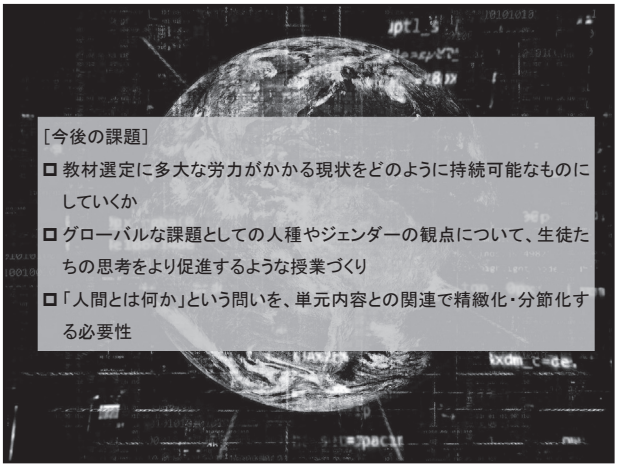
スライド 17



スライド 18



スライド 19



スライド 20

3 高大連携の観点から
（学びの連続性、動機づけ）

スライド 21

GS（グローバル・スタディーズ）事業の（思わぬ）メリット

GS事業が高校教育に与えるインパクト
◆ 大学の「真正（オーセンティック）」な知を高校へ
◆ 大学で求められる学びの形を高校生へ伝える

その事業のなかで大学に還流する
教育実践知

スライド 22

事例
「教育の理念と歴史」

◆ 教職の基礎科目
◆ 大学1回生の必修科目
◆ 1クラス約80人ほど
◆ 教育の歴史や哲学などを中心とした教育学入門

スライド 23

第1回 ガイダンス
第2回 教育の基本概念(1) 教育とはなにかをどう語るか
第3回 教育の基本概念(2) 教育をなりたたせるもの
第4回 教育の思想(プレ) 西洋教育思想概観
→ □教育学入門パート

第5回 教育の思想(1) 古代ギリシャの教育思想
第6回 教育の思想(2) ヨーロッパにおけるキリスト教と教育
第7回 教育の思想(3) ヨーロッパ近代教育思想
第8回 教育の思想(4) 新しい近代教育思想
→ □思想パート

第9回 教育の歴史(1) 人間形成の近世と近代
第10回 教育の歴史(2) 日本における近代学校教育の始まり
第11回 教育の歴史(3) 新教育ブームから戦時下教育へ
第12回 教育の歴史(4) 日本国憲法と教育基本法
→ □歴史パート

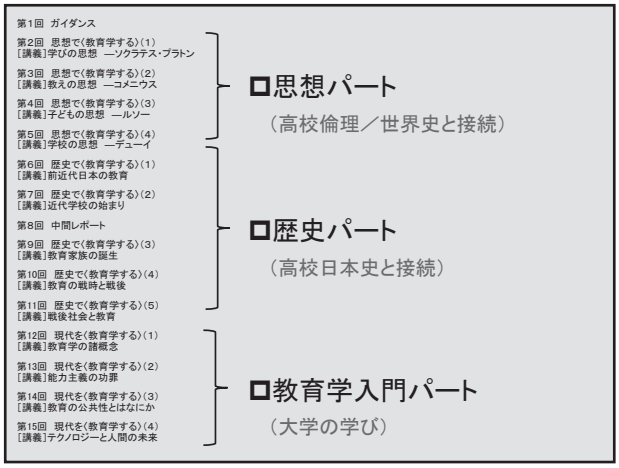
第13回 現代日本の教育課題(1)（最新の時事問題について）
第14回 現代日本の教育課題(2)（最新の時事問題について）
第15回 現代日本の教育課題(3)（最新の時事問題について）
→ □教育学応用パート

スライド 24

問題は？

➢ 高校での既習事項と無関係に「大学で学ぶべきこと」を順に教える授業
➢ ただただ「新しい学びに慣れろ」という指導

スライド 25



スライド 26

学生の感想から

「世界史、倫理で習ったアテナイの頃の哲学者の教育論が現代でも活かせるということに驚きました」

「高校時代に日本史の授業で学んだ内容が多くあって、スムーズに理解することが出来ました」

「今回の授業は日本の歴史に関する教育だったので、今までの知識と重ね合わせると分かりやすい内容だった。子返しの図は日本人特有の伝説があってとても特徴的だと感じた」

スライド 27

新しいシークエンスのメリット

- 高校教育(と受験)で得た知識の「リフレーミング」
- 「あの時学んだことは、ここにつながっていたのか」
- 知っている知識を「活用」することで、新しいことがわかる・できる！

スライド 28

新しいシークエンスのメリット

「真正(オーセンティック)」な学びの動機

- □ 達成価値(わかる・できるからもっと面白くなる)
- □ 内発的価値(内容そのものが面白い)

スライド 29

高校生を「知っている」ことのメリット

- 大学に何を求めているのか
- 生活認識、興味関心
- 広義のレディネス

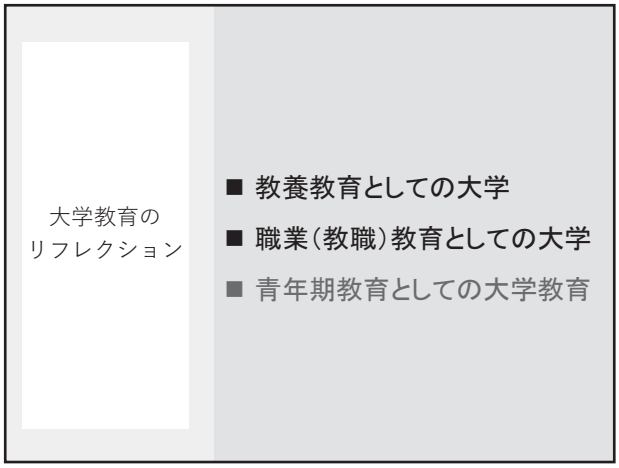
スライド 30

高校生を「知っている」ことのメリット

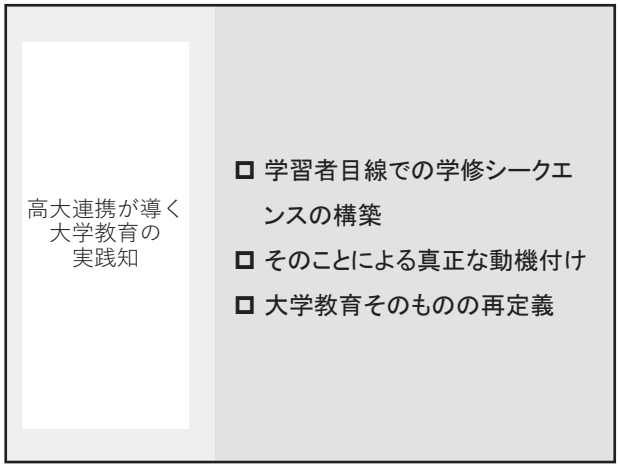
「本質的な問い」のチューニング

- 高校までの学びの意味は？
- 受験ってなんだったのか？
- 学校って？
- 仕事に就くって？
- 恋愛、結婚、出産、子育てと自分の人生

スライド 31



スライド 32



第３分科会【理　科】

探究的な学びのための環境づくり

［報告者］　松川　真美（同志社大学 理工学部 教授）
［報告者］　高野　拓樹（京都光華女子大学 教授／京都大学 特任教授）
［コーディネーター］　野々垣雅稔（ノートルダム女学院中学高等学校 STE@M 探究コース長）

女子生徒に対し、探究的な学びを通して理系分野への興味をいかにして育み、伸ばしていくことができるのか。ノートルダム女学院中学高等学校からは探究コースでの実践報告を、大学側の視点からは、国立研究開発法人 科学技術振興機構の「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」に参画している同志社大学と京都光華女子大学が報告した。

概　略

報告１では、野々垣氏より「中高での探究活動導入の記録」をテーマに、開設から４年になるノートルダム女学院中学高等学校ＳＴＥ＠M探究コースでの探究活動について、１年半の準備期間から現在に至るまでの報告があった。

報告２では、松川氏より「『科学するガールズ』養成プログラム」、報告３では、高野氏より「リケジョ育成のためのプログラミング教育と実験的学び」を各々テーマに、科学技術振興機構（ＪＳＴ）の助成事業「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」について報告があった。

それぞれの報告の後、質疑応答の時間を設けた。

全体討論の内容

・理科を好きになることが何より大切ということだが、どうすれば生徒は理科が好きになるか？

　本物に触れる体験を豊富に用意することが必要だろう。また、教員自身が学問を楽しんでいる姿勢を見せなければならない。

・高校での探究活動のテーマ設定にあたって、指導教員の専門外の分野はどうするか？

　探究活動に限らず、主体的な学びにおいては「先生がすべて答えを知っていて、それを伝授する」というスタイルではない。分からないことに対して、誰に聞こうか、どこで調べようかということを考えるところから探究は始まっている。積極的に大学や企業の協力を仰ぐべきである。

・ジェンダーフリー推進の立場から、女子生徒のみ対象のプログラムには参加しにくい。

　そのような意見があることは認識している。良い方法を探したい。

到達点と今後の課題

「総合的な探究の時間」や「理数探究」をどう実践していくのか、中高での探究活動についてとそれをサポートする大学でのプログラムについて、それぞれ紹介することで、理科における探究的な学びのイメージを共有することができた。

今後は、より具体的な指導法や授業プランなどを扱っていければ良いのではないだろうか。

スライド１

中高での探究活動導入の記録
ノートルダム女学院中学高等学校
ＳＴＥ@Ｍ探究コース設立にまつわるあれこれ

ノートルダム女学院中学高等学校　STE@M探究コース長
野々垣　雅稔

スライド２

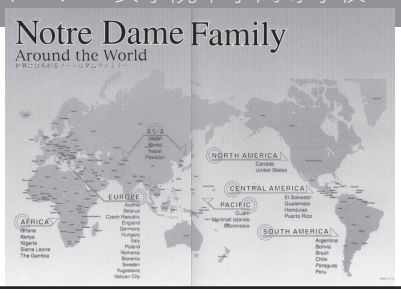
自己紹介

- 大阪府立生野高校
- 京都大学理学部
- 京都大学大学院理学研究科　地球惑星科学専攻
- 洛星中学高等学校　非常勤講師
- ノートルダム女学院中学高等学校　教諭

Apple Teacher

スライド３

ノートルダム女学院中学高等学校



スライド４

ノートルダム女学院中学高等学校

アメリカから渡ってきた
四人のシスター

スライド５

背景

- 2018年より、コース改編
- A類型、B類型からPREP総合コース、GLOBAL英語コース、STE@M探究コースへ

A類型
B類型
→
PREP総合
GLOBAL英語
STE@M探究

スライド６

21世紀型学力(4つのC)

- Communication
- Critical thinking
- Collaboration
- Creativity

スライド 7

目標とする生徒像

- 探究活動を通して様々な学問に対する興味を持ち，主体的に学習を進めていくことができる。
- 自分の考えを整理して他者に伝えることができる。
- 理科や数学が好きになる。

スライド 8

させられる勉強からの脱却

- 生徒たちがその学習内容に対して「もっと知りたい，学びたい」と感じていなければやる気は出ないし成果も上がらない。
- 日々の教科の授業を「もっと聞きたい」と思ってもらうために何ができるだろうか。

スライド 9

探究コースの時間割

- 7時間目以降の授業を思い切って撤廃，放課後は各自が自主的に学ぶ時間とする。
- 探究活動（後述）のための実験観察に当てるもよし，授業の予習復習，教員への質問相談など自由に使うことができる時間を増やした。

スライド 10

「探究活動」の時間

- 週一コマの「探究活動」の時間
- １クラス（14~27人）に対して５～６人の教員を配置
- 生徒一人一人が独自の研究テーマを設定
- 文化祭で中間発表，学年末に校内での発表会

探究の手法 → グループでの活動 → 個人別テーマ

スライド 11

テーマ決定

- 基本的には生徒の自由
- 年度始めにコース担当の教員（理科3名，数学2名）がそれぞれ自分の得意分野について語るリレー講義をしヒントにする
- 理数以外の教員のサポートをどう得ていくかは課題

スライド 12

グループか，個人か

- テーマ選びで何をどうしていいかわからない，と固まってしまう生徒
- 教員からテーマを与えてしまった方が良いのか
- 4~5人のグループを作らせ，共同での探究活動ののち，個人テーマの決定へ

スライド 13

テーマ例：香水を作ろう

- どのような手法があるのか文献で調べ
- 抽出，蒸留，化学合成に分かれ，計画をたて，実験
- 成果発表会

スライド 14

個人探究テーマ例

- オオカナダモから和紙を作る
- 貝の浄化作用について
- 牛乳でプラスチックを作る
- プラナリアの奇形ができる条件
- 昆虫の羽の構造を利用した団扇の作成
- 生徒目線で面白い数学の参考書を作りたい
- ハーバリウムを長持ちさせる条件
- 琵琶湖のマイクロプラスチック調査
- カラスよけネットの改良
- より集中できる勉強部屋の環境

スライド1

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

第19回高大連携教育フォーラム 第3分科会（理科）

探究的な学びのための環境づくり

女子生徒がもっと科学に親しむには、、

「科学するガールズ」の取り組みから

同志社大学 理工学部　電気工学科
松川真美

スライド2

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

➢課題と背景

世界基準でみて理系で活躍する女性が圧倒的に少ない。

少ない理系女性も多くは生物・医療系であり、物理を基礎とする機械工学、電気工学、情報工学などでは稀である。

将来の日本の科学技術を刷新するためにも、

物理を基礎とする分野で、女性エンジニア・研究者を育成する必要がある。

2016年から開催の「科学するガールズ」プログラムをパワーアップ！

同志社大学「世界に羽ばたく「科学するガールズ」プログラム」

➢プログラムのねらい

女子中高生が物理・数学の苦手意識から解放され、幅広く理工系への興味を膨らませること。

同志社大学理系学部を核に、立教大学や企業、海外大学が協働する国際プロジェクトを進める。

女子中高生のサポーターである保護者や教員の意識も改革する。

プログラム遂行のため、同志社大学内で理工系女子大生・大学院生のプロジェクトチームを組織する。
→メンバーのマネジメント能力やプロジェクト遂行能力向上も目指す。

スライド3

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

プログラムのイメージ

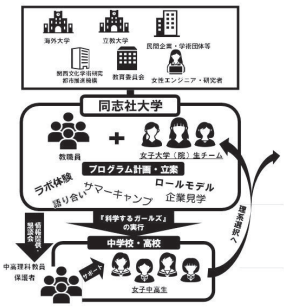
理工系分野で学ぶ・働く先輩女子との語らい。

理工系で国際的な活躍ができることを知る。

理工系を目指す仲間を作る。

理系女子のサポーターを作る。

JST、教育委員会、大学、理科教育の中高教員組織、企業、関西学術研究都市推進機構、国際学会組織、海外大学が協働



スライド4

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

プログラム内容（これまで）

①出前講義（受入講義含）
関西地区の中学・高校および法人内中学・高校を対象に大学教員と女子学生スタッフによる模擬講義・見学を実施。特に機械・電気・環境・情報学・化学工学分野に触れて、理系の学びを体感する。(2021年春学期はオンライン)

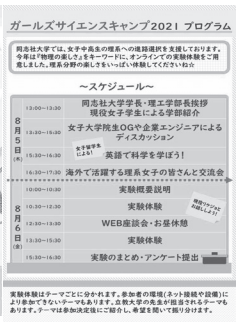
②ガールズサイエンスキャンプ
2021年8月5－6日 リアルタイムオンライン開催
WEBでのリアルタイム実験体験
企業の女性技術者との交流・懇談
外国人女子留学生による科学を英語で学ぶ基礎講座
海外の女性研究者とのリアルタイム懇談会
関西の企業エンジニア（3名）とフランスの研究者（1名）がリアルタイム参加
参加者は中高生＋保護者合計59名（関東圏や海外からも参加）

体験型学習と英語
＋
現役女子学生スタッフ
とのホンネ懇談

③京田辺市サイエンスアカデミー
京田辺市と協働し、小中学生を対象としたサイエンスアカデミーを対面開催。
小中学生・保護者に科学の楽しさを体験してもらう。
⇒小中学生65名（女子小中学生は26名）が参加。

スライド5

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

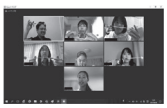


スライド6

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

ガールズサイエンスキャンプ2019
（2泊3日のお泊りキャンプ！）

2021年は残念ながらオンライン、、



「ロボットを作ろう」
実験講義

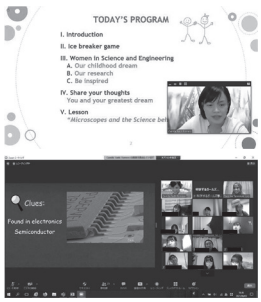
学生スタッフによる大学の講義風景紹介

フランスからリアルタイム講義

スライド7

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

「英語で科学」講義の様子



高校時代に、このプログラムに参加して、
同志社大学理工学部に入学した女子学生スタッフ

＊女子中高生が知りたいこと。
＊女子中高生が悩んでいること。

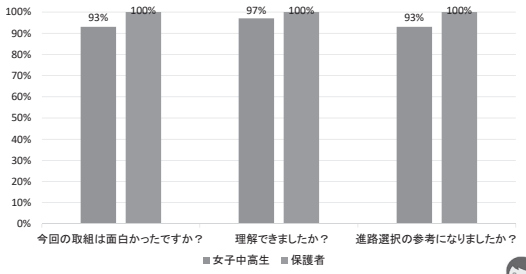
自分たちの経験をもとに女子中高生をサポート
ex.「お昼休みのぷっちゃけ相談会」

理系は大変だけど、、、
＊実験は楽しい。中高で学んだことが、実際に目の前で理解できる。
＊男子は多いけど、全然大丈夫！
＊中高で理数系が不得意でもOK。
＊大学院にいけば、海外で研究発表や海外の理系の人たちと交流ができる。
などなど

スライド8

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

サマーオンラインキャンプ アンケート結果



スライド9

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

プログラム内容（秋学期から）

③ガールズラボ

大学研究室での実験体験。10月～12月に開催し、
教員や女子大学（院）生と共に
験を体験し、理工系の面白さを実感する。

⇒10月23日（土）「オーディオアンプを作ろう」
（9名参加）
オンデマンドビデオ配信 「静電気で遊ぼう！」
（Youtube配信中）
12月 4件のリアルタイムオンライン講義準備中

④保護者と中高教員対象のプログラム

女子中高生、保護者や中高教員向け紹介ビデオを製作中
大学で学ぶリアルな姿、理系女子の活躍の状況を知る。

オンデマンドビデオ配信

スライド10

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

女子中高生は科学の学びをどのように考えているか、、
サマーオンラインキャンプ参加者の声から、、（良かった点）

- 大学について具体的なことを知ることができ、将来のイメージがより確かなものになった。
- 理系に進まれた方の生の声を聞けてとても興味深かったです。
- 1日目に様々な企業の方が理系に進んだことで自分の特性をどう活かせたかをわかりやすく教えてくれたからです。
- 今まで理系にどんな学科があるのかや、メリットがあいまいにしか分からなかったので、今回このサマーキャンプを受けて具体的に分かることが出来た。
- まだ中学生で理系のイメージがわかなかったのですが、今回実験やプログラミングをすることで理系って言っても色々なことと関われるんだと分かったからです。

スライド11

女子中高生の理系進路選択支援プログラム × 同志社大学

女子中高生は科学の学びをどのように考えているか、、
サマーオンラインキャンプ参加者の声から、、（改善してほしい点）

- 虹の実験も直接できたらもっと楽しかっただろうなと思います。
- プログラム内容の詳細な説明をし、タイトルだけではなく中学生向けにわかり易くしたほうが助かります。
- 中高生が進学先として理系を選ぶということと、女性理系研究者/エンジニアを増やそうとする取り組みは、似ているようで異なるように感じます。（例えば、うちの娘などは、理系はどちらかというと男性がする学問という我々世代にありがちな固定観念は持っていないように感じます。）中高生を対象にするならば、彼らの意識に基づいた企画が必要なのかもしれません。

女子中高生の幅広い将来のために、
より確かなプログラムを目指したい。

スライド１

第19回高大連携教育フォーラム
第３分科会【理科】

JST女子中高生理系進路選択プログラム採択事業における取組内容と課題

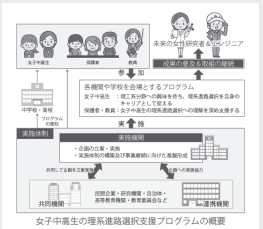
京都光華女子大学
高野拓樹

京都光華女子大学

スライド２

JST女子中高生の理系進路選択支援プログラムとは

女性が変える、理系の世界！
貴女のチャレンジを応援します!!



女子中高生の理系進路選択支援プログラムの概要

京都光華女子大学

スライド３

背景・課題と目的・目標

- 応募に至った背景や課題
  - 文部科学省は環境と防災に関する教育・研究を強力に推進
  - Society5.0の時代に対応できる人材育成として、その基幹領域にプログラミング教育を提示

政府広報オンライン

- 企画の目的・目標など
  - 環境・災害をテーマとして、プログラミング教育と実験を通じた理系女子育成の観点から、一人でも多くの女子中高生が環境・防災教育をきっかけに理系進学をめざすことを目的とする

京都光華女子大学

スライド４

採択テーマ

京都光華女子大学

スライド５

企画の概要（全体像）

- 女子中高生への取組

概論授業

プログラミング教育

実験的な学び

- 保護者・教員に対する取組
  - 授業終了後の教員・保護者向けキャリアガイダンス
  - Zoomによる保護者参観を実施し、講師から保護者に向けてキャリアガイダンスを実施
  - 教員については、担当教員以外の教員にも参加してもらう

京都光華女子大学

スライド６

特徴的な取組　－活動風景－

https://www.koka.ac.jp/rikejo/

テーマ：知ってるつもりの緊急地震速報
講師：京大防災研の先生

テーマ：地球環境クライシス
講師：本学教員

プログラミング授業
講師：本学教員

テーマ：化学肥料と植物の成長
講師：京阪園芸の職人さん

寄せ植え体験

寄せ植え体験

京都光華女子大学

スライド 7

スライド 8

スライド 9

工夫したところ

- 環境・防災サイエンスツアーと概論授業，プログラミング教育については，クイズやゲームなども盛り込んで，まずは「楽しい」と感じる授業内容にする。
- Zoom参観を実施し，保護者へは事前に本事業の趣旨を説明し，理系進路選択後のキャリアや，Socirty5.0社会に必要とされる理系人材について解説。
- 教育委員会，参加高校の先生方との定例会の実施

スライド 10

目標とこれまでの実績

1年目		
項目	目標（人）	実績
中1	10	6
中2	30	34
中3	0	1
高1	130	134
高2	80	39
高3	0	3
小計	250	217
保護者	35	4
教員	10	17
小計	45	21

2年目（R3.11.11時点）		
項目	目標（人）	実績
中1	10	5
中2	30	0
中3	0	4
高1	130	145
高2	80	130
高3	0	92
小計	250	376
保護者	35	4
教員	10	54
小計	45	58

スライド 11

目標値に達していない理由（保護者）

項目（実績/目標人数）	達成率（%）
女子中高校生（593/500）	119%
保護者（8/70）	11%
教員（71/20）	355%

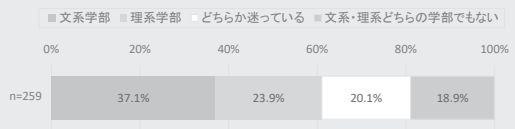
保護者については，通常の授業時間での実施の場合，参加がしづらい（ツアーなどの土日開催の場合は参加実績あり），オンライン参観についても思ったほど参加が少なかった。

スライド 12

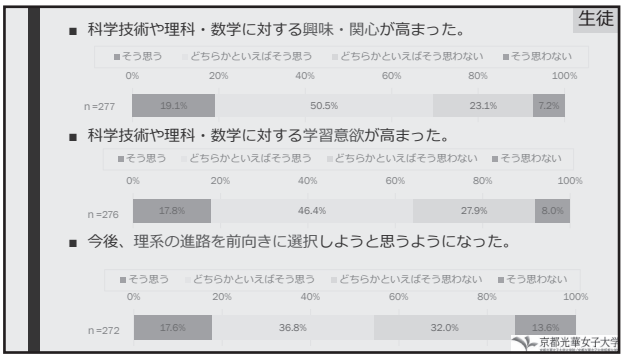
女子中高生の意識の変容

生徒

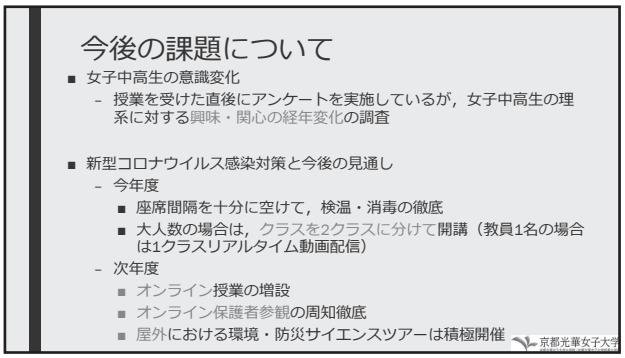
- 質問《大学進学希望者》文系学部、理系学部のどちらに進学したいと思っていますか。（１つだけ選択）n=259



スライド 13



スライド 14



特別分科会①【高大接続】（共催：一般社団法人大学アドミッション専門職協会）

探究活動とアドミッション
～入試や接続教育で高校までの探究活動をどう位置づけるか～

［報告者］　泉　雄二郎（島根大学 大学教育センター 教授）
［報告者］　美濃地裕子（島根大学 大学教育センター 准教授）
［報告者］　綾部　　有（関西学院大学 入学センター 専任職員）
［報告者］　木村　拓也（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 准教授）
［コーディネーター］　山本以和子（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

高校までの探究活動の経験が、高校生の大学受験活動、入試での扱い、入学後の学修状況にどのような影響につながるかについて事例報告を行った。次に、参加者と高校での探究活動が、受験行動や入試システムに与える影響をディスカッションして、今後の可能性と課題を共有した。

概　略

本フォーラム第１部では、高等学校における探究的な学びは、生徒・学生一人ひとりに何をもたらし、大学での研究にどのようにつながっていくかという探究的な学びの可能性の模索を行った。それを受け、本特別分科会①【高大接続】では、高校までの探究活動を、入試や接続教育でどう位置づけるか、というテーマ設定をした。高大接続時に高校までの探究活動について注目して、それを接続で扱っている大学の事例を取り上げた。

事例報告１として、島根大学からは「『学びのタネ』を大学につなげる」と題して、探究心に着眼した育成型入試「へるん入試」の事例が紹介された。知識重視の１点刻みの入試からの脱却を目指し、それとは異なる視点の優秀な人材を集め、育てるために、高校までに育まれた「学びのタネ」を重視する入試・接続教育システムの説明があった。「学びのタネ」とは、好奇心や探究心を指し、島根大学では出願前の段階から、入試、入学前、初年次教育、専門教育の段階まで「学びのタネ」を育てる学習活動および支援を創設している。また「学びのタネ」に着目している「へるん入試」では、書類・面接の配点比率が高く、書類選考の主体性、探究心に関する記載事項の設定にも特徴があった。

事例報告２では、関西学院大学から「『探究評価型入学試験』の事例紹介」として、同大学が従来から実施していたＳＧＨ・ＳＳＨ対象公募推薦入学試験が発展した探究評価型入学試験の事例が紹介された。横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して培った力を評価するとして、学校内外での探究活動の成果や実績を有する者等を対象とした入試を展開している。実際の成果物により完成度を審査し、さらに合格者の探究プロセスやそれを生かした入学後の学びの計画等から、詳細なルーブリックを作成して審査している。また、高校等での探究活動が、探究評価型入学試験を通して、大学での研究につながる一貫した研究内容による高大接続を目指していることが特徴である。

全体討論の内容

事例報告後は、グループに分かれてディスカッションを実施した。テーマ「探究活動を入試でどう評価すればいいか？」と「探究活動は、大学入学後の学習成果に結びつくか？」のうち、1つを選択して、高校・大学それぞれの可能性と課題について、以下のように参加者同士の議論が行われた。

探究活動を入試でどう評価すればいいか？

	高校側	大学側
可能性	・高大接続入試により、幅広い生徒が受験できる可能性が広がる ・探究型入試、総合入試を受験するにあたり、生徒自身が興味関心や志望動機を内省するので、例え不合格になっても進路（志望学科）がぶれず、しっかり自分のやりたいことを見つけて進路決定できる ・多様な高校生の進路実現に繋がる。	・大学入学後に伸びる生徒に共通する点。SSH,SGHから探究へ広がるのはいい。島根大学入試で育てるのはいいこと。同じテーマで各大学で高大連携講座を一部行い、同じ基準で評価しては？ ・成績、基礎学力だけでなく、学びに主体的な学生を見つけることができる ・探究で高校とのコラボ（1～3年生）が構築できると、入試時の（大学側）負担が減る可能性がある。 ・研究テーマや研究内容を通して、大学の学び・研究とのマッチングを図れる点。探究のプロセスを通して、受験者の資質・能力を評価できる点。
課題	・個人生徒のびてほしい、順位付けは入ってくる、入試と結びつけると本来の探究とはかけ離れてしまう。探究活動観点別に評価しない。 ・探究テーマが志望学部・学科と一致しないことは起こりえるので、テーマとつながる学科しか受けられないような制約はない方が、生徒が素直に進路選択できる ・入試において「どう評価されるか」が見えない／見えにくい中での指導への苦労。教員の負担の増大。	・入試判定　→客観的入試はない？どういう生徒が大学に入ってから伸びるのか？現地集合だけだと経済面を考慮してほしい。 ・高校での探究活動をどう評価・採点するか、ルーブリックの公表が非常に難しい ・高校の取り組みによって、格差が拡大する可能性があるが、それをよしとして進めるのが良いことなのか？ ・探究型入試を活用できる受験生と、それができない受験生の格差が生じる。 ・志望順位が第2希望以下が多い現状で、地域差とかも出てくる可能性がある。 ・配点や評価の難しさ。探究活動のゴールが「入試」になってしまうことへの懸念。

探究活動は、大学入学後の学習成果に結びつくか？

	高校側	大学側
可能性	・探究学習は確実に進んでいる。協働学習をひっぱる存在になっている。 ・生徒の中のどこかに残ってくれたらよいと考えて取り組んでいる。趣味でやっている生徒と趣味でやっている教員が取り組んで、勉強するのが好きでない生徒が合格した例もある。	・学科によっては目的志向の学生が捕まえやすくなるかもしれない。 ・高校生徒が入学前に大学の先生に直接的に指導されると、よりプロセスがみえる化されて評価しやすいのではないか。
課題	・大学にどれくらい評価されるのかが分からず懐疑的になっている。 ・大学側の募集人員が少ないので，あまり力をかけることができない。 ・大学入試での評価の仕方について、入試なので基準や形式は必要だがガチッとした成果報告書は、大人の手も必要だし、それに細かいところまで労力がかかると落ちた場合は切り替えも大変。 ・生徒の意欲や意識の変化を見てもらえればありがたい。 ・探究の中心となる学年が2年生に多いので、3年生の担任にとっては書きづらいのではないか。	・学部・学科・コースによって温度差が出るかもしれない。 ・高校での学びの深さが違うと思われるため「同じ入試で比較して良いのか」という課題が上がっている。 ・大学に入ってからの成績に差がある。3年生まで到達すれば力を発揮できるのだが，1・2年生の教養科目で単位を落としてしまい，続かないことがある。

到達点と今後の課題

最後に木村氏より、2008 年のＪＦＳ新入生調査より得られた研究成果を使って講評があった。そこでは、探究学習をしているから、高い学修成果を大学で上げているのではなく、探究学習を経験して培われた自主性を経由して、大学での学修成果につながっていることが判明している。また、大学入試が変わらないと高校が変わらない、ではなく、探究学習の経験、学生の態度、活動、行動につながっているのを大学教職員は見て取っている。探究活動を入試で評価するには、その観点に着目すべきであろう。また、探究活動の経験と大学入学後の学修成果については、探究学習をした高校生を伸ばすための、高校生から大学生までの教育を整える必要があり、探究学習を評価した後、入れっぱなしで成果が出るものではないという解説が行われた。

このたびは、探究学習や活動を扱う新しい入試や教育の報告を基に、高大接続に与えるインパクトとその可能性や課題を浮き彫りにできた。その課題について、探究学習にとらわれない総合型選抜を従来から実施してきた大学では、高大接続の中でどのような経験や知見のもと、解決を図ってきたのかを探る必要があると考える。

スライド1

第19回高大連携教育フォーラム

探究的な学びから研究へ
教育改革のジャンピングボードになるには

「学びのタネ」を大学につなげる

島根大学　教育・学生支援本部
大学教育センター
教授　泉　雄二郎　　准教授　美濃地裕子

スライド2

本日の要旨

1　学びのタネを重視するへるん入試

2　入学者の思い

3　評価の仕方

4　育成型入試としてのへるん入試

出願前教育 → 入学前教育 → 初年次教育

スライド3

島根大学の特徴

人とともに　地域とともに

規模

松江キャンパス	募集人員
法文学部	185
教育学部	130
人間科学部	80
総合理工学部	400
生物資源科学部	200
出雲キャンパス	
医学部	162
	1157

スライド4

島根大学の入試　全体の枠組み

一般選抜 → 前期日程
後期日程　70%

特別選抜 →
【大学入学共通テストを課す】
学校推薦型選抜Ⅱ
医・医　（学校推薦・地域・緊急）
医・看　（学校推薦）
総合型選抜Ⅱ
教育Ⅰ類（一般型・地域）
人間科学（一般型・地域）
10%

【大学入学共通テストを課さない】
総合型選抜Ⅰ＝「へるん入試」
法文・教育Ⅱ類・総合理工・生物資源
20%

スライド5

へるん入試　募集人員

		一般型	特定型
法文学部	62	45	17
教育学部	10		10
総合理工学部	115	84	31
生物資源学部	70	48	22
合計	257	177	80

スライド6

「へるん」とは

小泉八雲
ラフカディオ・ハーン（1850~1904）のこと

ハーンが滞在した松江では
親しみをこめて今でも
「へるん」さんと呼称しています

ハーンは
文学者・新聞記者・民俗学者・英語教師として
多方面でオ能を発揮し
異文化の架け橋となりました

「へるん」さんの魅力と才能の多様性を
高校生の持つ多様な可能性に
重ね合わせました

スライド7

Ⅰ－1　趣　旨

知識重視のⅠ点刻みの入試からの脱却

↓

従来とは異なる視点から優秀な人材を集め、育てたい

↓

高校までに育まれた「学びのタネ」を重視

↓

学びのタネ　＝　物事への疑問（好奇心）
課題解決に対する意欲・姿勢（探究心）

↓

自由な発想・ユニークな視点を持つ学生を選抜

↓

一般選抜の入学する学生にもいい影響を与えることに期待

スライド8

Ⅰ－2　学びのタネ

好奇心と探究心 が　学びのタネ

「面白いな、もっと深く学んでみたいな」　教科の豊かさに心動かされた

「どうすれば解決するのだろう」　課題を解決したいと思った

感動、違和感、疑問、課題意識、貢献意識

ぜんぶ「学びのタネ」

資格・成果に限るものではなく

志向・興味といった
目に見えないもの、ささやかなもの

スライド9

えっ
なんか　へんだなあ　　違和感

どうして
なんで　　好奇心
探究心

すごい
すてき　　憧れ

スライド10

Ⅰ－3　アドミッションポリシー

具体的には以下のような学生を求めます

- 大学での学びに必要な基礎的学力を有する人
- 特定の学問・教科に関心を持ち
それに継続的に向きあったことのある人
- 知的好奇心を有し、
それを主体的・積極的な探究により
深めた経験のある人
- 他者と協働して何かをなし
それを自らの学びに役立てたことのある人

スライド11

Ⅰ－4　多面的・総合的評価のとらえ方

■ 自分の長所や強い思いが活かせる
■ 取り組みの本気度を大学につなげたい
■ 学びたい、深めたい学びを実現できそう

↑

多面的・総合的に評価する選考により

↓

■ 取り組んでみたいことをもって入学してくる学生
■ 主体的に学ぶ構えを備えている学生
■ 協働的に課題解決に取り組もうとする学生
を獲得できる

スライド12

2－1　なぜ　へるん入試　に出願したのですか？

【法文・社会文化/地域志向】

・自分の経験を最大限に活かすことが出来ると思ったから。
・今までの経験を一度自分の言葉で説明できた方が将来役にたつと思ったから。（今まで自分は何をしてきてこれからは何を研究したいのかを整理した状態で大学に入学した方が絶対プラスになると思ったから。）

【総合理工・建築デザイン/スポーツ・芸術・技能】

私は工業高校出身で、3年間建築を学んできました。クローズアップシートを通して、授業や部活動で建築を学んだこと、建築に関する検定に取り組んだことなどをアピール出来ると思い、へるん入試を受験しようと思いました。

【生物資源・環境共生/地域志向】

大学受験にあたって、私は高校生活でやってきたことを最大限評価してくれる大学を探していました。そんな折に一年生の時から進路相談をしてもらった先生からへるん入試を紹介してもらったことがきっかけで、へるん入試を受験しようと思いました。

【教育・音楽】

コロナ禍によって大会どころか、練習さえも制限されとても悔しい思いを味わいました。そこで、私は合唱で得た感動や悔しさ、そしてどうしたら沢山の人に合唱の魅力をコロナ禍でも伝えられるかという学びのタネを持っていることに気づき、受験を決めました。（私は受験の時学びのタネは自分の大好きな合唱を子供達に広げ、合唱の輪を大きくできる教師のようなことを書きました。）

スライド 13

３－１　評価（一般型・特定型共通）

・筆記試験　→　読解・表現力試験　→ １００点
理数基礎テスト（総合理工学部の3学科）→ １００点

・書　類　→　調査書（調査書別紙）　→　８０点
クローズアップシート

・面　接　→　志望理由書　→ １００点
面接

筆記試験１００（総合理工２００）　＋　書類８０　＋　面接１００

スライド 14

調査書・調査書別紙

調査書

・部活動
・生徒会活動
・学校行事
・探究的な学習の時間や探究型学習
→（転記／加筆）→ 調査書別紙

「記載要領」にしたがって
探究的な学習
・探究的な学習の時間
・各教科の学習
・地域探究活動など　　くわしく記載

スライド 15

調査書別紙　主体性・探究心 に関する記述

探究的活動に対する主体性、探究心に関する特徴を具体的に記述してください

（１）主体性の具体
活動の意義を認識し
具体的に取り組んだことや取り組みに対して振り返りが行われ
失敗や問題を克服しようとしたことなどを簡潔に記述してください

（２）探究心の具体
情報収集を積極的に行ったことや
仮説、検証の手続きをとることができたことなど簡潔に記述してください

その際、本人から面接や質問票等によって、以下のことを確認し
記述されることが望ましいです

① なぜそのテーマや問題・課題を探究しようと思いましたか
② 探究的な取り組みをする中で、どんな気づきがあり
そのことを活動の中にどう活かそうとしましたか
③ 探究的な取り組みをする中でどんなことに苦労しましたか
④ 探究的な取り組みをしたことによって得られたことは何ですか

スライド 16

学部・学科、学校選択
↑ 揺さぶり ←「こんな領域もあるよ」「ここもつながるよね」
取り組みたい課題（学びのタネ）の明確化　↑
↑　アカデミズムを想像
周囲の評価による
自己肯定感の向上
↑
解決策を提言・実行　←　担任の目　・何を大切にしようとしているか
・何に喜びを感じるか
・何が得意か
↑
解決策を模索・研究　→　学びの気づき（タネ）　↑
↑　生徒の歩み
地域課題の気づき
↑ コーディネート
“地域”を体感
↑
やりたいことが見えていない

スライド 17

３－２　クローズアップシート

「クローズアップシート」は　志願者が記述するものです

高校段階の活動の中で最も力を入れて取り組んだものを
一つだけ挙げて

・その活動にどう取り組んだのか
・振り返って記述してください

８００字程度にまとめてください。

※　志望理由書に記載する「学びのタネ」に
関係があることでも
ないことでも　かまいません

スライド 18

体験したことを
言葉にして、価値づけする

① 問題・課題を探究しようと思った理由・きっかけ

② 苦労したこと・失敗したこと

③ 取り組みの中の気づきと気づきに基づく発展

④ 取り組みによって得られたこと

スライド 19

３－３　志望理由書

「志望理由書」は、志願者が記述するものです

・学びのタネ

・学びのタネは４０字以内で記述します
・簡潔な記述でも構いません
・記述した字数の長短は問いません

※　今後、記載例をホームページに掲載しますので参照してください

・なぜ島根大学で学びたいのか
何を、どう学びたいのか　　を記述します

スライド 20

・物理の知識を極めて
地域に貢献する人材を育てる教員になりたい。
理科教育学

・プログラム言語は学校以外でも自学しており
将来はシステムエンジニアになる。
ソフトウェア工学

・世界一エコで暮らしやすい家を造る。
建築環境工学

高校の教科・科目から見る
島根大学研究ラインナップ

・生命の本質に迫りたい。
分子生物学

・効率的な農業生産と快適な暮らしを両立させて
豊かで元気な農村社会を実現する。
農村経済学

スライド 21

４－１　出願前教育

①動画「高校生からの地域課題研究入門」

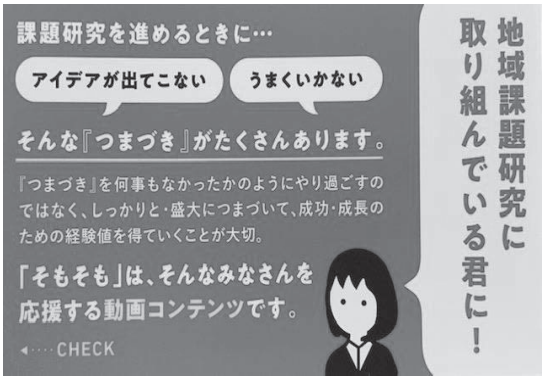
②冊子「高校の教科・科目から見る
島根大学の研究ラインナップ」

③Webサイト「へるんスクエア」

④Web面談　「地域志向型入試面談」

スライド 22

動画コンテンツ　「高校生からの地域課題研究入門　そもそも」



スライド 23

高校の教科・科目から見る　「島根大学の研究ラインナップ」

この冊子について

高校で学習する教科・科目から
島根大学の教員の研究を
のぞいてみる冊子です

大学について
何を調べたらいいんだろう
どうやって調べたらいいんだろう
と思っている人

パラパラっと
自分の好きな教科・科目を
のぞいてみてください

あなたの好奇心とつながる
大学教員の専門を
探し出すことが大学選択です

あなたの好奇心が
島根大学へとつながると
嬉しいです

スライド 24

スライド 25

地域志向入試　Web 面談　ご案内

あなたと島根大学職員との対話の場です

あなたの想いを聞きながら
あなたのやりたいことについて一緒に考えます

職員との対話（面談）から
自分だけのストーリーを掘り起こし
まち・ひと・未来をつくる自分をイメージしてみませんか

【参加者感想】

「自分の進みたい方向へ勇気をもらった」

「自分の考えはまだあいまいで
もっと地域について具体的に考えていく必要があると気づいた」

・対象　全国の高校生　※ 出願要件ではありません

・申込み　https://www.shimane-u.oc.jp/nyushi/information/mendan/index_02.html?node_id=3830

スライド 26

４－２　入学前教育（ぷれ大学）

① **入学前セミナー**（12月）
在学生とのグループディスカッションなど

② **英語eラーニング**（12月～3月）

③ **LMSによる学科専攻別課題**（12月～3月）

スライド 27

４－３　初年次教育

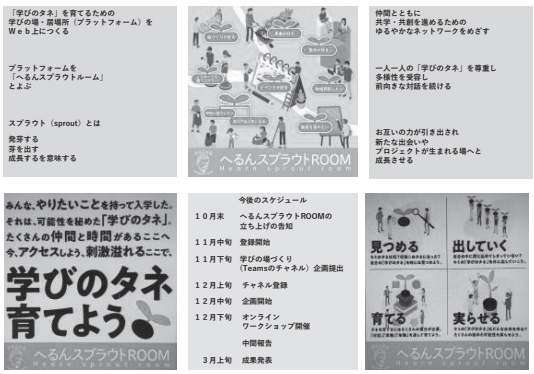
① **スタートアップ・イングリッシュ**
英語が苦手な学生のための英語クラス

② **フレッシュゼミナール**
「学びのタネ」を深化・展開するために専門分野に触れる機会を学科ごとに設けた講座

③ **へるんスプラウトROOM**
「学びのタネ」を育てるための居場所・学びの場
プラットフォームをWeb上に立ち上げ

スライド 28

へるんスプラウトＲＯＯＭのイメージ



スライド 29

４－４　進路設計に必要なことは

【ステップ１　振り返る】　クローズアップシート
- 高校時代の経験や頑張ったこと、活動など
- その経験から気付いた・学んだ・考えたこと　言葉にしてみる

↓　一人で取り組み 誰かと対話する

【ステップ２　思いの深化】　学びのタネ
- 学びを動機づけるもの・私の「学びのタネ」
- 「学びのタネ」から生まれる取り組みたい問題やテーマ
- その問題やテーマに取り組む意義や必要性　深く掘り下げる

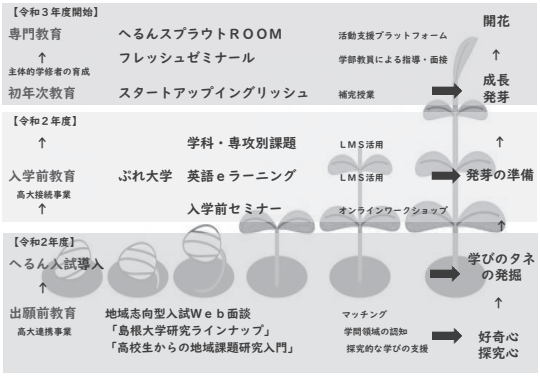
誰かと対話する

↓　志望理由書

【ステップ３　自分の未来を想像する】
- 「学びのタネ」に基づく自分らしい学びとは　自分を鼓舞する
- 実現できる環境（進学先・就職先）は、どこにあるか
- 何が生まれる予感がするか・どんな未来に貢献するか　応援してもらう

スライド 30

【教育】島根大学型育成入試「へるん入試」の実施と高大接続改革



スライド1

スライド2

2016年 ＳＧＨ・ＳＳＨ対象公募推薦入学試験導入

- **2014年度よりスタートした文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業においては、急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付けることを重視し、課題研究と高大連携を二本の柱として教育プログラムの開発を目指している。**
- **このスーパーグローバルハイスクールや本学が教育連携を行う高等学校において、課題研究を通じて能力を高めた生徒を、多面的・総合的に評価を行い、積極的に受け入れ、本学が採択されたスーパーグローバル大学事業への接続を促進するため**の公募推薦入学試験を実施する。

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド3

探究評価型入学試験の変革

＜ 2016年度入試 ＞
ＳＧＨ対象公募推薦入学
ＳＳＨ対象公募推薦入学

→

＜ 2021年度入試 ＞
ＳＧＨ対象入学試験
ＳＳＨ対象入学試験
探究（課題研究）評価型入学試験

↓

＜ 2022年度入試 ＞
探究評価型入学試験

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド4

アドミッション・ポリシー

1．探究評価型入学試験のアドミッション・ポリシー

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー "Mastery for Service（奉仕のための練達）" を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。その使命を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求め、本入学試験を実施します。

本入学試験では、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を発見し、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた生徒を求めています。

第一次審査においては書類審査を行います。横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して培った力を提出書類にて多面的、多元的に評価します。

さらに第二次審査において、学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。高等学校での学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。

出願資格として、英語資格・検定試験スコア CEFR A2レベル以上を有する者と設定しています。

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド5

出願資格

② 次のＡ～Ｃいずれかに該当すること。
Ａ．文部科学省の指定するスーパーグローバルハイスクール（SGH または SGH アソシエイト校）に指定された実績のある高等学校および中等教育学校の生徒である。
Ｂ．文部科学省の指定するスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定された高等学校および中等教育学校、もしくは過去に SSH に指定された実績のある高等学校および中等教育学校の生徒である。
Ｃ．高等学校もしくは中等教育学校等での自身の探究活動について、学校外の機関や団体が主催する大会やコンテスト等（規模やレベルは問わないが、主催が自身の在籍する学校以外であること。）で成果発表等を行った生徒である。

③ 積極的な勉学意欲を有する者で、所属する高等学校等での教育課程内の授業等において探究活動に取り組んでいる者もしくは取り組んだ者。

④ 本学が指定する英語資格・検定試験のスコアを有する者
＜文系学部＞　英語資格・検定試験　CEFR B1 以上を有する者
＜理・工・生命環境・建築学部＞　英語資格・検定試験　CEFR A2 以上を有する者
※文部科学省（平成30年３月）発表の『各資格・検定試験と CEFR との対照表』に記載のあるもので、正規スコアとする。また、各民間試験運営機関が定める有効期限内のものに限る。
詳しくは本学入試情報サイト（https://www.kwansei.ac.jp/kgcefr）をご確認ください。

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド6

提出書類

③探究活動の概要説明書	【本学所定用紙】 出願者本人が自筆で黒ボールペンを使い、丁寧に記入してください（消せるボールペンは不可）。 なお、記入を誤った場合は、二重線を引いて訂正印を押印し、正しく書きなおしてください。
④探究活動の成果物 **複数ある場合は１つを選び提出してください**	**◆論文の場合◆** ①「論文（コピー可）」 ②「論文要旨」（日本語に限る、書式自由、Ａ４サイズ１枚以内） ＜注意事項＞ ・①「論文」が英語で作成したものであっても、②「論文要旨」は必ず日本語で作成してください。 ・②「論文要旨」は、論文中に記載がある場合も、別途作成し提出してください。 ・論文が完成していない場合、作成途中段階の論文を提出してください。 その場合は、論文の概要が記載された**「論文作成の計画書（日本語に限る、書式自由、Ａ４サイズ）」**を別途作成し、必ず提出してください。 **◆発表の記録（ポスター・プレゼンテーション資料など）の場合◆** ①「探究活動の成果物（コピー可）」 ②「①の説明書（日本語に限る、書式自由、Ａ４サイズ１枚以内）」 ＜注意事項＞ 説明書には、発表の場所や結果、グループ発表の場合は自分の役割、振り返りなど詳細に記載してください。 **◆実験成果の場合◆** ①ラボノートなど実験で作成、利用した資料 ②「①の説明書（日本語に限る、書式自由、Ａ４サイズ１枚以内）」 ＜注意事項＞ 説明書には、実験の目的・仮説、内容、自分の役割、結果、結果を踏まえた展望など詳細に記載してください。

© KWANSEI GAKUIN University 2021

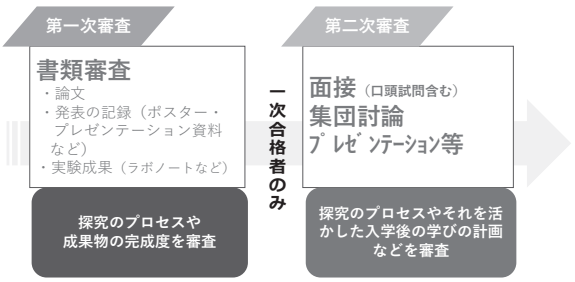
スライド7

探究活動の概要説明書

＊テーマ
＊単独／共同
＊共同の場合、自身の役割や担当箇所
＊参考文献
＊指導を受けた外部機関
＊フィールドスタディ、調査を行った詳細
＊取り組んだ内容（目的・仮説・内容、テーマを選んだ理由、期間、振り返り、今後に活かしたいこと

スライド8

審査方法



スライド9

第一次審査（探究成果物審査）

- 探究成果物は、
  「論文」「発表の記録（ポスター・プレゼン資料）」「実験成果（ラボノートなど）」
- 大学教員＋アドミッション・オフィサーが審査
- １つの探究成果物に対して２人で審査
- ルーブリックに基づき審査

スライド10

第一次審査（探究成果物審査）

～審査の観点～　　＊ルーブリックの抜粋

審査項目	審査観点
形式	成果物や資料の形式が整っているか ポスターの形式が整っているか プレゼンテーション資料の形式が整っているか ラボノート等に実験の成果がまとめられているか
研究の背景 研究の目的	研究目的の明確さ 探究課題に関するインプット 先行研究の適切なレビュー 研究設問の設定等
研究の方法	分析データ・サンプルについて 分析方法の適切さ 参考文献の適切さ 外部機関の利用 フィールドスタディ・調査の実施 他者との協働性
研究の成果	分析と考察の明確さ

スライド11

第二次審査

志望学部において、それぞれの学部のＡＰに基づき
面接（口頭試問含む）、プレゼンテーション、グループディスカッション等
を行う。

例）法学部　第二次審査

プレゼンテーション用のレジュメをＡ４サイズ用紙１枚に出願者本人が自筆で作成し、提出すること。試験当日は、レジュメをもとにプレゼンテーション（約５分）実施後、面接を含む質疑応答（約15分）を行う。なお、プレゼン時は、法学部が用意するホワイトボードのみ使用可とする。

スライド12

第二次審査のねらい

・プレゼンテーションを通じて探究成果物完成までのプロセス、目的、仮説、テーマを選んだ理由、探究活動から学んだもの、成長できたことなどを問う。

・なぜ関西学院大学の○○学部を志望するのか、○○学部での学びの計画を、上記探究活動で得たものと、結び付けて延べよ。（例：教育学部　最近の教育に関するニュースなどテーマを与えてグループディスカッションを実施）

スライド 13

【2022年度入試】志願者数

神	文	社会	法	経済	商	人間福祉	国際	教育	総合政策	理	工	生命環境	建築	計
0	12	17	3	8	11	9	16	4	7	1	5	14	3	110

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド 14

入学後の成績

＜全学部＞＜1年生＞
＊合格科目単純平均の学部毎・学年毎の席次を上位からのパーセントで示している。

入試種類＼学部	合計														
	男子					女子					小計				
	人数	平均席次＊	上位20%以上比率	上位50%以上比率	下位20%以下比率	人数	平均席次＊	上位20%以上比率	上位50%以上比率	下位20%以下比率	人数	平均席次＊	上位20%以上比率	上位50%以上比率	下位20%以下比率
ＳＧＨ公募	10	36.7	40.0	70.0	10.0	39	44.5	25.6	64.1	15.4	49	42.9	28.6	65.3	14.3
ＳＳＨ公募	8	63.4	12.5	25.0	25.0	32	38.1	34.4	62.5	6.3	40	43.2	30.0	55.0	10.0

＜全学部＞＜3年生＞
＊合格科目単純平均の学部毎・学年毎の席次を上位からのパーセントで示している。

入試種類＼学部	合計														
	男子					女子					小計				
	人数	平均席次＊	上位20%以上比率	上位50%以上比率	下位20%以下比率	人数	平均席次＊	上位20%以上比率	上位50%以上比率	下位20%以下比率	人数	平均席次＊	上位20%以上比率	上位50%以上比率	下位20%以下比率
ＳＧＨ公募	30	60.5	16.7	33.3	40.0	39	37.4	33.3	66.7	7.7	69	47.4	26.1	52.2	21.7
ＳＳＨ公募	4	50.8	25.0	50.0	25.0	10	38.6	30.0	70.0	10.0	14	42.1	28.6	64.3	14.3

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド 15

就職決定状況

2021年3月卒業生

入試種類＼学部	合計														
	男子					女子					小計				
	就職率	就職決定率	1000名以上企業への就職決定率	総合職への採用率	大学院進学率	就職率	就職決定率	1000名以上企業への就職決定率	総合職への採用率	大学院進学率	就職率	就職決定率	1000名以上企業への就職決定率	総合職への採用率	大学院進学率
ＳＧＨ公募	85.7	100.0	66.7	83.3	14.3	87.1	100.0	55.6	55.6	12.9	86.8	100.0	57.6	60.6	13.2
ＳＳＨ公募					100.0	66.7	66.7		50.0		50.0	66.7		50.0	25.0

2020年3月卒業生

入試種類＼学部	合計														
	男子					女子					小計				
	就職率	就職決定率	1000名以上企業への就職決定率	総合職への採用率	大学院進学率	就職率	就職決定率	1000名以上企業への就職決定率	総合職への採用率	大学院進学率	就職率	就職決定率	1000名以上企業への就職決定率	総合職への採用率	大学院進学率
ＳＧＨ公募	100.0	100.0	57.1	100.0		100.0	100.0	70.0	70.0		100.0	100.0	64.7	82.4	
ＳＳＨ公募					100.0	50.0	100.0		100.0	50.0	16.7	100.0		100.0	83.3

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド 16

2023年度入試における改変

【出願資格】

・ 積極的な勉学意欲を有する者で、所属する高等学校もしくは中等教育学校等における「教育課程内の授業」もしくは「正課外活動」にて探究活動に取り組んでいる者もしくは取り組んだ者。

・高等学校もしくは中等教育学校等での自身の探究活動において、学校内での発表会や他校との合同発表会、外部機関が主催する大会やコンテスト等（規模やレベルは問わない）で発表を行った者。

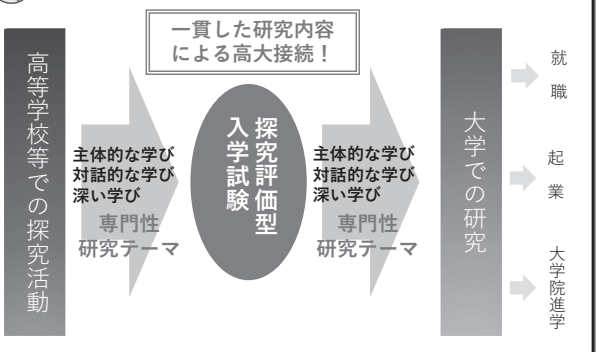
【提出書類】

概要書にてより深く探究のプロセスを問う形式に改変する。

© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド 17

今後の展望



© KWANSEI GAKUIN University 2021

スライド 18

スライド1

講評

九州大学大学院
人間環境学研究院
（教育学部）

木村拓也

第19回高大連携フォーラム　特別分科会 1（高大接続）
12/4(土) 大学コンソーシアム京都

スライド2

10年以上前から高校生の探求学習経験を分析

全国163大学、19,661人が回答した新入生調査JFS2008のデータ

探求学習経験で、学生群を6つに分けた。

1. 無目的型　25.9%
2. 探求学習型A（無理解入学）24.5%
3. 高校指導従順型 15.1%
4. 受験勉強型（他律型）12.0%
5. 探求学習型B（本命入学）11.6%
6. 受験勉強型（自律型）10.8%

探求学習の経験が多くなっている現在、現在のデータで分析すると結果が変わっている可能性がある

自己紹介
大学入試に関する仕事
長崎大学入学前教育を開始(2009)
九州大学21世紀プログラムの実施と運営(2012-2016)
九州大学教育学部国際入試を設計(2019)
現在、大学入試センター研究開発部 客員教授(2021-現在)

また、一般社団法人 大学アドミッション専門職協会理事長(2020-現在)

アジアからの高大接続に関心

九大図書館のHPにリンクが飛びます

https://onl.tw/xzbDYNn

スライド3

経験だけでなく、育てる自主性

探求学習をしているから、高い学修成果を大学であげるのではなく、

探求学習を経験して、培われた自主性（積極的に発言するなど）が、経由して、大学での学修成果につながる。

そこで培われた態度を評価してあげることが望ましい。

https://jsaap.jp/index.html

木村(2010)より引用

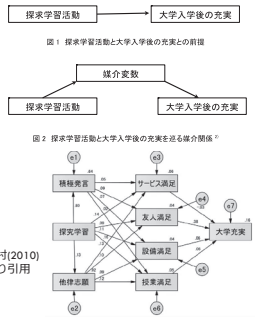


図1　探求学習活動と大学入学後の充実との前提

図2　探求学習活動と大学入学後の充実を巡る媒介関係

図3　探求学習と大学満足度に関するパスダイアグラム

スライド4

大学内で探求型入試を継続するのに必要なこと

探求型入試のエビデンスをどう継続的に作り、学内に説明していくのか？

学修成果にどう結びつくのかを実証し、学内に理解してもらい続ける必要がある。

例）ラーニングポートフォリオによる学生群ごとのテキストマイニング分析

木村(2018)、山田・木村(2021)から引用

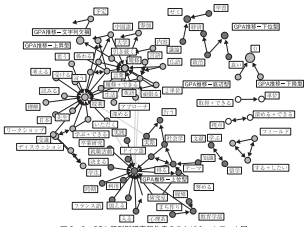


図6—6　GPA 類型別研究報告書のことばネットワーク図
出典：木村ほか（2018：194）図12より筆者作成

スライド5

入学者、出願者へのメッセージを送り続けるために、大学全体での体制づくりの重要性

大学人として、大学で充実して欲しいことが最大の願い

大学入試が変わらないと、高校が変わらない、ではなく、

学生の態度、活動、行動を見て、確実に、高校での変化（探求学習の経験）が、大学で教職員が実感できている。

例）研究室を志望する学生が、高校時代の探求学習の失敗を、大学にきて、学問をして、乗り越えたいといって、研究室に入ってくる。

探求学習した高校生を、大学で伸ばすための出願前のアプローチ、入学前教育、初年次教育、専門教育、大学院教育が必要になってくる。

入れっぱなし、で終わりではないし、入試課やアドミッションセンターだけの仕事ではない。大学全体の意識の向上、連携が必要。

スライド6

参考文献

木村拓也「大学入学者選抜は『高大連携活動』をどこまで評価すべきか？――「評価尺度の多元化・複数化」が孕む大学入学者選抜制度の自己矛盾」International Society for Education(国際教育学会)編『クオリティ・エデュケーション』2号、pp.137-155、2009年3月.

木村拓也「高校での探求学習経験が初年次学生に与える影響――JFS2008の結果から」International Society for Education(国際教育学会)編『クオリティ・エデュケーション』3号、pp.77-94、2010年3月.

木村拓也・田尾周一郎・林篤裕・副島雄児「総合的且つ多面的な評価に基づく入学者選抜とその学修成果の可視化-九州大学21世紀プログラムの事例」『名古屋高等教育研究』18号、2018年3月、pp.177-198.

山田礼子・木村拓也編『学修成果の可視化と内部質保証―日本型IRの課題』、玉川大学出版部、2021年11月.

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

高大社連携フューチャーセッション成果報告
～実行委員会によるセカンドステージを振り返る～

［報告者］　2021 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員
［コーディネーター］　鮫島　輝美（京都光華女子大学 健康科学部 准教授）
［コーディネーター］　杉岡　秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
［オブザーバー］　滋野　哲秀（龍谷大学 文学部 教授）

新型コロナウイルス感染症の影響により、価値観や社会状況が大きく変化する中で、学び方、働き方、暮らし方の多様性が広がっている。これを踏まえた今年度の高大社連携フューチャーセッションの企画づくりを、昨年度に引き続き、高校生・大学生から構成される実行委員会形式で行った。本分科会では、この実行委員会セカンドステージの成果を報告した。

※「高大社連携フューチャーセッション」とは、高校生・大学生のキャリア発達を目的とし、世代や学校の違いを超えて、未来志向で対話・交流する高大社連携キャリア教育プログラムである。

概　略

冒頭、コーディネーターの鮫島氏から、コーディネーターとオブザーバーの紹介、これまでの高大社連携フューチャーセッションについての概要紹介、本分科会の進行について説明があった。

次に、報告者である実行委員が、対面とオンラインのグループに分かれ、自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行った。その間に、参加者は、本年度フューチャーセッション関連資料の閲覧、実行委員が作成した本年度フューチャーセッション紹介ビデオを視聴した。

続いて、実行委員個人で、ワークシートを用いて、①実行委員をやってみて、学んだり気づいたりした点は何か、②企画から実行までやってみて、難しかった点は何か、また、それをどのように解決したのか、またできなかったのか、③この学び・気付きを自分の将来の「学ぶ」「働く」「暮らす」にどのようにつなげるか、の３点について、振り返りを行った。

その後、実行委員は、グループ内で、各々の振り返り内容を共有し、ワークの全体テーマ「この企画が自分にとってどのような体験だったのか？」についてまとめた。その間、参加者は、グループワークの様子を聴講した。

全体発表では、発表ごとに他の実行委員グループとの質疑応答があり、参加者からも質問があった。

最後に、コーディネーターの杉岡氏とオブザーバーの滋野氏から講評を受け、鮫島氏からのまとめの後、本分科会を終了した。

全体討論の内容

本年度高大社連携フューチャーセッションは、実行委員にとって「社会人を先取りして経験し、自分の課題を発見する」体験、また「一つの課題に対して、多角的に考え、新たな価値を見いだす」体験の場となっていた。

具体的には、実行委員は、自分たちが中心となって一から企画を考えること、タイムスケジュールに合わせてさまざまなことを決定すること、多くの意見の中から一つの方向性を見いだすことの難しさや、委員同士の関係づくりから始める中で、意欲的に関わる者とそうでない者との温度差などを感じていた。同時に、それは高校での学びにおいても必要なものであり、さらに大学で何を学ぶのかを決める過程や、どのように専門性を身に付けるのかという将来設計にも通じると気付いていた。また、コーディネーター等の多くのサポートを受けながら、１つの企画を練り上げていくプロセスを踏むことで、社会に出た後に求められる能力について、具体的なイメージを持って体験できていた。

また、実行委員による企画会議は、全てオンラインで行われたが、オンラインならではの困難さや、会議で委員全員が参加できず、誰とどのように協働するのか、試行錯誤しながら決定する困難さも学べていた。

フューチャーセッション開催当日の運営では、全体の進行やファシリテーションの難しさを感じながらも、委員間で役割分担をして協力し合い、最後までやり遂げたという達成感も味わえていた。

到達点と今後の課題

本分科会は、実行委員自らが、今回の企画での経験を言語化する場となった。高校生の委員からは「社会福祉の新たな魅力発見につながり、今後の進路を再考したい」という発言もあった。このことから、高大社連携フューチャーセッションの目的である「高校生・大学生の立場や地域を超えて新たなネットワークをつくり、大学・社会に出てからの働き方や自身の今後のあり方などについても考える」機会となった。また、委員のグループワークでの対話・交流を視聴した本分科会参加者からは「実行委員たちが経験やコミュニケーションを通して学び、成長する姿を垣間見れた」という感想もあった。

本年度フューチャーセッションは「多様性を尊重する社会について話し合おう！～ジェンダー問題から考える日本の在り方～」のテーマで開催し、ゲスト講演の良さも手伝って、当日の参加者にとっては、社会的マイノリティーについて我が事として考える機会となり、満足度も高かった。また、実行委員の満足度も高く、チームとして力を合わせ、１つのものをつくり上げる喜びを感じていた。さらに、実行委員所属高校へのアンケートでも、参加した生徒の様子に対して「社会課題についてこれまでよりも、より深く学ぼうとする姿勢が見られるようになった」などの声が聞かれ、満足度が高かった。

本フューチャーセッション実行委員会での活動を通して、委員は、企画段階からの主体的な参画、自分の意見を発言するだけでなく、他者の意見にも耳を傾け、それらを企画に反映させる過程、また企画書の作成、広報や当日の運営など、今までにない経験に、戸惑いながらも達成感を

感じ、見通しを付けることの大切さにも気付くなど、経験の意義について考えることができた。

一方で、複数の実行委員がいるからこそ、担当に分かれて効率よく進められたと同時に、全てオンラインでの準備であったので、積極的に関わる者とそうでない者との差ができ、さまざまな意見が出て、まとめることに苦労したという意見もあった。しかし、Slack 内で適宜情報を共有したので、コーディネーター等が適切な助言ができたと考える。また、高校生が非常に多忙で、企画会議で委員全員が一度も揃うことがなく、フューチャーセッション当日も模試とバッティングするなど、日程調整が困難であった点については、今後の課題と考える。

スライド1

2021年度高大社連携フューチャーセッション
振り返り会

ファシリテーター
鮫島　輝美（京都光華女子大学健康科学部）
杉岡　秀紀（福知山公立大学地域経営学部）
オブザーバー
滋野　哲秀（龍谷大学文学部）

スライド2

本日のスケジュール

- 14:00　概要説明
- 14:10　アイスブレイク
- 14:20「この企画が自分にとってどのような体験だったか？」
- 14:40　意見共有
- 15:00　発表準備
- 15:20　グループ発表
- 15:50　講評
- 16:00　閉会

スライド3

自己紹介

- 鮫島輝美（さめしまてるみ）
- 専門：理論看護学・社会心理学（グループ・ダイナミックス）
- 研究テーマ

「人が病や障害を持っても、〈疎外〉されないで生きられるコミュニティや地域をどう作っていくのか？」

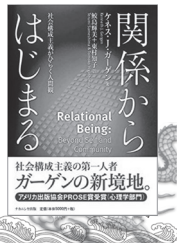
→ 社会的弱者への公的支援

→ 社会構成主義の実践への応用

スライド4

研究テーマ

- 地域支援
- 介護問題
- 学習支援
- 授業づくり
- 学習環境デザイン



- 関係論的アプローチ
- アクションリサーチ，現場研究
- 質的研究
- 当事者研究

スライド5

2017 高大社連携フューチャーセッション

「地域づくりは誰のためか？何のためか？　ーマルチセクターから考えるー」

山添　藤真氏（京都府与謝野町 町長）
森田　賢氏（京都府福知山市役所）
竹内　弘一氏（KBS京都報道局キャスター）
川人　ゆかり氏（合同会社ミラマール 社長）

スライド6

2018 高大社連携フューチャーセッション

「働くと学ぶをどうつなげるか？
ー人間にしかできない価値とは何かを考えるー」

矢島里佳氏（株）和える　代表取締役
塚本　亮氏 GLアカデミア（株）代表取締役

矢島　里佳 氏（株式会社和える　代表取締役）　京都市内会場

塚本　亮 氏（ジーエルアカデミア株式会社　代表取締役）　京都市内会場

スライド 7

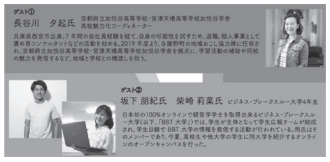
2019 高大社連携フューチャーセッション

- 「これから社会で必要とされる仕事とは？」
  今井紀明氏　認定NPO D×P理事長
  田村篤史氏（株）ツナグム代表取締役

スライド 8

2020 高大社連携フューチャーセッション

- 「考えてみませんか？Withコロナ時代における新しいライフデザイン」
  長谷川夕起氏　高校魅力化コーディネーター
  坂下朋紀氏　ビジネス・ブレークスルー大学
  柴崎莉菜氏

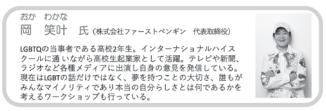


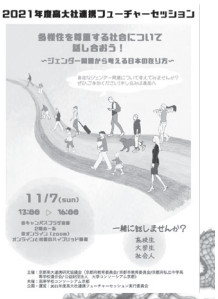
スライド 9

2021 高大社連携フューチャーセッション

- 「多様性を尊重する社会について話し合おう！～ジェンダー問題から考える日本の在り方」

岡　笑叶氏（株式会社ファーストペンギン）





スライド 10

2020年からの取り組み

- 企画：全てコーディネーターと事務局で
- ゲスト：全てコーディネーター
- 参加者として　→「お客様？」
- その日だけの参加　→「イベント？」
- 開催場所の問題 北部？　南部？　それとも・・・

→ 学生主体の「学び合いの場」となるには？
→ 今年度の取り組み

スライド 11

2021 高大社連携フューチャーセッション

- 5月　実行委員募集
- 6月　オリエンテーション兼事前説明会，Slack開設，ミニ勉強会
- 7月　第1回実行委員会　実行委員会　正副委員長決定，
  企画検討，広報準備，議事録作成，
  第2回実行委員会，テーマ企画案検討
- 8月　交流会，テーマ決定，第3回実行委員会
- 9月　臨時実行委員会・企画案決定・ポスター作成，ゲスト決定
  チラシ作成，企画案承認，第4回実行委員会
- 10月 ゲスト打合せ，名札作成，広報開始，当日プログラム作成
  第5回実行委員会，ファシリテーション講座
- 11月 申込締切延長・掲示物作成・当日役割分担決定，グループ分け
- 12月 高大教育フォーラム　振り返り会

スライド 12

アイスブレイク

- 仲間のフルネームが言えて書ける
  1人2分　×　8分
- 名前
- 学校・大学
- 名前の由来
- 今，ハマっていること
- 今日の体調

スライド 13

テーマ「この企画が自分にとってどのような体験だったのか」

１．学生実行委員会をやってみて，気付いたり学んだりしたこと

２．企画から実行までやってみて，難しかった点，またそれをどのように解決したのか，またできなかったのか．

３．この学び・気づきを自分の将来の「学ぶ」・「働く」・「暮らす」にどのようにつなげるか．

スライド 14

グループ内共有

◈ １テーマ ✕ 5分　15分

１．学生実行委員会をやってみて，気付いたり学んだりしたこと

２．企画から実行までやってみて，難しかった点，またそれをどのように解決したのか，またできなかったのか．

３．この学び・気づきを自分の将来の「学ぶ」・「働く」・「暮らす」にどのようにつなげるか．

スライド 15

発表の準備

20分

スライド 16

グループ発表

１チーム　８分
質疑応答　2分

スライド 17

講　評

杉岡秀紀（福知山公立大学）
滋野哲秀（龍谷大学・京都教育大学）
鮫島輝美（京都光華女子大学）

杉岡　秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）

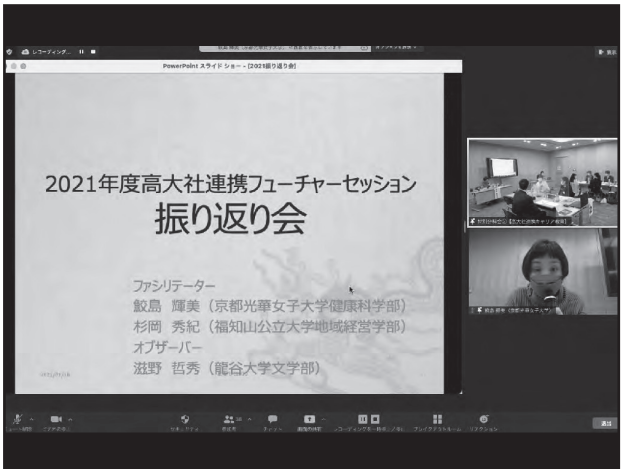
スライド1

高大社連携FS
ふりかえり会

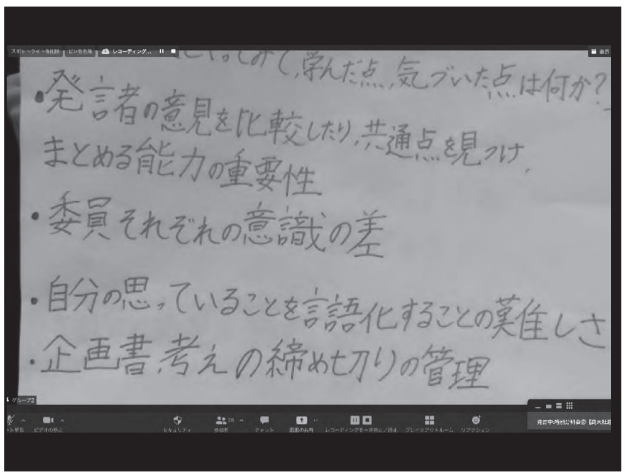
2021年12月18日
@キャンパスプラザ京都＋zoom

杉岡　秀紀

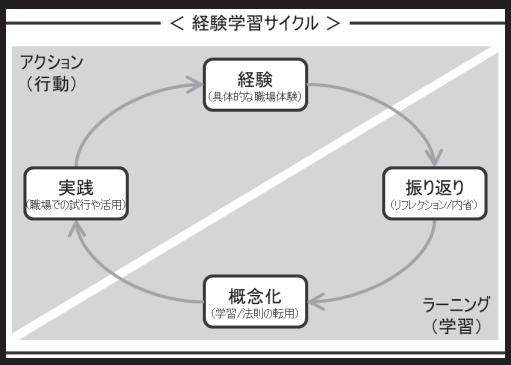
スライド2



スライド3



スライド4



D・コルブの経験学習サイクル

スライド5

今年の特徴

スライド6

①ハイブリット運営＋slackの活用

②ニューカマーとオールドカマー（経験者）のバランス

③1テーマ・1ゲスト（狭く深く）

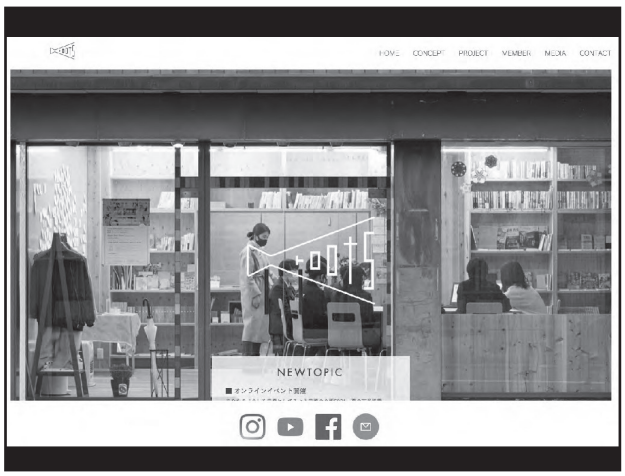
スライド 7

総括（コメント）

スライド 8

家でもない学校でもない
「サードコミュニティ」
（リアル＋オンライン）
↓
ごちゃまぜの
ミニパブリックス

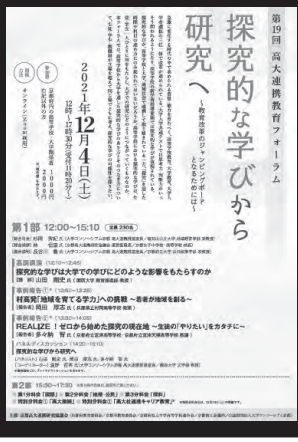
スライド 9



スライド 10

もう一つの部活
もう一つの実践的探究
（プロジェクトの型を実践を通して学ぶ）
↓
消費者視点から生産者視点へ
※社会人の先取り

スライド 11



スライド 12

高大のギャップを
当事者自らが埋める
↓
大学・学びたいこと・自分・
地域に対する選択肢を提供

スライド 13

スライド 14

せせらぎ

京都府教育委員会は今夏、全府立高校1年生に対しアンケート調査（回答率55・2%）を行った。その結果、約86%の高校生が高校生活に満足していることが分かった。一方で、進学理由は「近くて通いやすい」が21%で一番、高校の魅力は「部活動（全日制）」が16・7%で一番ということであった▼すなわち、特色ある取り組みや授業、探究的な学び、地域との連携などは、まだ訴求力が弱いことが明らかとなった。筆者も現在、府立高校の在り方ビジョン検討会議に参加しているが、この結果はやや驚きであった▼ところで、昨年度より府北部の地域や学校種を超えて高校生が集う「高校生みらい会議」（主催・京都府北部連携都市圏形成推進協議会）のお手伝いをしている。昨年度は8校20人だったが、今年度は12校25人が集い、高校生同士の対話から、北部地域の魅力発信や問題解決のためのアイデアが次々と生まれている。今後は実装に当たって大学生や自治体職員も伴走予定である▼言うまでもなく、現在はまだ参加者も限られ、認知度もまだ低い。しかし、高校生が「当事者」として実際の地域と関わり、爪痕を残そうとする経験は、自分たちの自信につながるだろう。何より彼ら彼女らの地域に対する眼差しを良い意味で変えてくれるだろう▼デジタルのバーチャルが声高に叫ばれる時代だからこそ、アナログやリアルならではの「体験による学び（J・デューイ）」も大事にし続けたい。（杉岡）

スライド 15

面辛さ
苦楽しさ

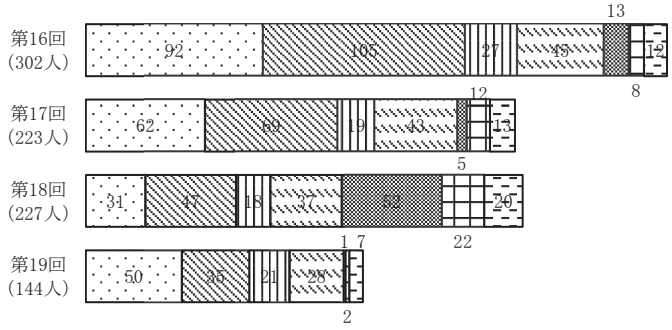
cf）スケジュール・企画・講師・チラシ・オンラインオフラインバランス・第１声・ファシリ・意識差・協働など

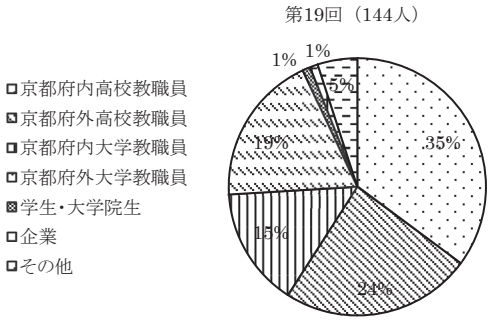
スライド 16

経験による学び
（J・デューイ）

第 19 回高大連携教育フォーラム　参加者アンケート結果

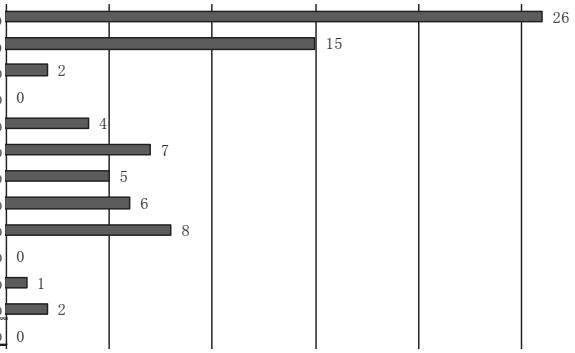
（1）参加者数及び内訳





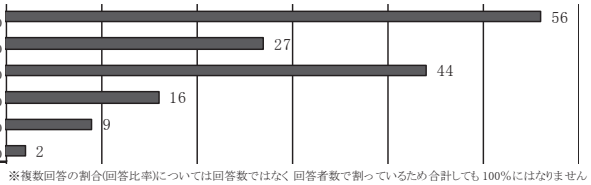
（2）回答数及び内訳

	回答数	比率
1.高校教員（京都）	26	34.2%
2.高校教員（京都府外）	15	19.7%
3.高校職員（京都）	2	2.6%
4.高校職員（京都府外）	0	0.0%
5.大学教員（京都）	4	5.3%
6.大学教員（京都府外）	7	9.2%
7.大学職員（京都）	5	6.6%
8.大学職員（京都府外）	6	7.9%
9.その他教育機関	8	10.5%
10.学生	0	0.0%
11.企業	1	1.3%
12.その他	2	2.6%
無回答	0	0.0%
合計	76	



（3）参加理由（複数回答可）

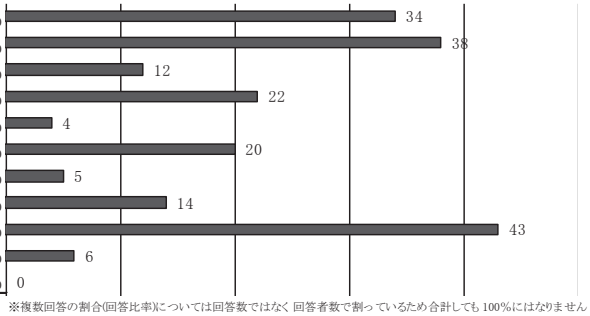
	回答数	比率
1.フォーラムの内容に興味があったから	56	73.7%
2.過去に参加したことがあったから	27	35.5%
3.高大連携・接続の情報を収集したいから	44	57.9%
4.スキルアップしたいから	16	21.1%
5.所属組織からの推薦があったから	9	11.8%
6.その他	2	2.6%
合計回答数	154	
合計回答者数	76	



※複数回答の割合(回答比率)については回答数ではなく 回答者数で割っているため 合計しても 100%にはなりません

（4）興味があった内容の内訳（複数回答可）

	回答数	比率
a.メインテーマ	34	60.7%
b.基調講演テーマ	38	67.9%
c.基調講演 登壇者	12	21.4%
d.事例報告①テーマ	22	39.3%
e.事例報告①登壇者	4	7.1%
f.事例報告②テーマ	20	35.7%
g.事例報告②登壇者	5	8.9%
h.パネルディスカッション	14	25.0%
i.分科会テーマ	43	76.8%
j.分科会 登壇者	6	10.7%
k.その他	0	0.0%
合計回答数	198	
合計回答者数	56	

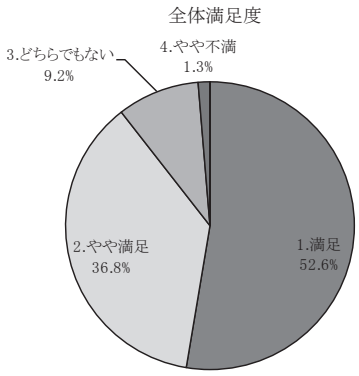


※複数回答の割合(回答比率)については回答数ではなく 回答者数で割っているため 合計しても 100%にはなりません

(5) 満足度

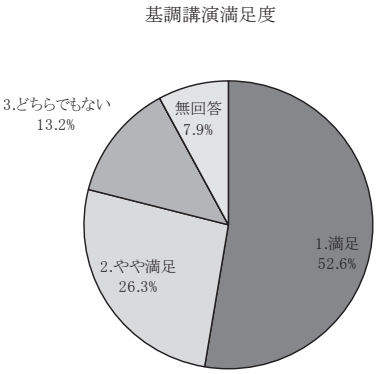
◆フォーラム全体

	回答数	比率
1.満足	40	52.6%
2.やや満足	28	36.8%
3.どちらでもない	7	9.2%
4.やや不満	1	1.3%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	76	



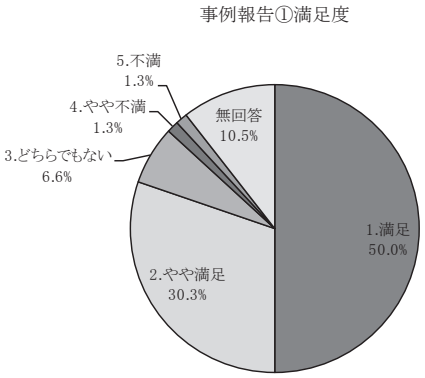
◆基調講演

	回答数	比率
1.満足	40	52.6%
2.やや満足	20	26.3%
3.どちらでもない	10	13.2%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	6	7.9%
合計	76	



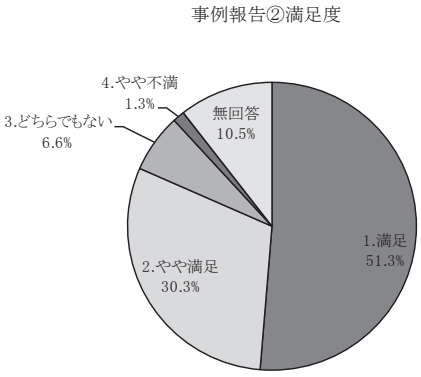
◆事例報告①

	回答数	比率
1.満足	38	50.0%
2.やや満足	23	30.3%
3.どちらでもない	5	6.6%
4.やや不満	1	1.3%
5.不満	1	1.3%
無回答	8	10.5%
合計	76	



◆事例報告②

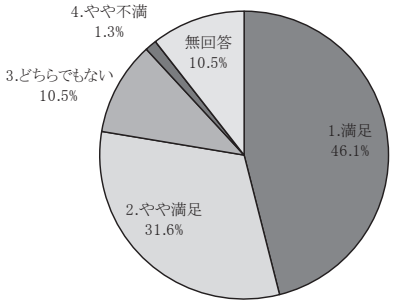
	回答数	比率
1.満足	39	51.3%
2.やや満足	23	30.3%
3.どちらでもない	5	6.6%
4.やや不満	1	1.3%
5.不満	0	0.0%
無回答	8	10.5%
合計	76	



◆パネルディスカッション

	回答数	比率
1.満足	35	46.1%
2.やや満足	24	31.6%
3.どちらでもない	8	10.5%
4.やや不満	1	1.3%
5.不満	0	0.0%
無回答	8	10.5%
合計	76	

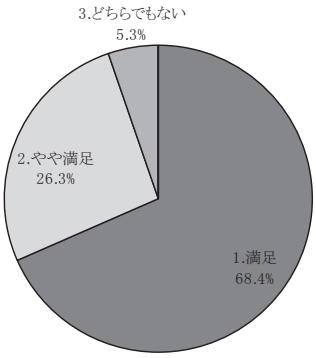
パネルディスカッション満足度



◆第１分科会【国　語】

	回答数	比率
1.満足	13	68.4%
2.やや満足	5	26.3%
3.どちらでもない	1	5.3%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	19	

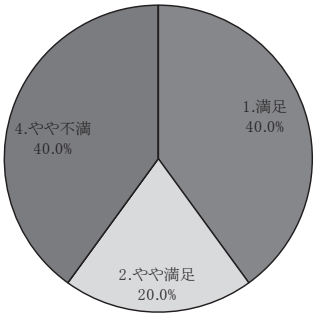
第1分科会【国語】



◆第２分科会【地歴・公民】

	回答数	比率
1.満足	2	40.0%
2.やや満足	1	20.0%
3.どちらでもない	0	0.0%
4.やや不満	2	40.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	5	

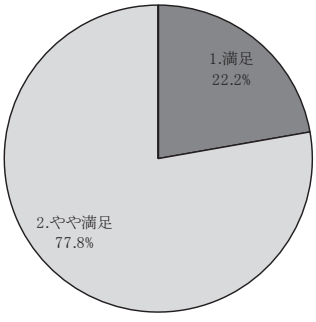
第2分科会【地歴・公民】



◆第３分科会【理　科】

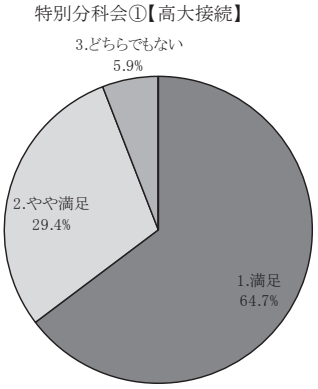
	回答数	比率
1.満足	2	22.2%
2.やや満足	7	77.8%
3.どちらでもない	0	0.0%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	9	

第3分科会【理科】



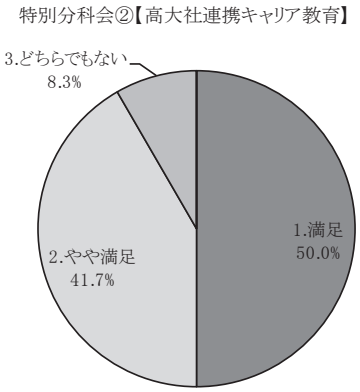
◆特別分科会①【高大接続】

	回答数	比率
1.満足	22	64.7%
2.やや満足	10	29.4%
3.どちらでもない	2	5.9%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	34	



◆特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

	回答数	比率
1.満足	6	50.0%
2.やや満足	5	41.7%
3.どちらでもない	1	8.3%
4.やや不満	0	0.0%
5.不満	0	0.0%
合計	12	



（６）ご感想やご希望、その他ご意見（抜粋）

フォーラム全体

・オンラインではあったが、議論を通して考えを整理することができ、理解が深まった。また、たくさんの参考になる情報を得ることができた。

・高校における探究活動やそれに係る高大連携・大学入試について理解を深めることができた。

・今後さらなる高大連携が求められる中で、その先進的な事例に触れることができた。また、今後、日本の教育の大きな転換点になり得る「探究的な学び」の導入について、幾つか貴重な観点が得られた。

・参加者同士の意見交換をし、知識交流をする機会が得られた。話し足りないくらいであった。

・先生方の日々の実践を共有していただくことで、大学も高校も変わろうとしている現状を知ることができた。

・探究活動が高大連携・接続の中でどのような意味合いを持つのか、とてもよく理解できた。

・盛りだくさんの内容、豊富な事例で大変満足している。一方で、当事者の体験を踏まえたご講演が多かったからこそ、もう少し質疑の時間を取っていただければ、より具体的、個別的な質問ができたのではと思う。

・今まで中学校との連携・連続性を重視してきたが、大学進学率が高まる中、高大連携において、何を重視すべきなのか、なぜ「探究」が必要なのかがよく理解できた。

基調講演

・エビデンスが多く、大学での実践例と実際の学生の様子など、非常にリアルなお話で、とにかく分かりやすかった。

・これからの高校での学びに必要なこと、「受験」という壁に向かって高校での授業と大学の入試が変わらなければならないことなどについて考えを深めることができた。

・大学の先生が高校の探究に求めていることがよく分かった。

・探究への関心が薄い先生方もいる中で、探究の必要性について説得力を持ったお話が聞けたほか、「学習」から「探究」に変更された理由や変更内容についても再確認、整理することができた。

・探究的な活動を経験した学生が、大学での学びの中で資質・能力を発揮していることが資料から窺われ、探究的な学習をすることの効果を再確認することができた。

・入試を通じて生徒を育てること、という話がとても印象深かった。探究学習の意義を再確認できた。

・非常に明快に解説いただき、点と点が一気に線になった思いで感銘を受けた。探究学習の重要性を再認知した。

事例報告①

・「地域」における学校の果たす役割というのは、個人的に興味をそそられるテーマであり、その具体的事例として、大変勉強になった。

・学校としての理念や取り組みの内容が分かりやすく、かつ共感できるものであった。

・探究活動の具体的な取り組みから学校側の工夫、苦慮しているところなどがよく分かった。

・地域と結びついた、必要感のあるリアルな状況下での探究的な学びを通して、生徒が成長していく姿に感銘を受けた。特に成果を地域に還元していることや、地域の中での学校の役割が確立しているところが素晴らしいと感じた。

・地域を巻き込んで、地域の中心となって活動する生徒の姿に感銘を受けた。この取り組みを継続させている先生方の努力がしのばれるし、地域の方々の温かい視線が感じられた。

・取り組み自体が素晴らしく、活動を支援する体制など具体策についても丁寧にお話しいただいた。

・少子高齢化地域の高校の地域と一体となった先進的な取り組みが参考になった。「人みな使命あり」の方針が魅力的だ。

事例報告②

・「探究」を具体的にどのような形で導入したか、またそこにはどのような理念があったのかという、高校側の内実を知ることができ、大変勉強になった。

・何から始めたらよいか、どうすればよいか。悩んでいる部分があったので勉強になった。

・この報告は、どの高校でもすぐに活用できるとても良い事例だと感じた。

・前向きに生徒を中心に据えて考えて自己更新を続ける先生、とりわけ外とつながる意欲に溢れた先生の話はいつでも感動的だ。

・対話を重視されている点にとても賛同する。生徒が伸びる瞬間は、まさに教員や級友と対話をして、自分の興味関心が広がったときだと思うので、そのような時間を大切にしたい。

・先生は伴走者でもあるが、自分の探究として取り組んでいるからこそ進んでいくと感じた。

・先生方のビジョンから探究にたどり着いた点など、新たな気付きをいただいた。

・開拓者として苦労された点が、現状の本校の取り組みの参考になる点があった。

パネルディスカッション

・参加者からの質問をベースに、聞きたいことを聞かせていただく時間になっていたと思う。また、探究的な学びを推進していくヒントを得られた。

・探究活動の方向性がしっかりと確認できた。

・発表では分からなかったそれぞれの方のご意見や考え、取り組みなどを聞くことができ、取り組んでこられたことをより具体的に考えることができた。

・多様な観点からの高大接続の話は大変勉強になった。

・「大学組織と高校の連携」「大学の探究に関心ある教員と高校の連携」の差という点が、大変興味深いと思った。「探究が熱意ある担い手に属人的に依存している部分もある」というご指摘もあり、組織的に探究を活性化していく上での入試の重要性を再認識した。

・実践はどれも先生方の努力の結晶だと思いますので、それらの実践はとても学びが深いものだ。

・それぞれの想いが聞けてためになった。

第１分科会【国　語】

・異なる立場からの発表や意見を聞け、非常に勉強になった。これから考えていくべきことを知り、その方法についてヒントをいただいた。

・進行もスムーズで参加しやすかった。最後の協議の発表は、同じお題でもいろいろなテーマが出てきて興味深かった。大学が現在どのような授業をしているのか、見てみたいと思った。

・自分の授業や問いを見直し改善していく良い機会とアイデアをいただけたと思う。前々から考えていたことを、自信をもって実施していこうと背中を押していただいた気がした。

第２分科会【地歴・公民】

・公民科での高大接続にとても興味がわき、またその興味を十分に達成した内容であった。

・高大連携の実践における生徒の感想が聞けた一方で、質疑応答の時間が短いようにも感じた。

第３分科会【理　科】

・探究的な学びのための方向性が見えた。

・大学で実践されている魅力的なプログラムを知れた。

特別分科会①【高大接続】

・大学の意見を聞く貴重な経験となった。可能性と課題について協議できたことは非常に有意義だった。

・大学側が高校生の探究活動をどのように入試で評価し、さらに大学の授業へどのようにして接続しようとされているかが明確に理解できた。

・大学側の意見と高校側の意見を摺り合わせるような場面が持てたと感じる。

・入試を主導されている方から直接その思いを知られたのがよかった。

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

・生徒たちが経験やコミュニケーションを通して学び、成長する姿、またその場を設定されていることに感激した。私たちもさらにアクションを起こしていきたいと感じた。

・とても重要な振り返りとアウトプットの場にオンライン上で同席させていただけるという、初めての体験だった。全体発表よりむしろ、グループ内での共有や、発表準備での話し合いの中に、高校生・大学生たちの素直な気付きが多かったように思った。

・生徒・学生たちは今回の経験を前向きに捉えており、今後の学びや人生に生かしていくことを共有する機会を与えられたことはとても意義があったと思う。

２０２１年度　京都高大連携研究協議会　役員・委員一覧

■役員会

会長	黒坂　光	（大学コンソーシアム京都 理事長/京都産業大学 学長）
副会長	橋本幸三	（京都府教育委員会 教育長）
副会長	稲田新吾	（京都市教育委員会 教育長）
	佐々井宏平	（京都府私立中学高等学校連合会 会長/京都先端科学大学附属中学校高等学校 校長）
	細野　吾	（京都府立高等学校長会 会長/京都府立山城高等学校 校長）
	砂田浩彰	（京都市立高等学校長会 会長/京都市立紫野高等学校 校長）
	北村　聡	（京都府私立中学高等学校連合会 副会長/京都外大西高等学校 校長）
	鈴鹿且久	（京都商工会議所 常議員/株式会社聖護院八ツ橋總本店 代表取締役社長）
	森井秀樹	（京都文教短期大学 学長）

■運営委員会

委員長	林　信康	（京都府私立中学高等学校連合会 理事/京都女子中学校・高等学校 校長）
	永井宏和	（京都府教育庁 指導部 高校教育課 首席総括指導主事）
	吉田　功	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 首席指導主事）
	牛田豊嗣	（高等学校コンソーシアム京都 事務局長）
	福家崇明	（京都府私立中学高等学校連合会 監事/京都産業大学附属中学校・高等学校 校長 ）
	長谷川　豊	（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長/京都府立大学 公共政策学部 准教授 ）
	大秦一浩	（大学コンソーシアム京都 教育開発事業部長/大谷大学 教育推進室 副室長）
	伊勢戸　康	（大学コンソーシアム京都 事務局長）

■事務局

	藤田五樹	（京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事）
	滝本順之	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）
	宮越敬記	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）
	室　保次	（京都府私立中学高等学校連合会 事務局長）
	荻野達也	（京都商工会議所 総務部 部長）
	公益財団法人大学コンソーシアム京都 教育開発事業部	

※2021 年度の京都高大連携研究協議会事業の企画・検討は、以下に付託する。

◇高大連携推進室

室長	長谷川　豊	（京都府立大学 公共政策学部 准教授）
	佐藤賢一	（京都産業大学 生命科学部 教授）
	鮫島輝美	（京都光華女子大学 健康科学部 准教授）
	滋野哲秀	（龍谷大学 文学部 教授）
	杉岡秀紀	（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
	細尾萌子	（立命館大学 文学部 准教授）
	山本以和子	（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

第 19 回高大連携教育フォーラム

探究的な学びから研究へ
―教育改革のジャンピングボードとなるためには―

報告集

2022 年 3 月発行

京都高大連携研究協議会

京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

第19回 高大連携教育フォーラム